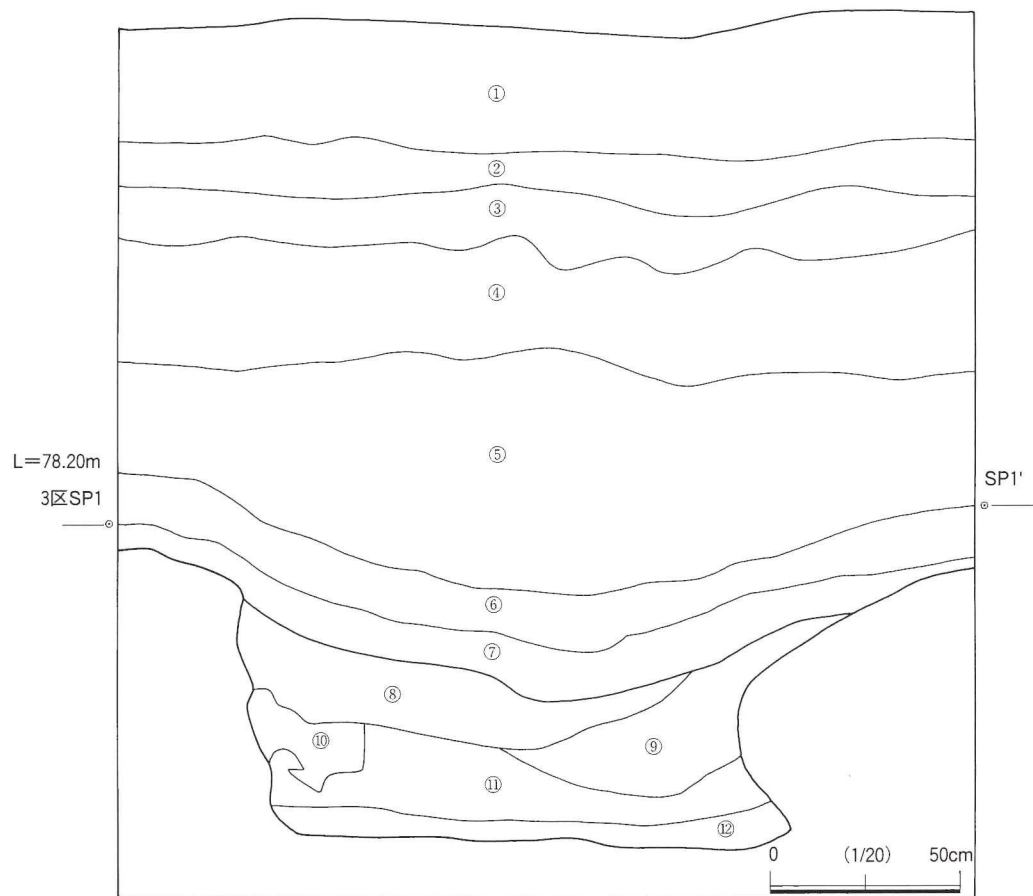




第63図 3区基本土層兼SK87土層堆積状況図

- | | |
|---------------|--|
| ①10YR3/4暗褐 | 昭和40年代は場整備時の埋土。しまり悪。 |
| ②10YR3/3暗褐 | 圃場整備前の耕作土。白色軽石粒（As-Aか・径1～2mm）少量含む。しまり悪。 |
| ③10YR2/3黒褐 | やや粘質。灰色軽石粒（As-B・径1mm）含む。 |
| ④10YR2/2黒褐 | 粘質土。古墳時代土師器小片が出土する。黄褐色スコリア粒（径1mm）少量含む。 |
| ⑤10YR3/1黒褐 | 粘質土。古墳時代土師器小片が出土する。白色軽石粒（As-C・径1～2mm）含む。 |
| ⑥10YR4/1褐灰 | 亜円～亜角礫（最大径43mm）混じり砂質土。⑦より土壌質で黒っぽい。 |
| ⑦10YR5/1褐灰 | 亜円～亜角礫（最大径68mm）混じり砂層（径1～2mm）。⑤より砂質。 |
| ⑧10YR2/1黒 | 真黒～やや灰色がかった粘質土。白色軽石粒（2～3mm）含む。 |
| ⑨10YR3/1黒 | 砂質土。ラミナ発達し、10層ほどに細分できる。自然堆積土である。 |
| ⑩10YR6/3にぶい黄褐 | 地山泥流層ブロック。袋状土坑の肩が崩落したもの。 |
| ⑪10YR2/1黒 | ⑤に似た黒灰色粘質土。縄文時代中期の遺物多量に含む。 |
| ⑫10YR4/1褐灰 | 砂質土。水成堆積か。白色軽石粒（1～2mm）少量含む。 |

第63図は、3区基本土層兼SK87土層堆積状況図である。①～⑦が基本土層。⑧～⑫は土坑覆土である。⑥⑦⑨⑫層は、流水により堆積した層であると考えられる。

①層は客土、②層は耕作土である。③層はAs-B混土層である。場所によりその下にAs-Bの純層がある場合があるが、3区では観察されなかった。④層は、いわゆるAs-B下水田土壌と似た土である。⑤層は、古墳時代遺物包含層である。出土遺物は一括上げたが報告はしていない。縄文時代遺物も混じる。⑤層下位にはAs-Cとみられる軽石の堆積があるが、再堆積と考えられる。⑥層からは縄文中期の遺物が出土しているが弥生時代後期の遺物をわずかに含む。⑦層と⑤層の漸移層である。⑦層は、砂質の縄文時代遺物包含層である。土坑の部分で大きく落ち込んでおり、土坑が埋まりきらないうちに発掘区全体を覆ったものと考えられる。

（2）土坑

3区の土坑は、一部のピット状のものや不定形のものを除くと、平面形が直径約1mほどの円形小形のものと、1×2mほどの楕円形～小判形で大形のものの2種類がある。また、断面形は、円筒状と袋状の2種類がある。袋状のものの場合、庇のように張り出した部分が崩落している場合があり、土坑覆土に地山土壌のブロックとして観察されることがしばしばある（前掲第63図－⑩層がそれである）。

土坑覆土は、粘質の黒色土に砂が薄く挟まって堆積し、ラミナを形成するもの（第63図－⑨層など）が多く、自然堆積で埋まった結果と考えられる。流れのあまり無い環境で黒色土（第63図－⑪層など）が溜り、最終的には、完全に埋まりきらないうちに、区全体を覆う砂層（第63図－⑦）で、10～20cmほどの厚さにパックされている。この砂層の堆積が、洪水などの急激な増水によるものか、河川流路が変わったことによるものかはわからないが、いずれにせよ土坑が人為的に埋められた形跡はない。この点からは、貯蔵穴である可能性が考えられる。

一方で、土坑の大きさは、円形小形のものでは蹲踞した人間が、楕円～小判形のものでは寝た人間が納まるのにちょうど良い大きさである。底面近くから、副葬品とみられる土器や、顔にかぶせたとみられる大きな土器破片が出土した土坑や、抱石とも想定できる大形の礫や多孔石が出土している土坑も多い。そのため、墓壙群である可能性も否定できず、その場合、覆土が自然堆積によることは、遺体を「水葬」した結果であると解釈するしかないだろう。

筆者は、これら土坑の性格について判断する材料を持ち合わせていないが、土坑のうちいくつかは、最終的に墓として利用されたのではないかと考えている。石匙や磨製石斧などは個人に属するものと考えられているが、こうした石器の出土も、これを裏付けるものとする。

具体的には、出土遺物からみて墓である可能性が高いものとして、ほぼ完形の彩色土器が出土したSK154・SK187、完形あるいは完形に近い小形土器と、大形土器の大破片がセットで出土したSK97・SK112・SK155・SK173、石匙が2点出土したSK87、磨製石斧が出土したSK89・SK96・SK176などをあげておきたい。このほか、太形石棒が直立していたとみられるSK164も、何らかの祭祀的行為に使用された遺構であると考えられる。

人骨の存在の有無については、SK166底面近くから、骨片が出土しており、形態的特徴からの同定作業と脂肪酸分析をそれぞれ専門家におこなっていただいた。その結果、人骨であるとの断定はできなかった。さらに、SK87・SK96・SK97の覆土についてリン・カルシウム分析をおこなった結果、SK96・SK97の覆土下部からは、上層のそれより相当高い数値が出ており、なんらかの生物遺体が存在した可能性が指摘されている。こうしたことから、なんらかの動物遺体が土坑の底面にあったことが想定され、人骨が存在した可能性も否定できないものの、確実に存在したとするに足る証拠も無いということになる。

なお、SK169、SK170の炭化物を放射性炭素年代測定した結果、BP4,100年代の結果が出ている。これがほぼ遺構構築の年代を示すものと考えられる。SK169出土の炭化材については、樹種同定もおこなった。ブナ科コナラ属クヌギ節という分析結果が出ており、具体的にはクヌギあるいはアベマキなどの材が炭化したものであると推定されている。

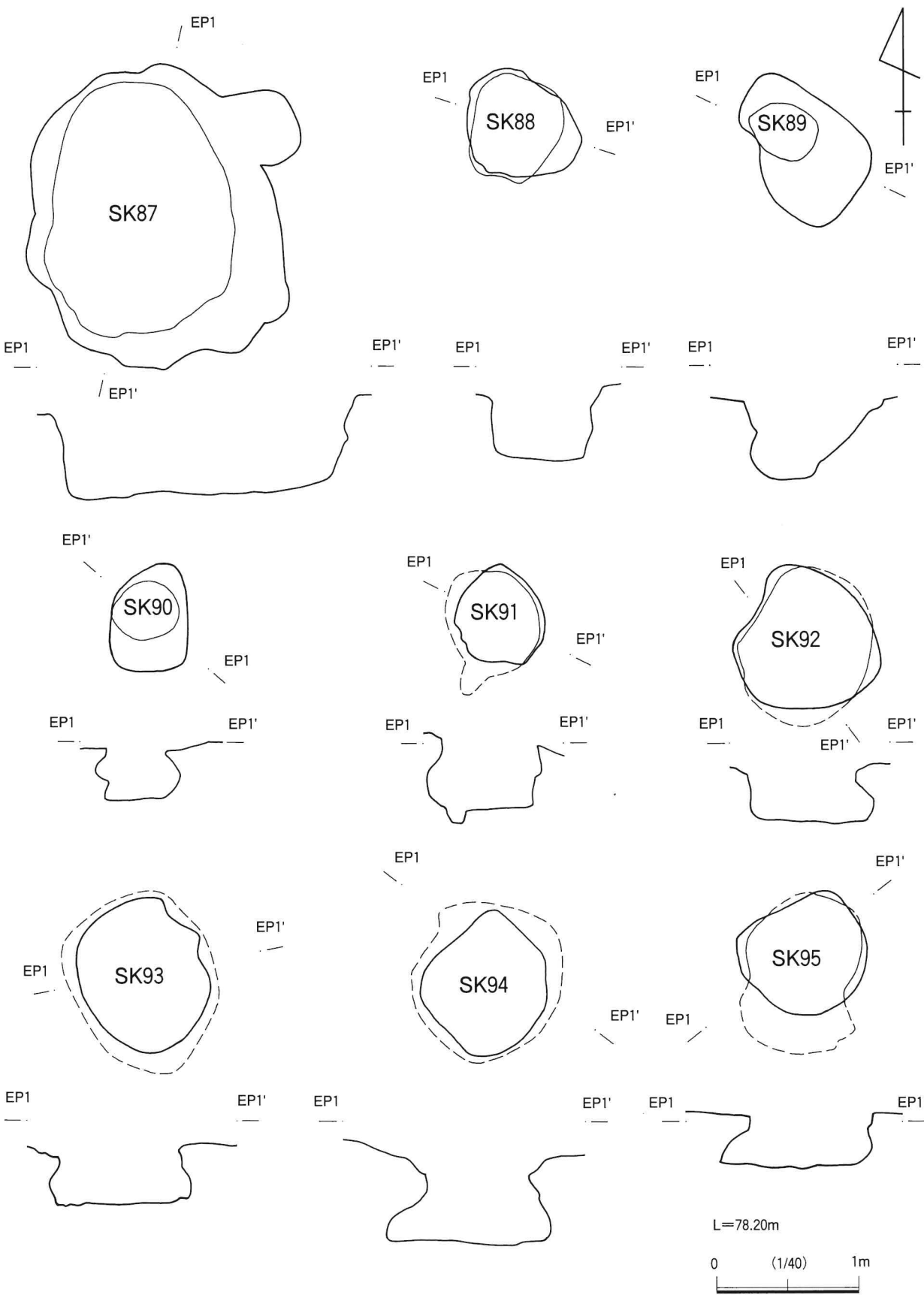
以下、土坑の図版を掲載する。個別の土坑の詳細については、図版の後に掲載した一覧表をご覧ください。

註

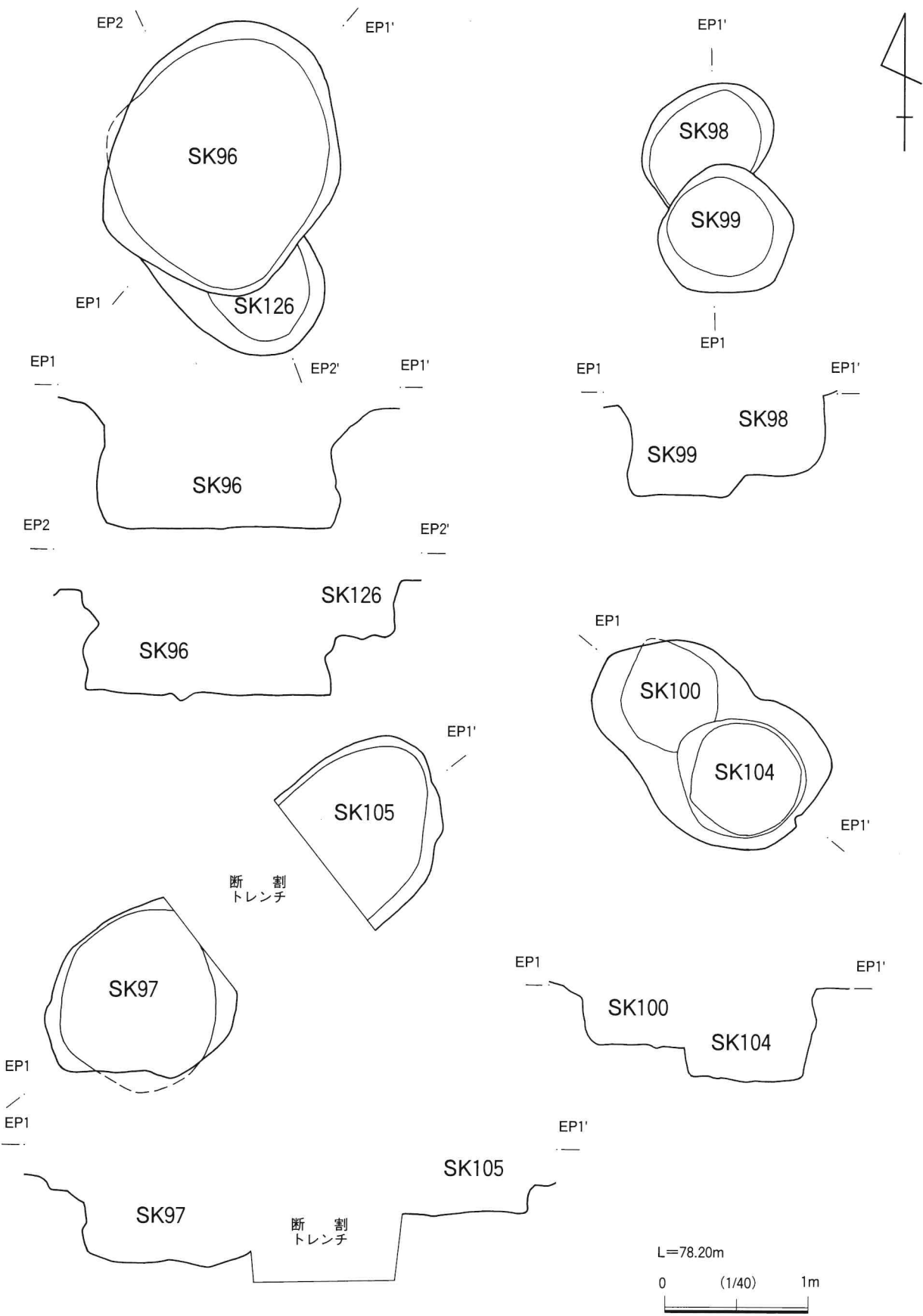
3区縄文時代遺構・遺物に関する自然科学分析の調査報告書は、委託業者から納品された状態のまま、標題を付したのみで編集せず、CD-ROM中に収録した。分析の詳細についてはそちらをご参照いただきたい。

参考文献

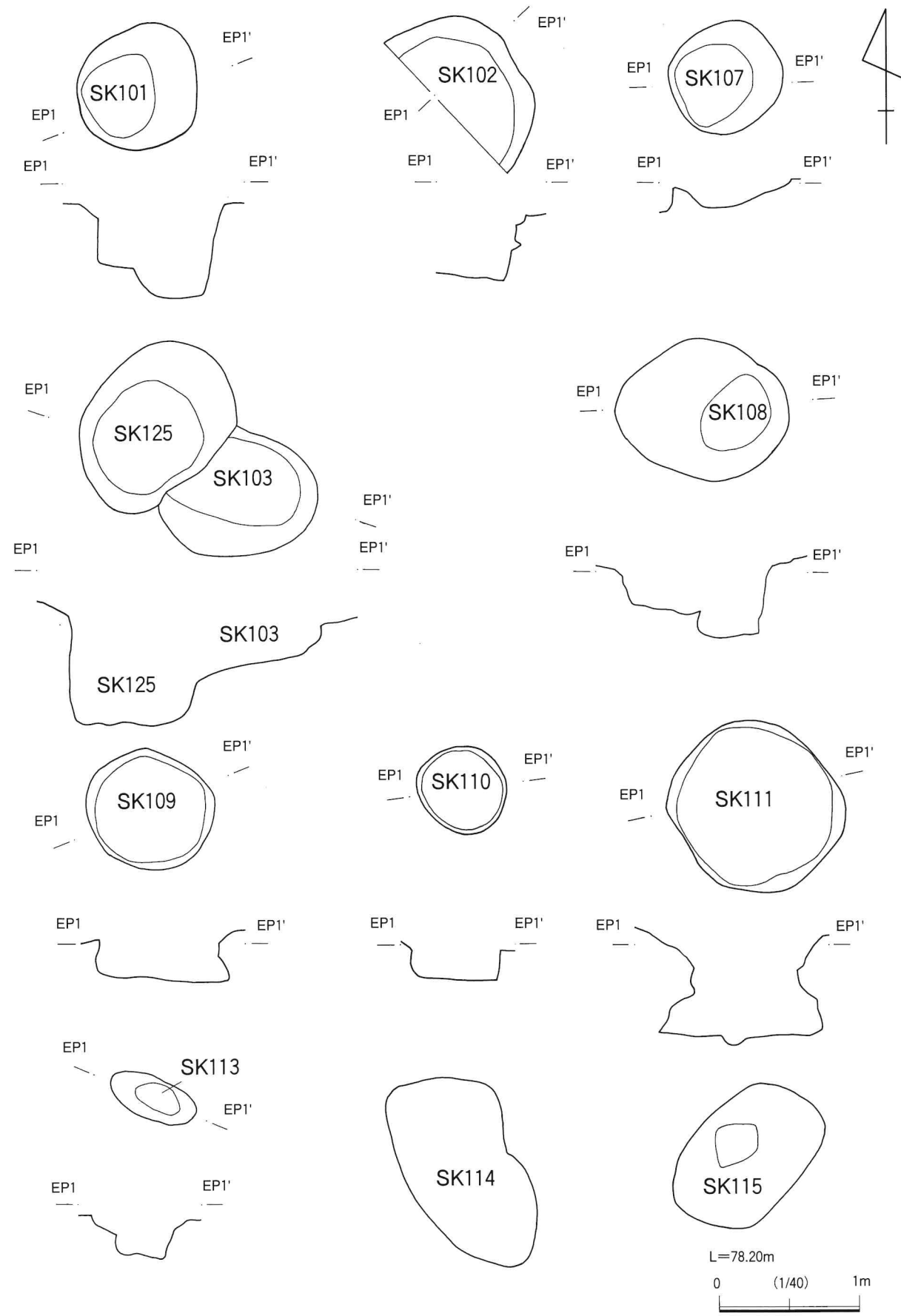
角田真也・神戸聖語2000「高崎市情報団地Ⅱ遺跡出土の彩色土器について」考古学ジャーナル454 ニューサイエンス社
角田真也2000「高崎情報団地Ⅱ遺跡の縄文時代集落」高崎市史編さんだより第21号高崎市市史編さん委員会



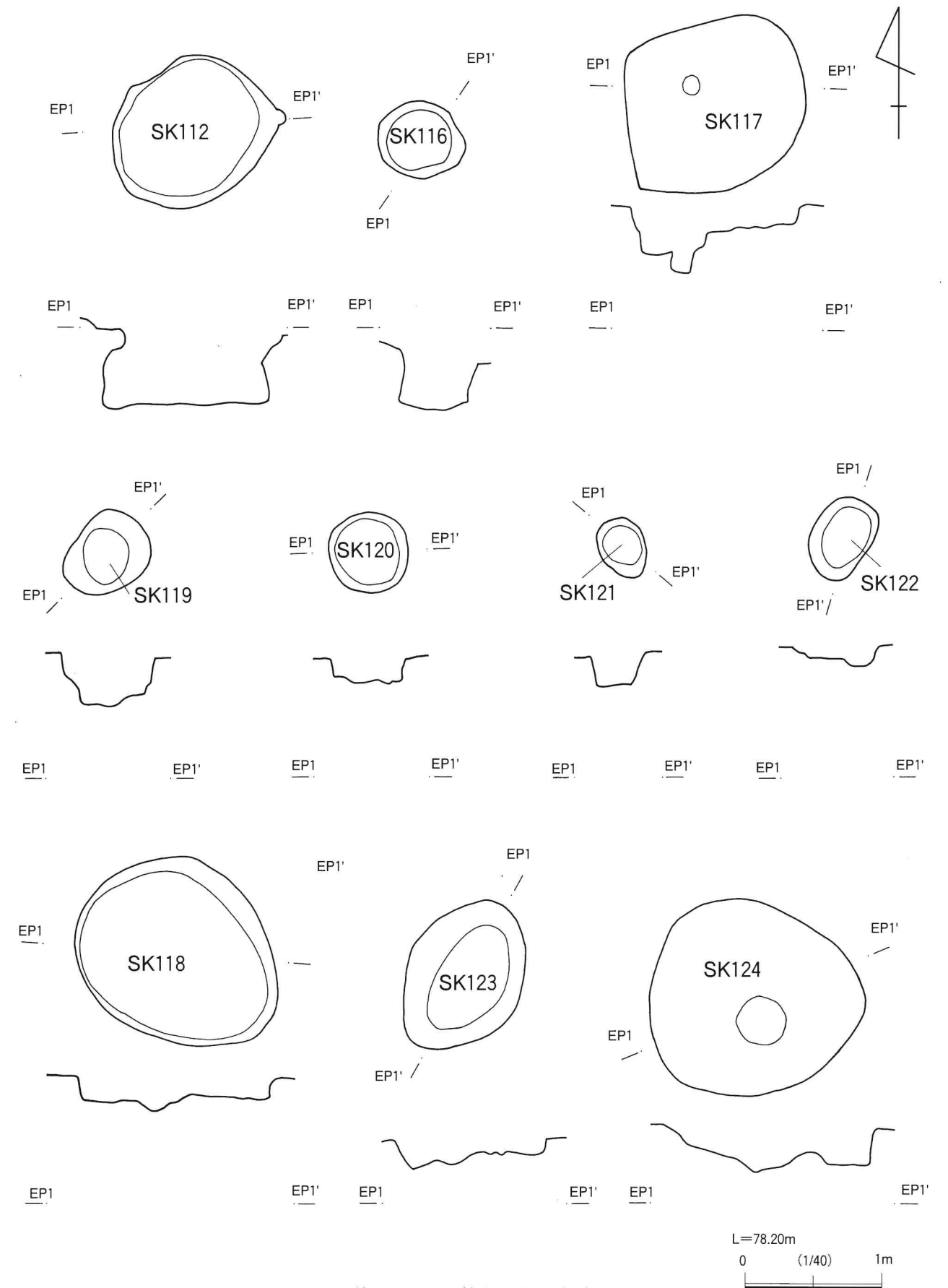
第64図 3区検出の土坑（1）



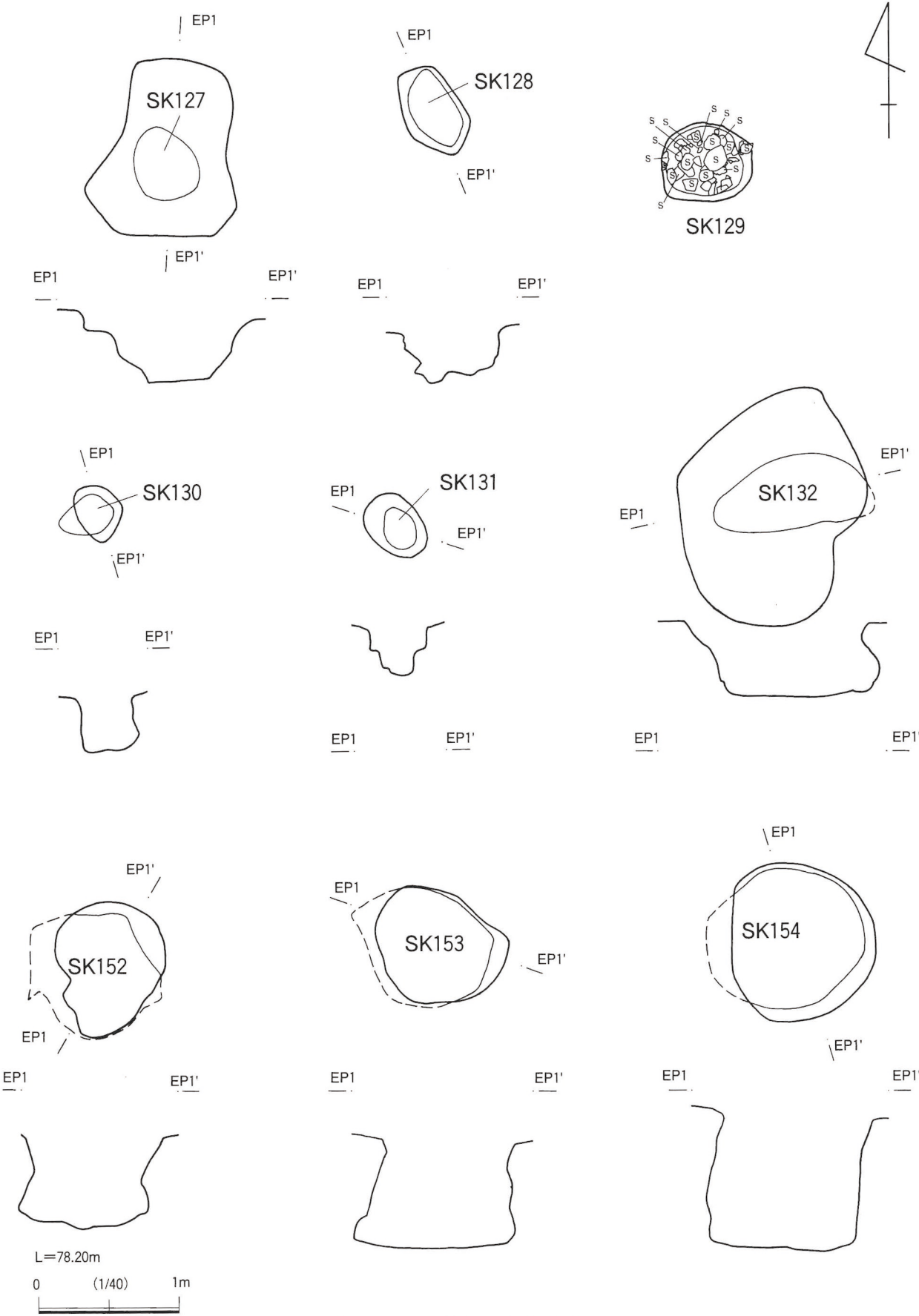
第65図 3区検出の土坑（2）



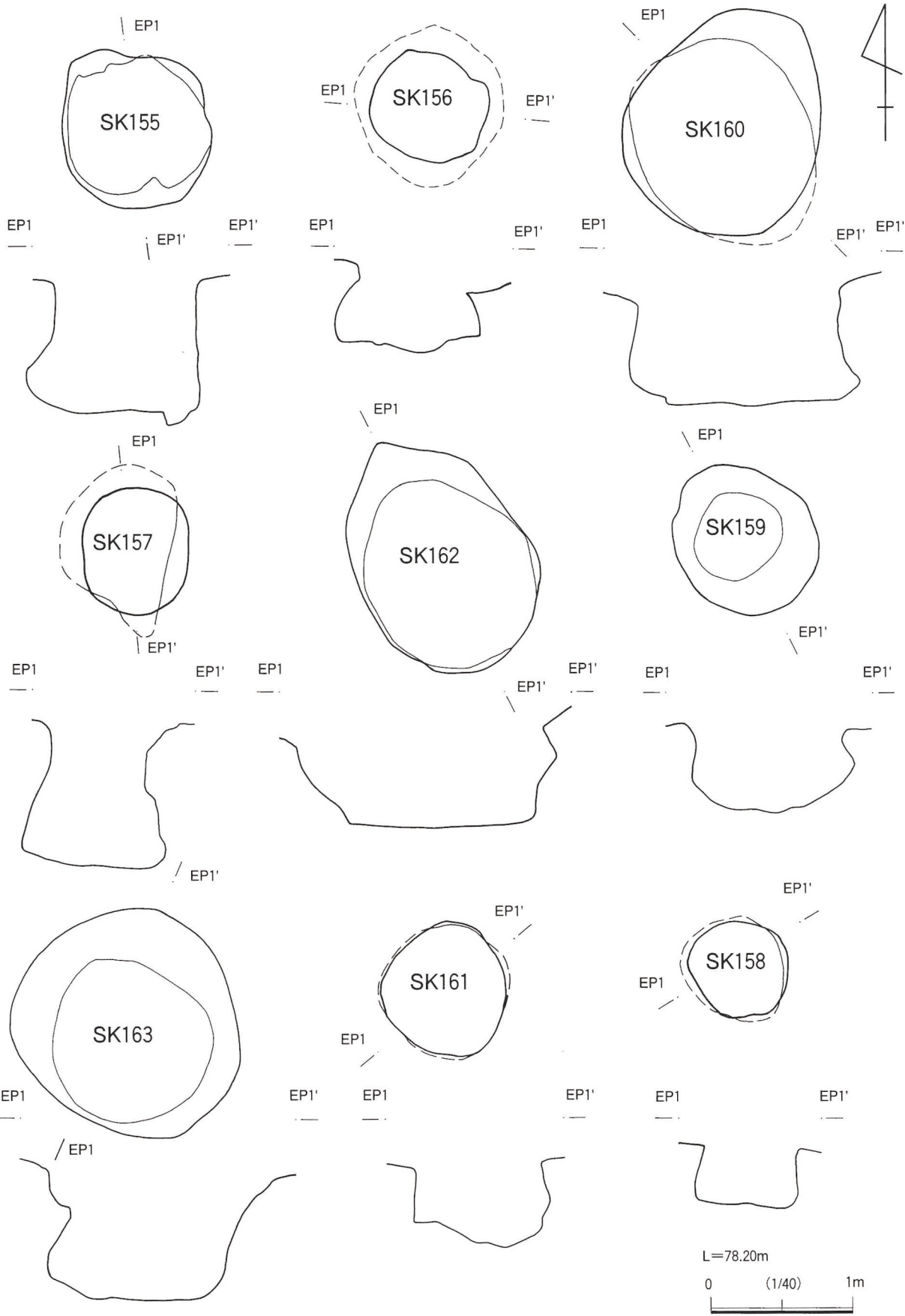
第66図 3区検出の土坑（3）



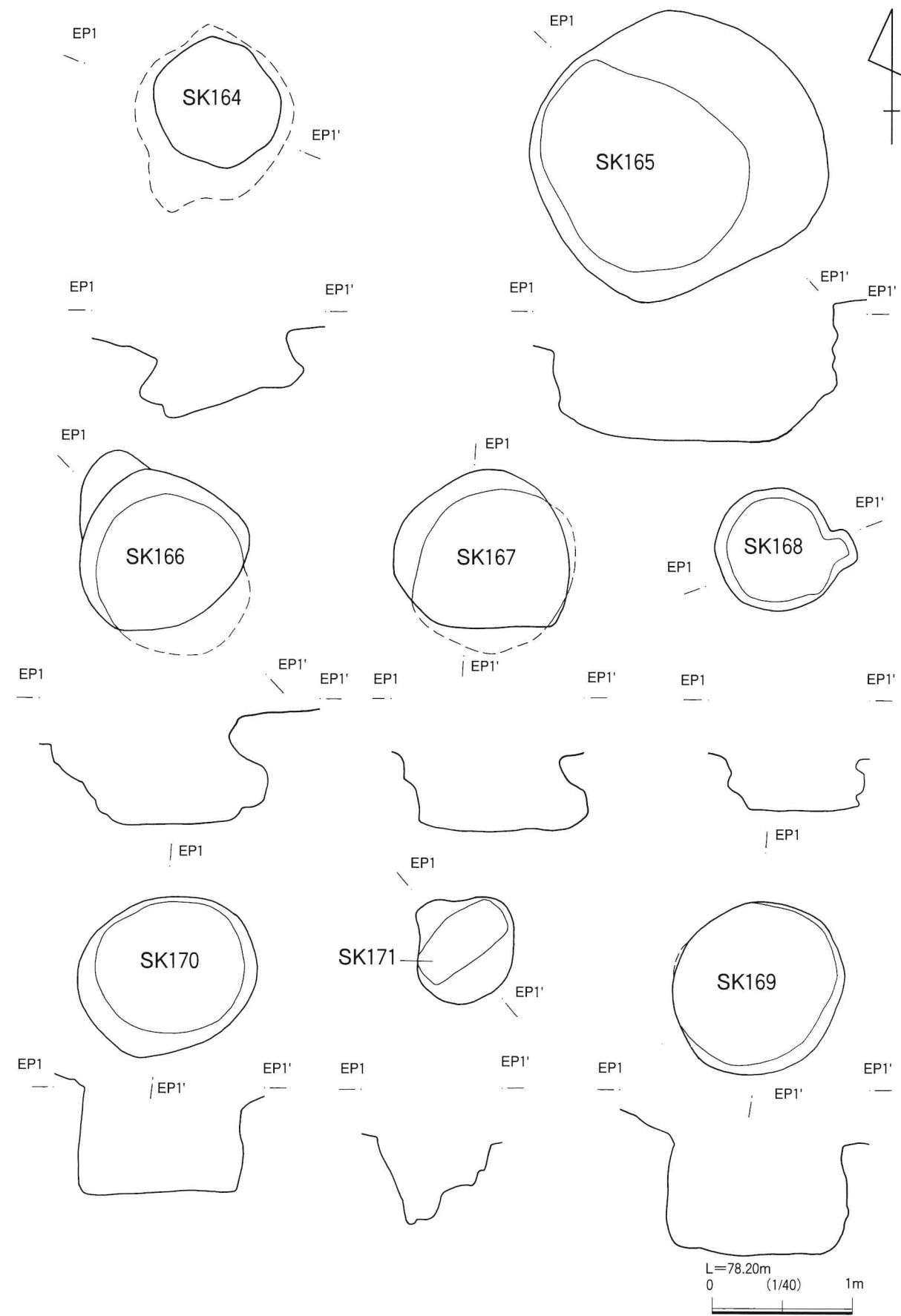
第67図 3区検出の土坑（4）



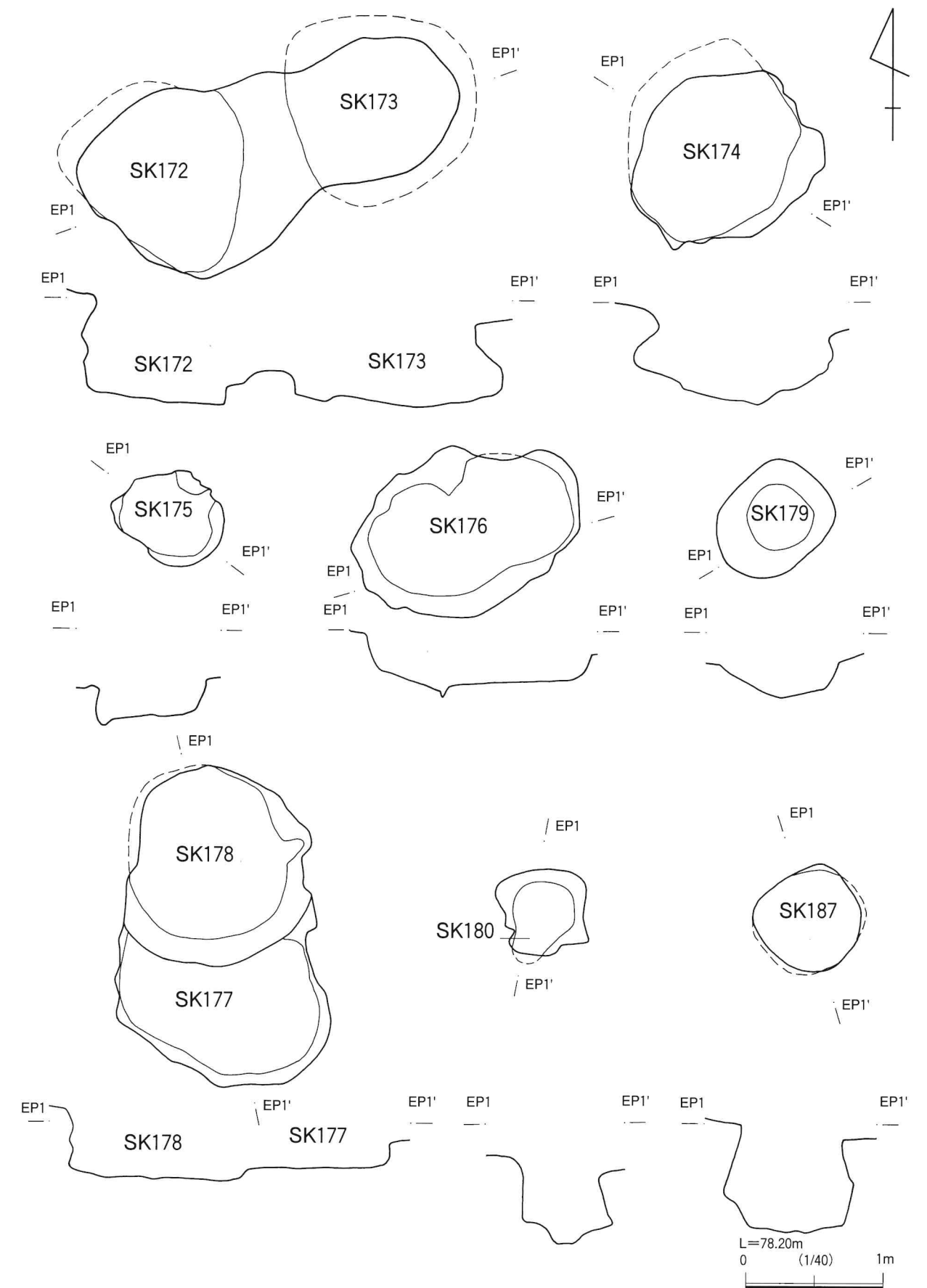
第68図 3区検出の土坑（5）



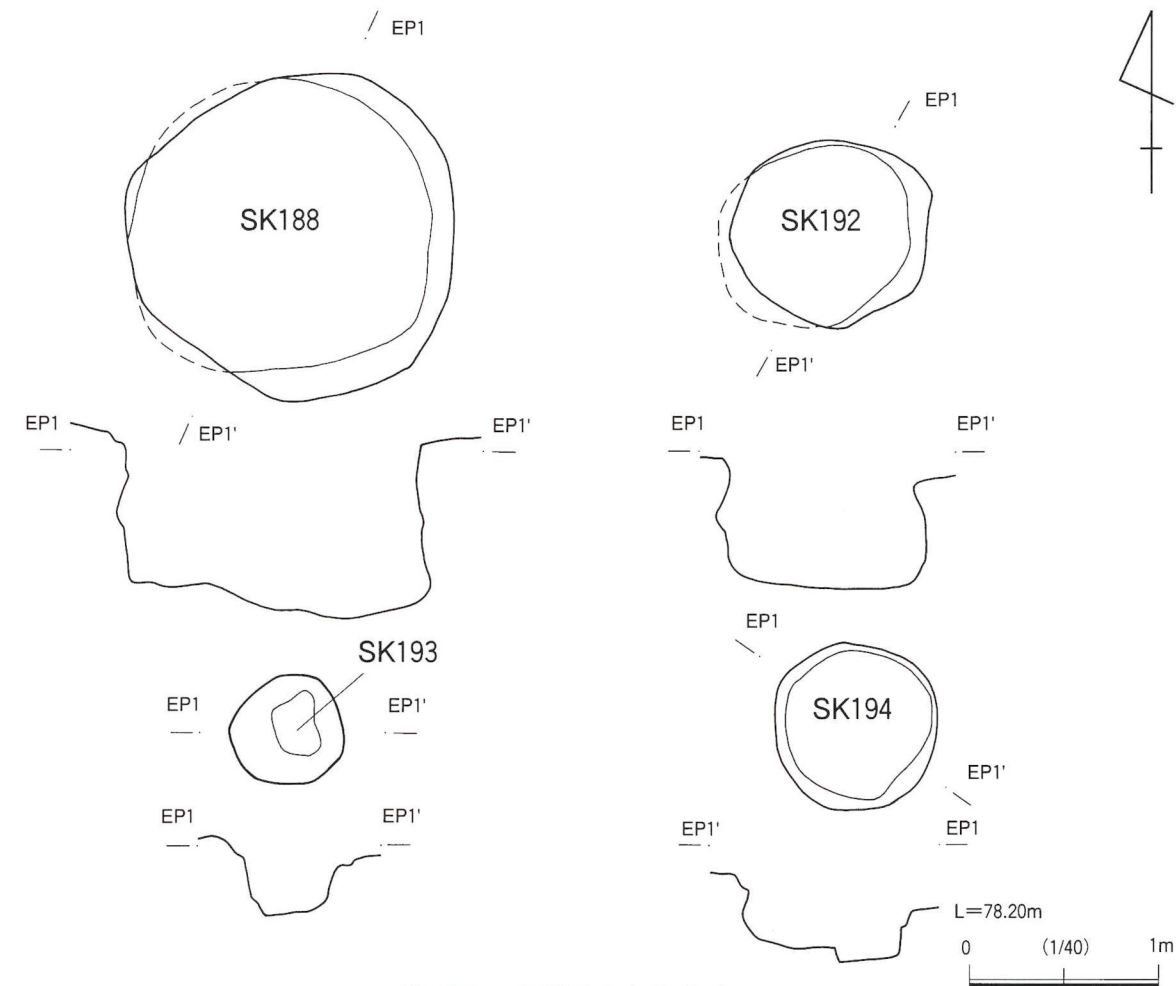
第69図 3区検出の土坑（6）



第70図 3区検出の土坑（7）



第71図 3区検出の土坑（8）



第72図 3区検出の土坑（9）

土坑の機能用途論研究では、とかく墓墳であるのか貯蔵穴であるのかが問題とされる。しかし、酸性土壌のため人骨が失われることが多いこと、構築から遺棄に至る過程で、土坑の機能用途が変化することなどから、これを確定するのは困難である。自然化学分析も有効であろうが、これと併せ、土にうがたれた穴（＝土坑）全てを、形状・出土遺物等によって型式分類するという考古学的手法をより重視する必要があるだろう。また、土坑が①占地→②構築→③使用・遺棄されるという時系列にそって、項目を整理しなければならないだろう。構築時の状態に着目した場合、単なる形状にとどまらず、どのようにして掘られたのかという点にも注目しなければならない。

以下の項目のうち、下線を引いたのが今回3区から検出した土坑の特徴である。

①占地

自然的立地 山地、台地、低地、湿地、水中
人文的立地 居住域内、居住域近隣、生産域

②構築（ ）内は目安

平面形範型 円形（1：1）、楕円～小判形（1：2）、細長形（1：3以上）、不定形
平面規模（長径） 0～50cm（中に入って掘れない）、50cm以上（中に入って掘れる）
断面形範型 皿状、擂鉢状、筒状、袋状
断面規模（深さ） 0～50cm（腕で掘れる）、50～100cm（半身で掘れる）、100cm以上（中に入れば掘れる）

③使用・遺棄

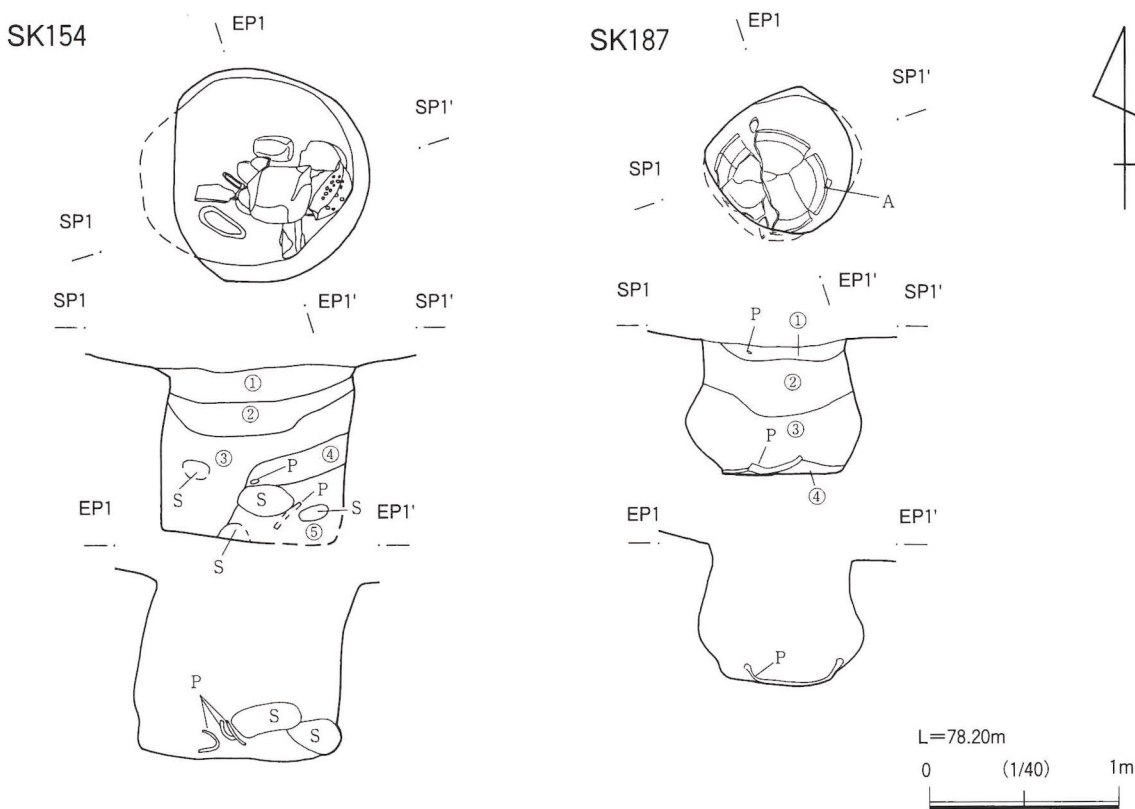
覆土 自然堆積による、人為的埋没による
遺物 遺物が多量にある、遺物が少量ある、遺物がほとんどない（遺物内容解釈は別途）

（3）SK154とSK187

SK154とSK187からは、ほぼ完形に復元できる彩色ある浅鉢形土器が出土した。そのため、特に遺物出土状況図と土層堆積状況図を掲載し、説明したい。

SK154は直径1m強の円形の平面形をもち、断面形が円筒状の土坑である。自然石や多孔石・石皿に押しつぶされるようにして、底面から浅鉢形土器が伏せた状態で発見された。この土器は全体の約3/4が残存している。土器の一部が見つからないことなどから、この浅鉢形土器は、使用中破損した土器である可能性と、完形品を人為的に破壊した土器である可能性の、双方が考えられる。

SK187からは、径1mに満たない円形の平面形を持ち、断面形は袋状である。底面から浅鉢形土器が出土している。正位で、底に貼り付けられるように据え置かれており、「埋鉢」とでも呼べる状態であった。ほぼ完形に復元出来るが、口縁の一部が欠落しており、この土坑に納める前に割り取られていた可能性がある。



第73図 SK154・SK187遺物出土状況図および土層堆積状況図

- 3区SK154
①10YR2/1黒 黒色粘質土。
②10YR3/2黒褐 砂質土と黒色粘質土の混じり層。地山褐色粘土（径～10mm）多量に含む。
③10YR1.7/1黒 黒色粘質土。
④10YR2/1黒 黒色粘質土。砂質土を含む。白色軽石粒（径～5mm）少量含む。
⑤10YR1.7/1黒 黒色粘質土。③に似る。
3区SK187
①10YR3/2黒褐 礫少量含む。
②10YR2/1黒 黒色粘質土。地山褐色粘土（径～10mm）多量に含む。
③10YR1.7/1黒 ②と似る。地山褐色粘土（径～50mm）やや多く含む。ラミナが発達する。
④10YR3/2黒褐 砂質土。

表3 3区土坑一覧表

遺構名	検出位置	規模（m）	平面形状	主軸方向	断面形状	覆土（cm）	重複関係	時代	時期	備 考
SK87	3区	2.15×1.70	不整円形	南北が軸	円筒状	90	なし	縄文	中期	
SK88	3区	0.87×0.73	不整円形	北－45°－西	円筒状	40	なし	縄文	中期	石を大量に出土。
SK89	3区	1.12×0.76	不整楕円形	北－25°－西	不整形	58	なし	縄文	中期	
SK90	3区	1.88×1.26	不整円形	北－10°－東	袋状	40	なし	縄文	中期	
SK91	3区	0.91×0.83	不整円形	南北が軸	袋状	48	なし	縄文	中期	石を大量に出土。
SK92	3区	1.00×0.95	円形	北－38°－西	袋状	36	なし	縄文	中期	
SK93	3区	0.97×0.87	円形	南北が軸	袋状	32	なし	縄文	中期	
SK94	3区	1.57×1.06	円形	東－40°－北	袋状	56	なし	縄文	中期	石を大量に出土。
SK95	3区	0.92×0.90	円形	北－5°－東	円筒状	30	なし	縄文	中期	
SK96	3区	2.00×1.70	不整円形	北－40°－東	袋状	74	SK126・127を切る	縄文	中期	大形
SK97	3区	（×1.15）	不明	－	袋状	50	なし	縄文	中期	試掘により北側が破壊される。
SK98	3区	（×0.94）	不明	－	円筒状	52	SK99に切られる	縄文	中期	石を大量に出土。
SK99	3区	0.96×0.92	円形	南北が軸	袋状	66	SK98を切る	縄文	中期	石を大量に出土。
SK100	3区	（×0.80）	不明	－	袋状	43	SK104に切られる	縄文	中期	
SK101	3区	0.95×0.88	円形	北－35°－東	円筒状	64	なし	縄文	不明	
SK102	3区	（1.27×）	不明	－	円筒状	43	SK105を切る	縄文	中期	試掘により南西側が攪乱される。
SK103	3区	1.28×0.95	不整楕円形	北－45°－西	ボウル状	30	SK125に切られる	縄文	中期	上面に石が集中して出土。
SK104	3区	0.93×0.85	円形	西－38°－北	円筒状	63	SK100を切る	縄文	中期	石を大量に出土。
SK105	3区	－	楕円形	東－40°－北	皿状	16	SK102に切られる	縄文	中期	試掘により西側が攪乱される。石を大量に出土。
SK107	3区	0.80×0.76	円形	東－34°－北	皿状	20	なし	縄文	中期	
SK108	3区	1.30×1.00	楕円形	東－14°－北	不整形	50	なし	縄文	中期	南側が攪乱される。
SK109	3区	（0.93×）	円形	－	袋状	24	なし	縄文	中期	北側が攪乱される。
SK110	3区	0.68×0.62	円形	北－4°－西	円筒状	22	なし	縄文	中期	
SK111	3区	1.22×1.13	円形	北－25°－西	袋状	66	なし	縄文	中期	底部に小ピット有り。石出土。

SK112	3区	1.20×1.05	楕円形	北－45°－東	袋状	50	なし	縄文	中期	上面に石が集中して出土。
SK113	3区	0.67×0.30	小判形	西－20°－北	不整形	28	なし	縄文	不明	
SK114	3区	1.50×0.80	不整楕円形	北－35°－西	－	－	なし	縄文	中期	上部から大きな石出土。
SK115	3区	1.16×0.77	小判形	北－40°－東	－	－	なし	縄文	中期	
SK116	3区	0.65×0.55	円形	西－20°－東	円筒状	44	なし	縄文	中期	上部から大きな石出土。
SK117	3区	1.55×1.35	不整楕円形	北－45°－東	不整形	50	なし	縄文	中期	
SK118	3区	1.60×1.30	楕円形	北－45°－西	不整形	30	なし	縄文	不明	
SK119	3区	0.70×0.53	楕円形	東－40°－北	ボウル状	40	なし	縄文	不明	
SK120	3区	0.60×0.60	円形	南北が軸	円筒状	20	なし	縄文	不明	
SK121	3区	0.45×0.35	楕円形	北－40°－西	ボウル状	22	なし	縄文？	不明	出土土器なし。
SK122	3区	0.62×0.43	楕円形	北－30°－東	不整形	10	なし	縄文	不明	
SK123	3区	1.29×0.77	楕円形	北－35°－東	不整形	22	なし	縄文	中期	
SK124	3区	1.58×1.51	不整円形	東－24°－北	不整形	30	なし	縄文	中期	
SK125	3区	（1.30×）	不明	－	円筒状	78	SK103を切る	縄文	中期	遺物多量出土。上面より大きな石出土。
SK126	3区	（×0.98）	不明	－	円筒状	40	SK96に切られる	縄文	中期	残存状況悪し。
SK127	3区	1.25×1.07	不整楕円形	北－3°－東	不整形	46	なし	縄文	中期	
SK128	3区	0.68×0.43	不整楕円形	北－30°－西	不整形	40	なし	縄文	中期	
SK129	3区	0.68×0.61	円形	東－31°－北	－	－	なし	縄文	中期	石を大量に出土。
SK130	3区	0.43×0.32	円形	北－10°－西	円筒状	39	なし	縄文	中期	
SK131	3区	0.51×0.31	楕円形	北－39°－西	不整形	36	なし	縄文	中期	
SK132	3区	（×1.31）	不明	－	袋状	50	なし	縄文	中期	掘りすぎ。溝状遺構に切られる。
SK152	3区拡張部	1.05×1.00	不整形	南北が軸	袋状	60	なし	縄文	中期	下部に石出土。
SK153	3区拡張部	1.15×0.84	不整円形	東西が軸	袋状	74	なし	縄文	中期	下部に大きな石出土。
SK154	3区拡張部	1.20×1.13	不整円形	－	袋状	90	なし	縄文	中期	下部から大きな石、及び彩色浅鉢出土。
SK155	3区拡張部	1.28×1.17	不整円形	南北が軸	袋状	86	なし	縄文	中期	下部に石出土。

SK156	3区拡張部	(1.14× 1.08)	不整形	南北が軸	袋状	70	なし	縄文	中期	下部に大きな石出土。
SK157	3区拡張部	1.22×0.91	楕円形	南北が軸	袋状	100	なし	縄文	中期	
SK158	3区拡張部	0.72×0.63	楕円形	北－35°－西	袋状	40	なし	縄文	中期	
SK159	3区拡張部	1.11×0.98	楕円形	北－35°－西	ボウル状	59	なし	縄文	中期	下部に大きな石出土。
SK160	3区拡張部	1.61×1.38	不整形	南北が軸	袋状	100	なし	縄文	中期	下部に大きな石出土。
SK161	3区拡張部	0.90×0.86	不整円形	南北が軸	袋状	40	なし	縄文	中期	下部に大きな石出土。
SK162	3区拡張部	1.75×1.22	不整楕円形	北－28°－西	ボウル状	70	なし	縄文	中期	下部に石出土。
SK163	3区拡張部	1.64×1.48	不整円形	北－38°－西	袋状	80	なし	縄文	中期	下部に石出土。
SK164	3区拡張部	0.93×0.89	不整円形	南北が軸	袋状	45	なし	縄文	中期	石を大量に出土。
SK165	3区拡張部	2.14×2.10	不整円形	西－8°－北	ボウル状	80	なし	縄文	中期	石を大量に出土。
SK166	3区拡張部	1.52×1.16	不整形	北－40°－西	円筒状	54	なし	縄文	中期	石を大量に出土。骨片出土。
SK167	3区拡張部	1.56×1.18	不整形	北－47°－西	袋状	54	なし	縄文	中期	下部に石出土。
SK168	3区拡張部	径0.80	円形	－	袋状	40	なし	縄文	中期	下部に石出土。
SK169	3区拡張部	1.42×1.18	不整円形	北－42°－東	袋状	80	なし	縄文	中期	石を大量に出土。
SK170	3区拡張部	1.30×1.08	楕円形	北－22°－北	円筒状	64	なし	縄文	中期	遺物・石が大量に出土。
SK171	3区拡張部	0.82×0.68	不整円形	北－40°－東	不整形	59	なし	縄文	中期	
SK172	3区拡張部	－	不明	－	円筒状	42	SK173を切る	縄文	中期	遺物が大量に出土。
SK173	3区拡張部	－	不明	－	袋状	44	SK172に切られる	縄文	中期	
SK174	3区拡張部	1.40×1.20	不整形	北－45°－東	円筒状	43	なし	縄文	中期	
SK175	3区拡張部	0.78×0.60	不整形	北－55°－西	円筒状	26	なし	縄文	中期	
SK176	3区拡張部	1.66×1.24	不整楕円形	東－16°－北	円筒状	30	なし	縄文	中期	石が出土。
SK177	3区拡張部	(1.50×)	不整形	－	円筒状	20	SK178に切られる	縄文	中期	
SK178	3区拡張部	1.44×1.30	不整形	－	円筒状	40	SK177を切る	縄文	中期	下部に大きな石出土。
SK179	3区拡張部	0.90×0.74	楕円形	北－40°－東	不整形	35	なし	縄文	中期	下部に大きな石出土。
SK180	3区拡張部	0.86×0.80	不整形	南北が軸	不整形	70	なし	縄文	中期	石が出土。

SK187	3区拡張部	0.80×0.70	不整円形	北－21°－東	袋状	70	なし	縄文	中期	
SK188	3区拡張部	1.76×1.70	不整円形	東－40°－北	袋状	90	なし	縄文	中期	遺物・石が大量に出土。
SK192	3区拡張部	1.10×0.98	不整円形	東－25°－北	袋状	56	なし	縄文	中期	下部に大きな石出土。
SK193	3区拡張部	0.90×0.76	不整形	北－30°－西	ボウル状	40	なし	縄文	中期	
SK194	3区拡張部	径0.90	円形	－	ボウル状	30	なし	縄文	中期	

第2節 3区の遺物

(1) 概要

3区の土坑からは大量の遺物が出土した。土器は、多量の深鉢形土器と、彩色のある浅鉢形土器などが出土している。2区出土のものとは比べて残存状態がよく、完形あるいは完形に近い土器や大きな破片が多い。土器型式では、勝坂式～加曽利E2式を確認しているが、加曽利E1式併行の土器がほとんどで、2区よりも、やや古い時代が中心のようである。SK104からは、土器の顔面把手部分が出土しており、土器図版中に掲載している。

石器は、多量の打製石斧のほか、磨製石斧、敲石、磨石、石皿、多孔石などが出土した。報告したのは、遺構から出土した定型的な石器のみであり、使用痕ある剥片や二次調整剥片は報告していない。最も出土量が多い石器は打製石斧であるが、上層からの出土例が多い。形態はほとんどが短冊形で、使用痕のついているものもある。

(2) 土器

以下の文章は、3区出土土器のCD-ROM中一覧表を補うものである。彩色土器は、次の項で触れる。

3区出土土器のうち、遺構外の砂層出土土器は報告していない。これらの保存状態は悪く、表面が荒れ、割れ口は摩滅しており、近隣から水力で移動してきたことを示しているものと考えられる。

今回報告した土坑出土土器の概要は、次の通りである。

勝坂式系の土器は、SK155・SK111から典型的な勝坂Ⅳ式が出土しているが、出土数は少ない。SK104出土の顔面把手もまた、この段階のものであろう。全般的に、長石・石英や黒雲母などの多く含まれた赤っぽい焼きのものが多い。SK96やSK153、SK155からは、勝坂式系土器に加曽利E1式併行期の土器が伴って出土している。

阿玉台式系の土器は、SK99・SK104・SK108・SK155などから小破片が出土しているが、ほとんど目立たない。焼きは良く堅緻で、胎土に金雲母を含む。

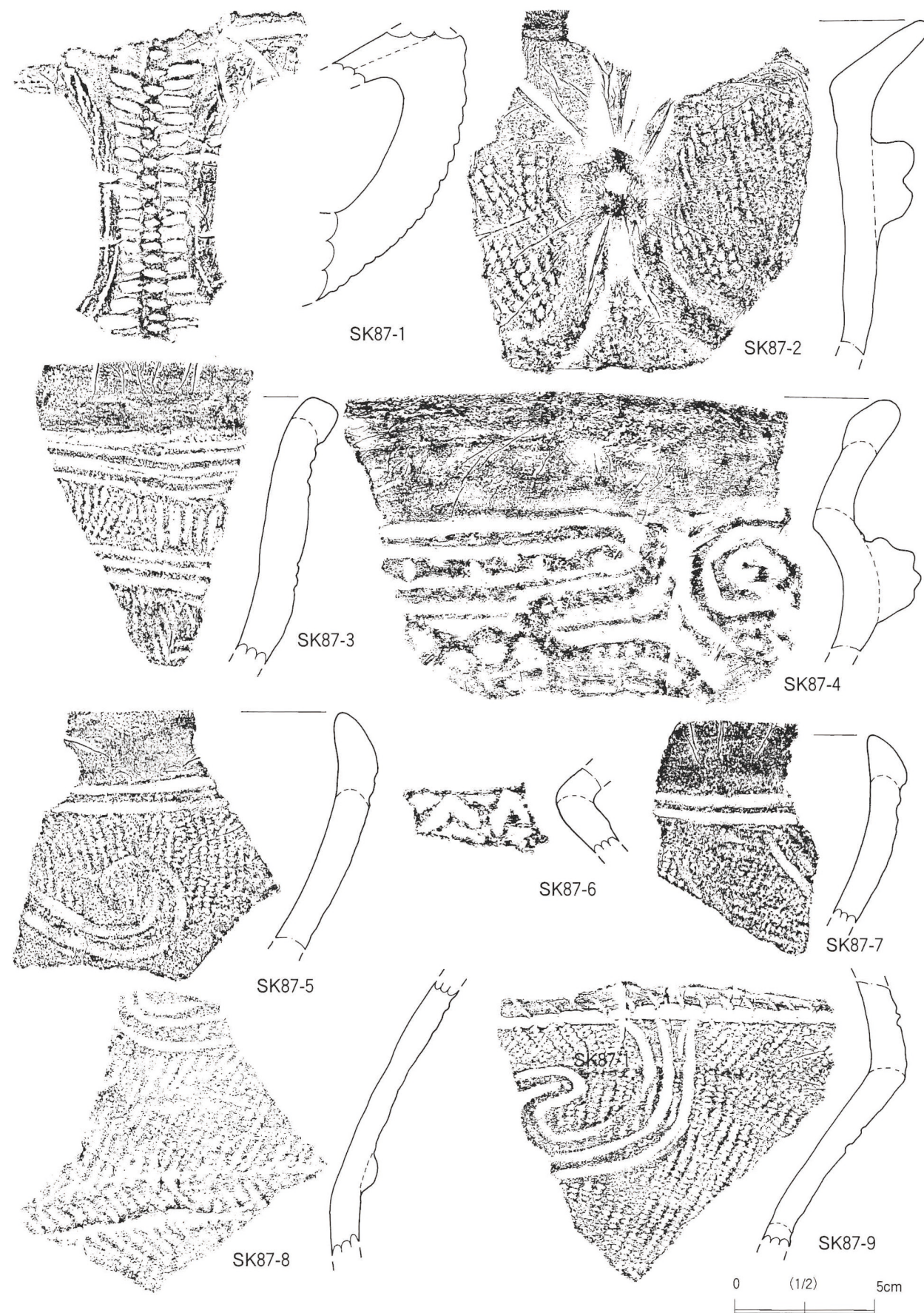
加曽利E1～E2段階とみられる土器は、最も多く出土している。SK87・SK97出土土器などがこの中でも古い段階のものと考えられるが、この時期、典型的な加曽利E1式土器は少なく、多彩な土器が見つかっており、群馬県地域の特徴を示しているといえる。SK154からは、加曽利E1～E2段階の土器が出土している。地文は捺糸文のものが多く、この地域に特徴的である。SK169、SK170、SK172、SK173、SK188などから出土している土器も、この時期のものと考えられる。なお、第102図のSK170-25は、ほかの土器とは器形や、胎土・色調などの雰囲気が違う。大木系の土器であろうか。

同じ段階の土器でも、浅鉢形土器と深鉢形土器では、表面の胎土が異なる傾向が見受けられる。

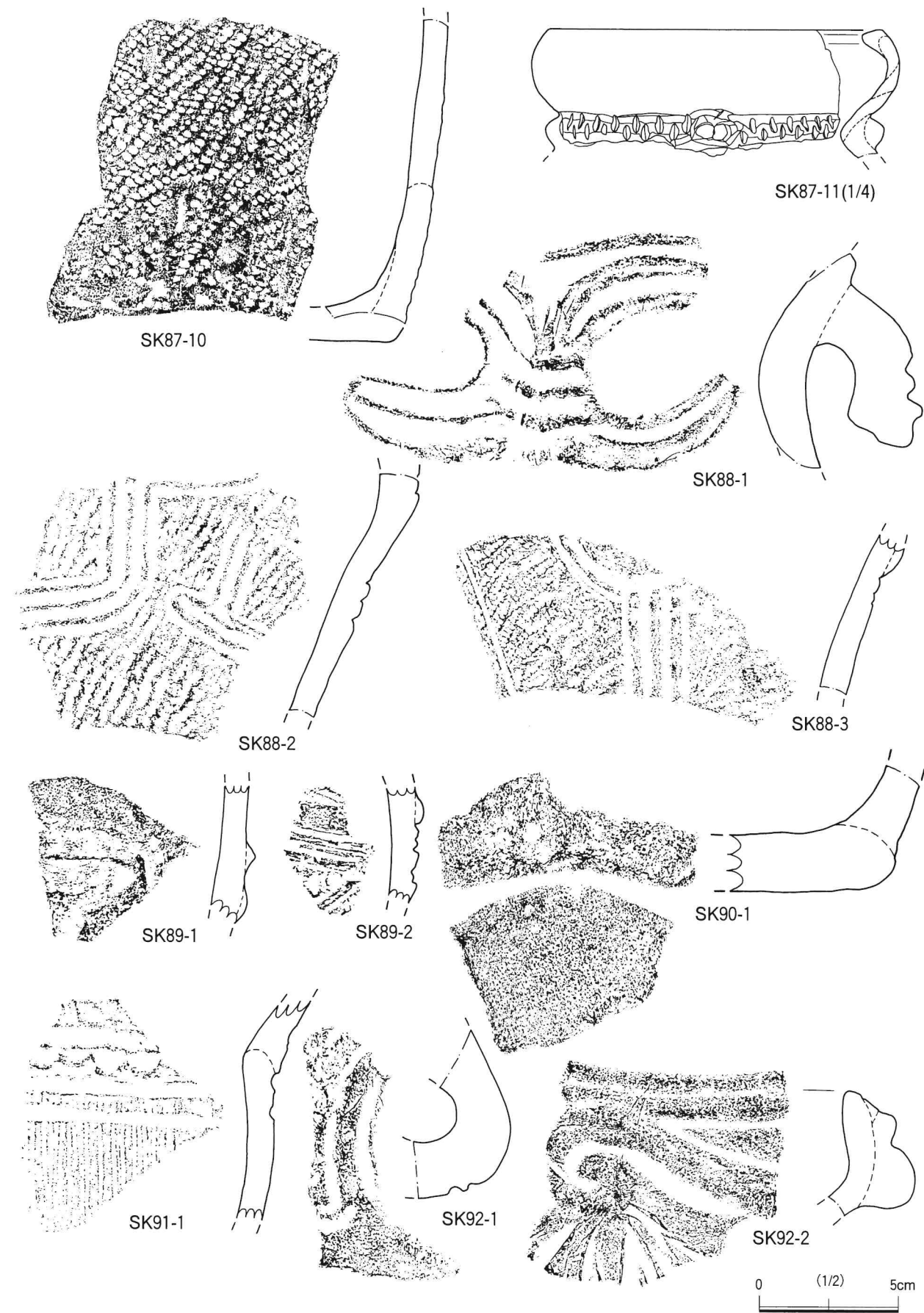
浅鉢形土器の胎土は、表面近くできめ細かく、化粧粘土とでも呼ぶべきものである。ただ、この化粧粘土は風化・剥落しやすいようで、彩色とともににはげ落ちてしまっているものも多くある。表面がこうした粘土で覆われている一方で、浅鉢形土器の破断面や深鉢形土器を観察すると、内部には大きな砂粒が含まれていることが多い。この場合、結晶片岩、特に雲母片岩などが含まれているケースが多く、川砂などが多く含まれているケースは少ない。そのため、3区出土の土器胎土中に含まれている結晶片岩類は、結晶片岩礫を人為的に破碎した後、胎土に混入した可能性が高いものと考えられる。

こうしたことから、土器の胎土は採取された後に、土器の形を作る段階で、砕いた結晶片岩などを混入して使われたものと考えられる。これは、大形品を制作するために、形をもたせる必要から、大きな砂粒を胎土に含ませたためであろう。またその一方で、浅鉢形土器の表面を仕上げる段階では、精選されたきめ細かな粘土を用いている。これは、彩色するために、平滑な表面を準備する必要があったためであろう。

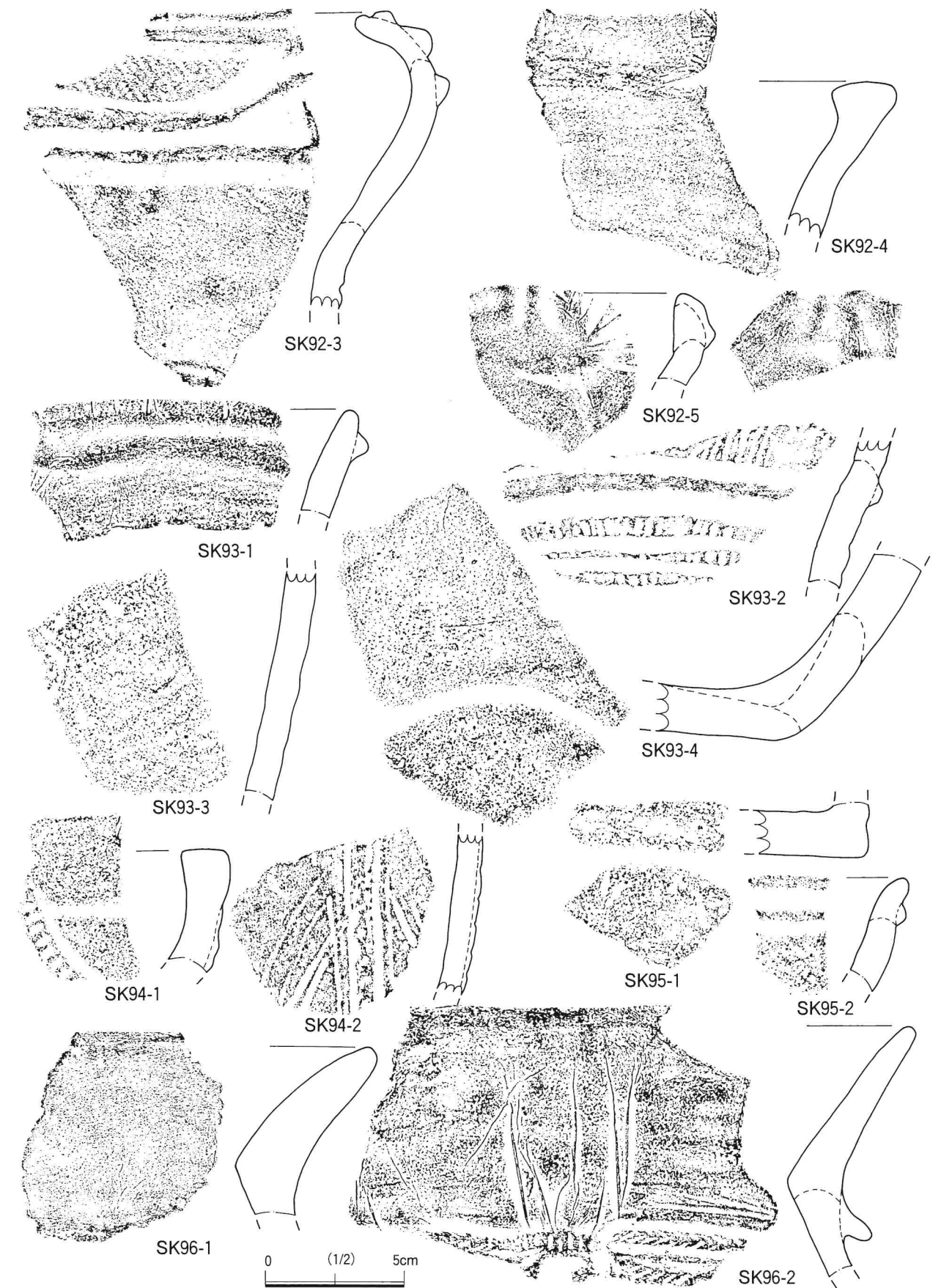
こうした2種類の胎土を使い分けたため、特にきめ細かい部分が剥落しやすいものと考えられる。



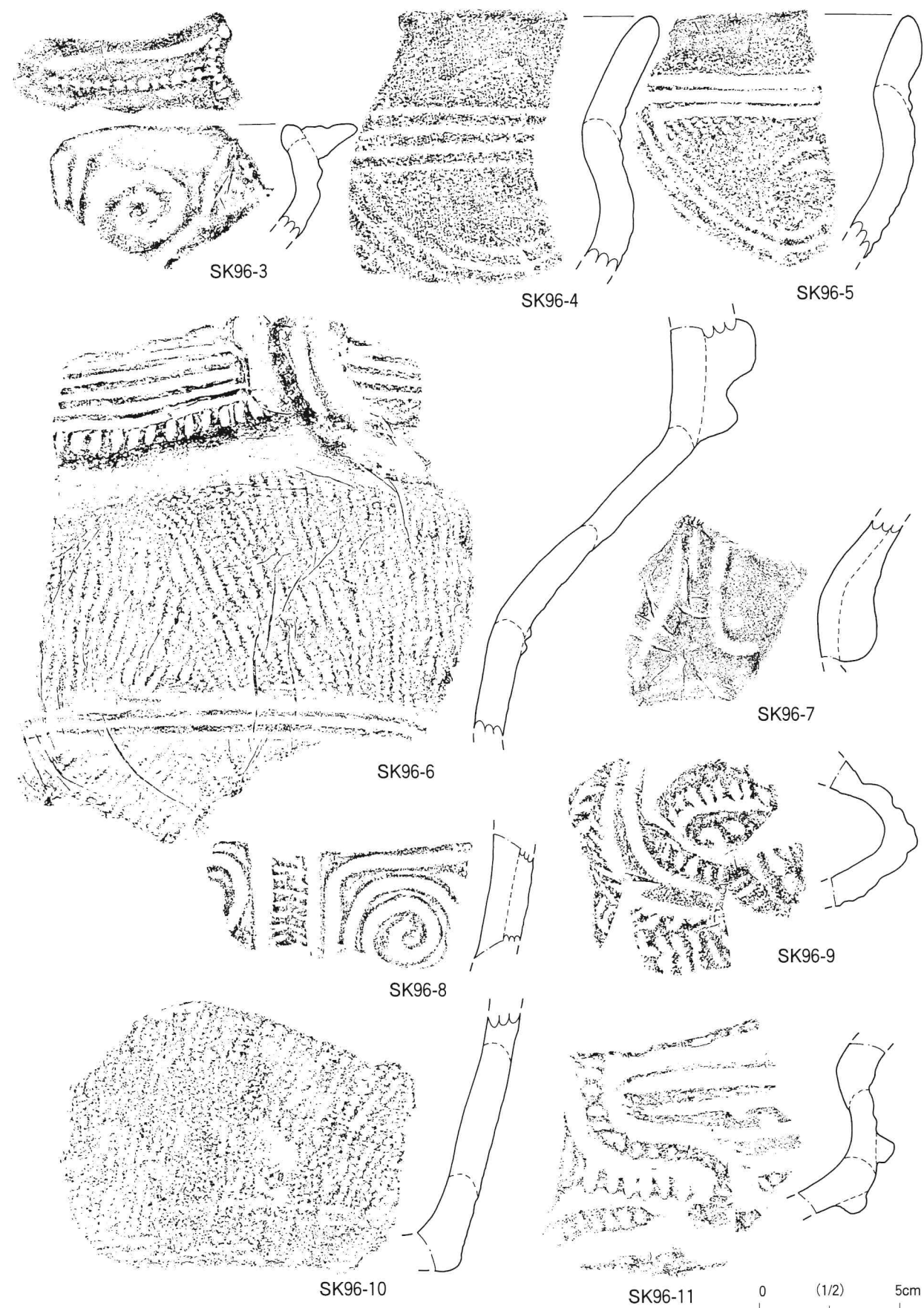
第74図 3区土坑出土土器（1）



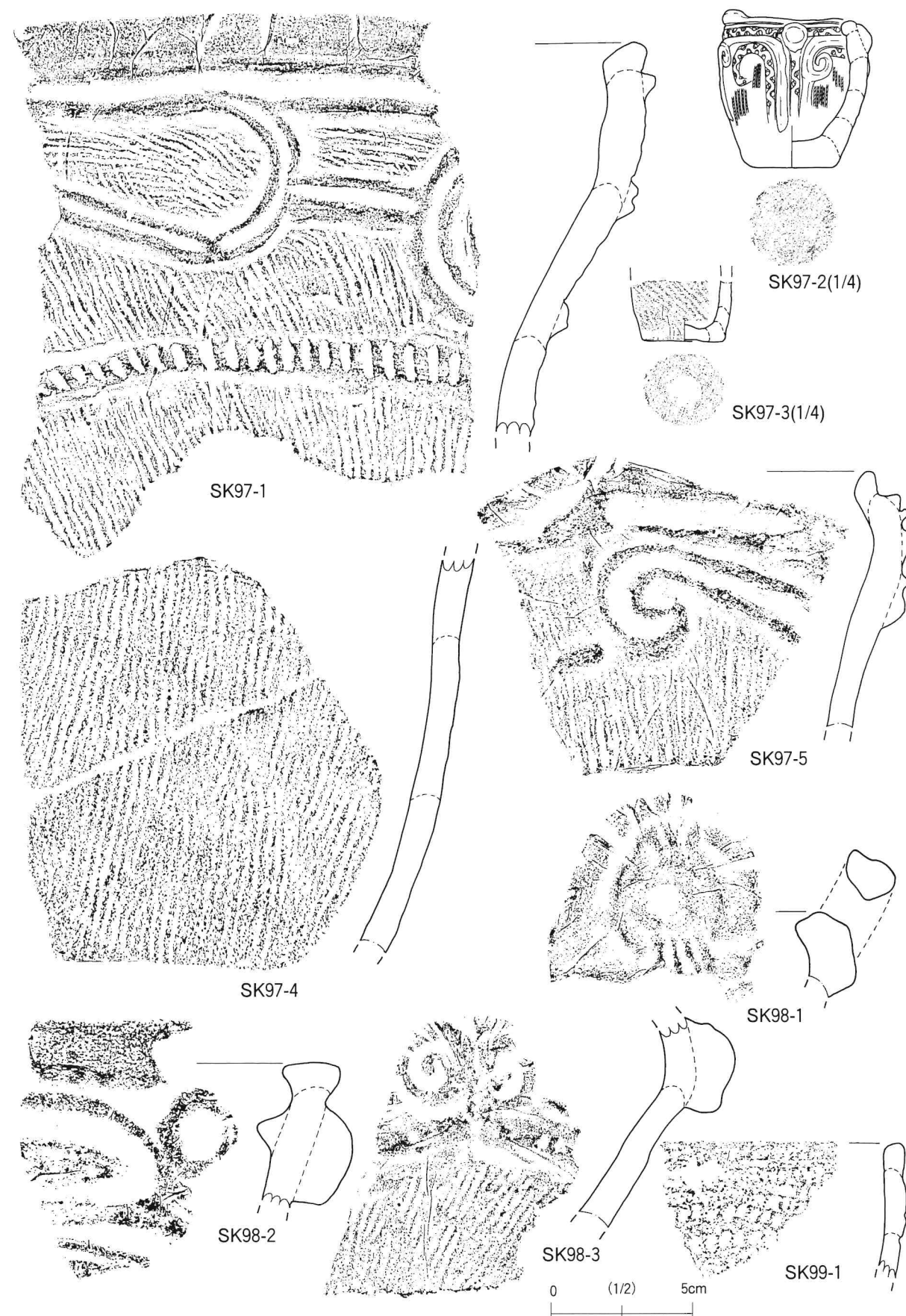
第75図 3区土坑出土土器 (2)



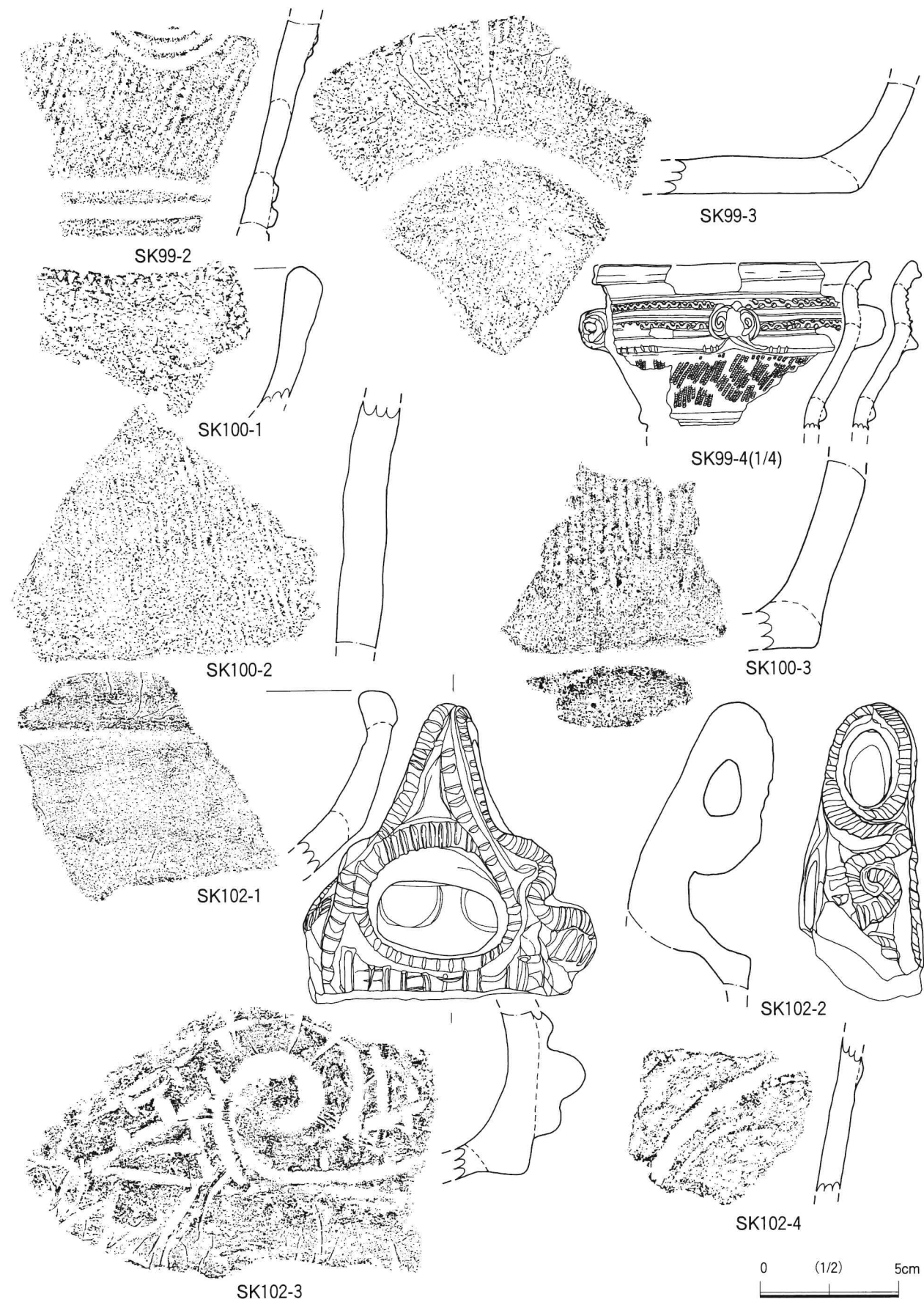
第76図 3区土坑出土土器 (3)



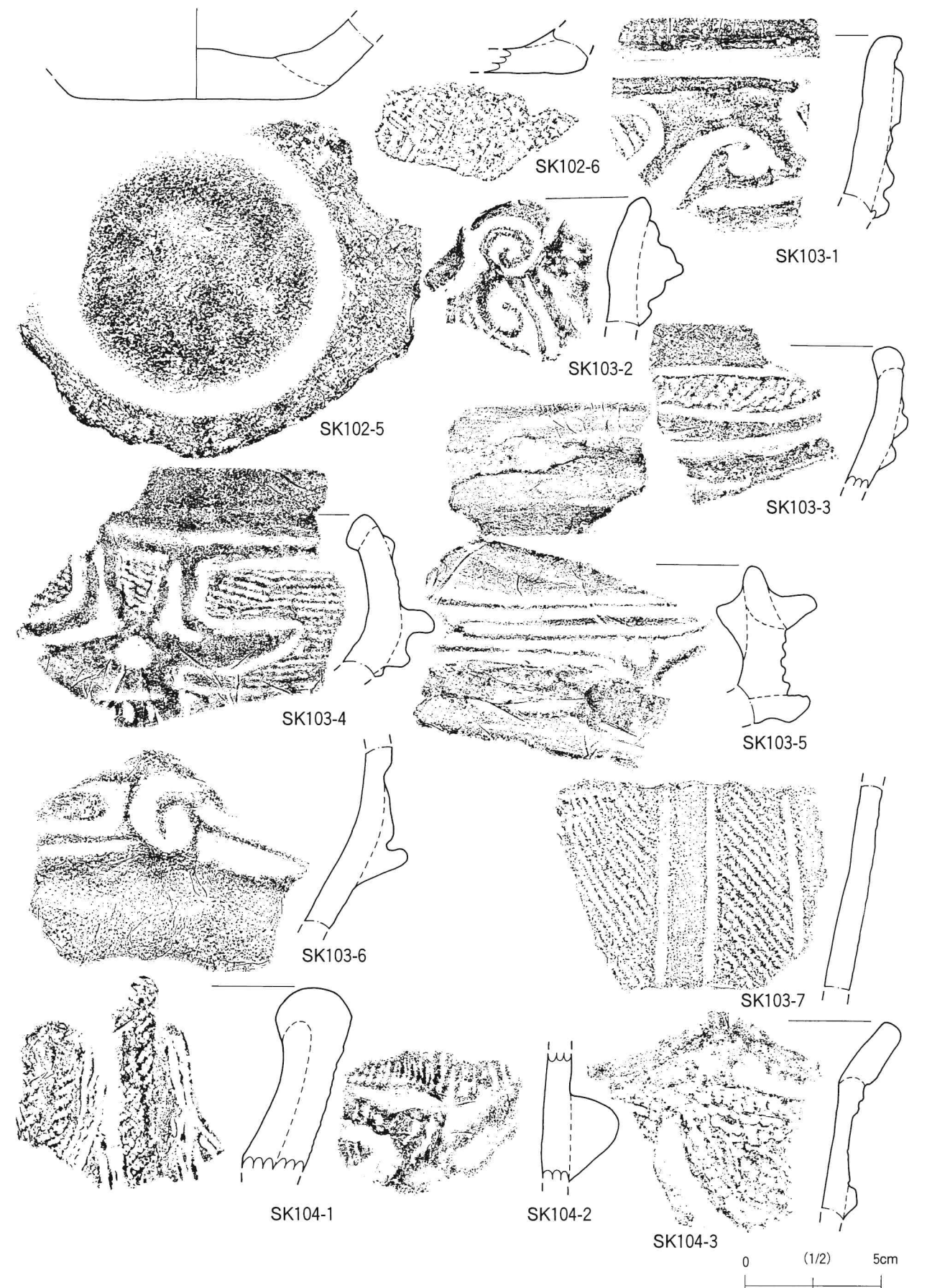
第77図 3区土坑出土土器（4）



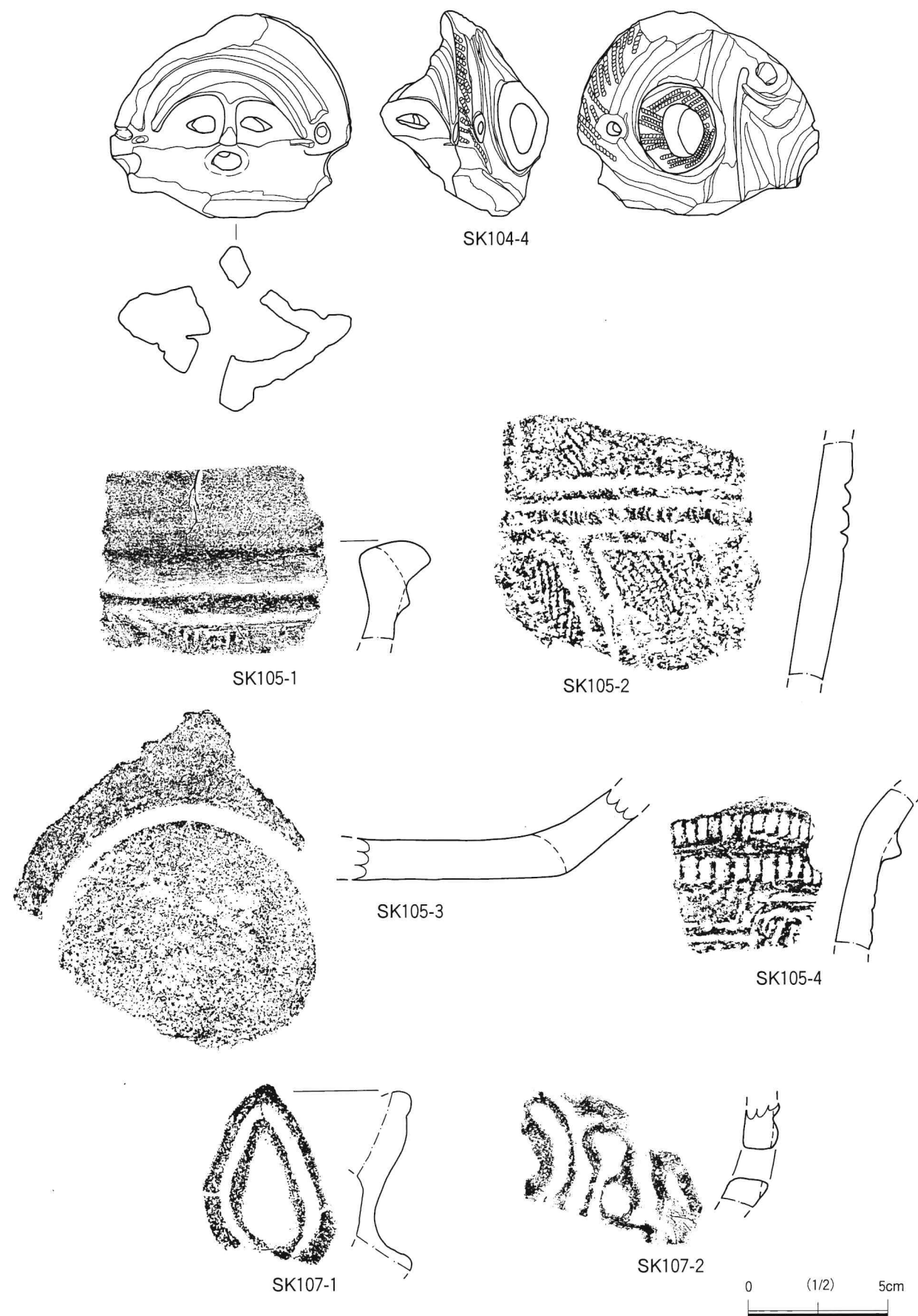
第78図 3区土坑出土土器（5）



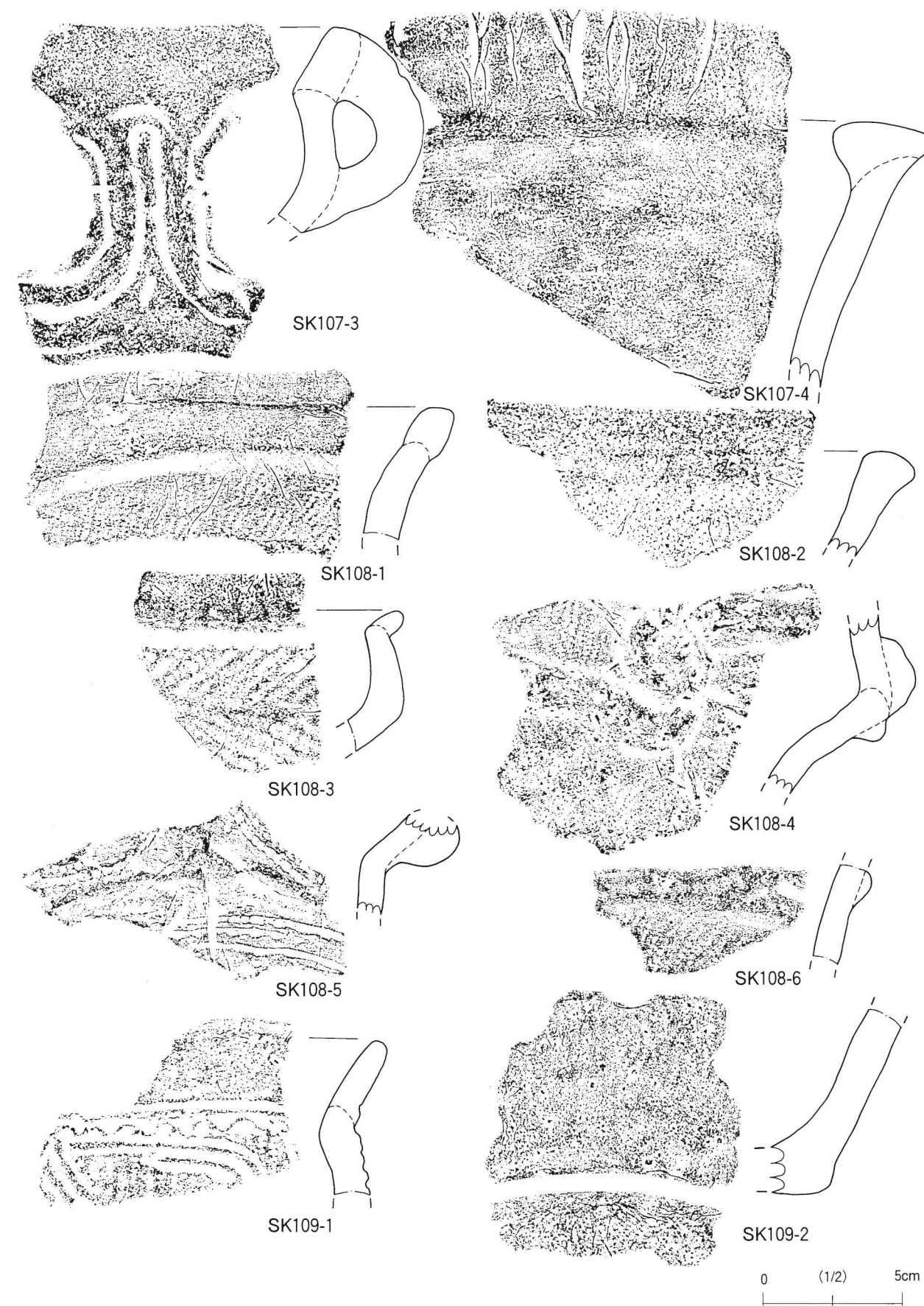
第79図 3区土坑出土土器（6）



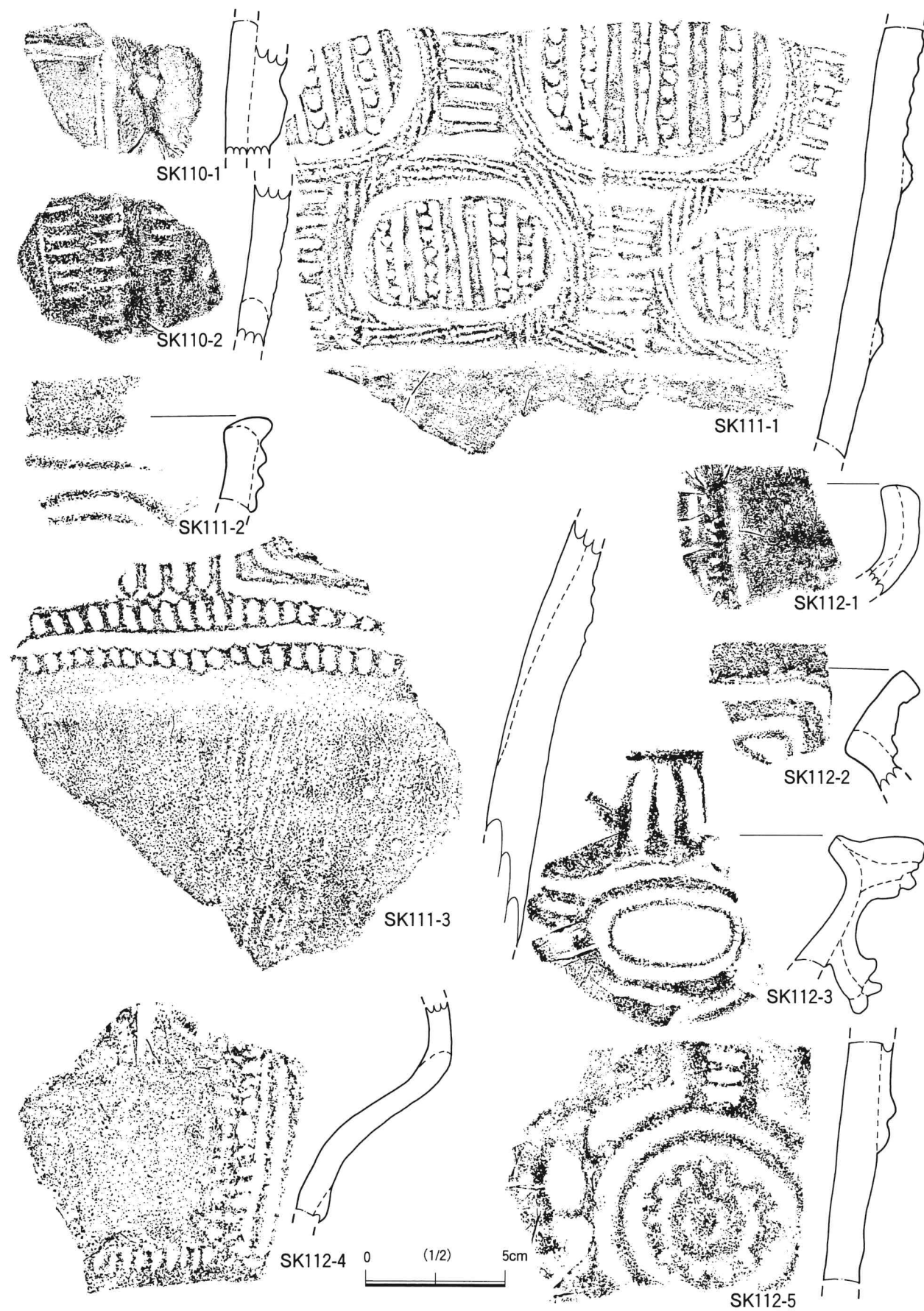
第80図 3区土坑出土土器（7）



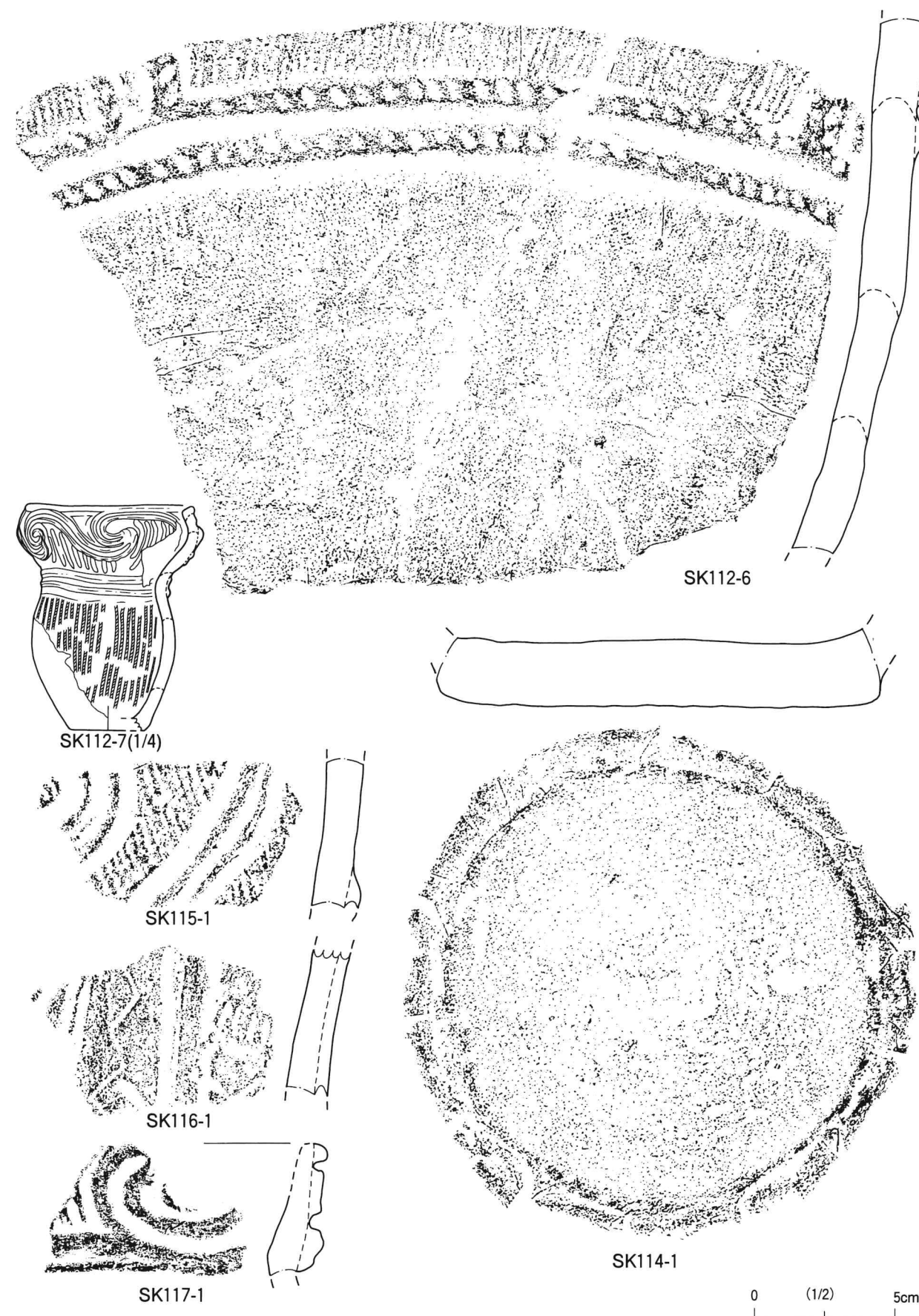
第81図 3区土坑出土土器（8）



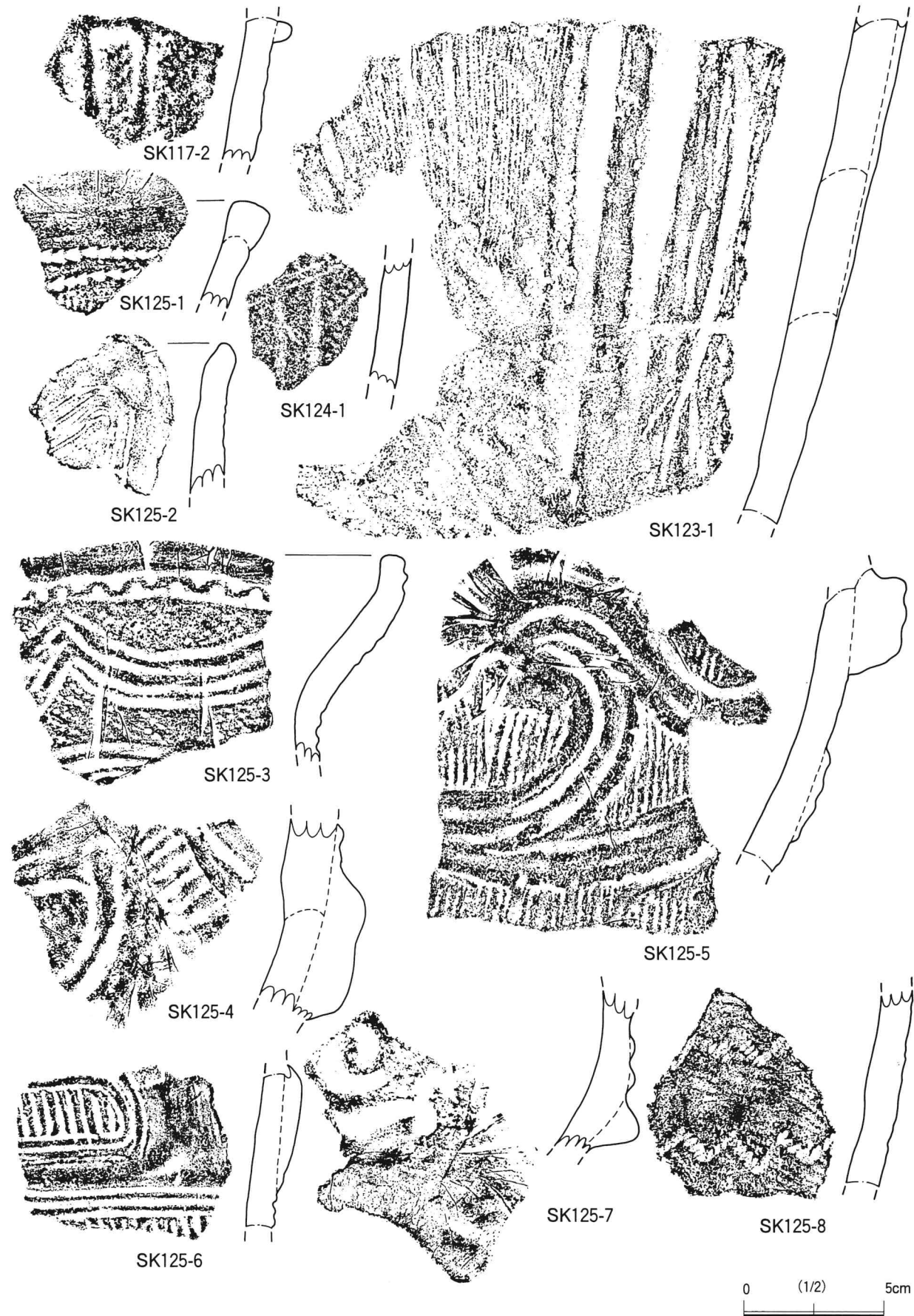
第82図 3区土坑出土土器（9）



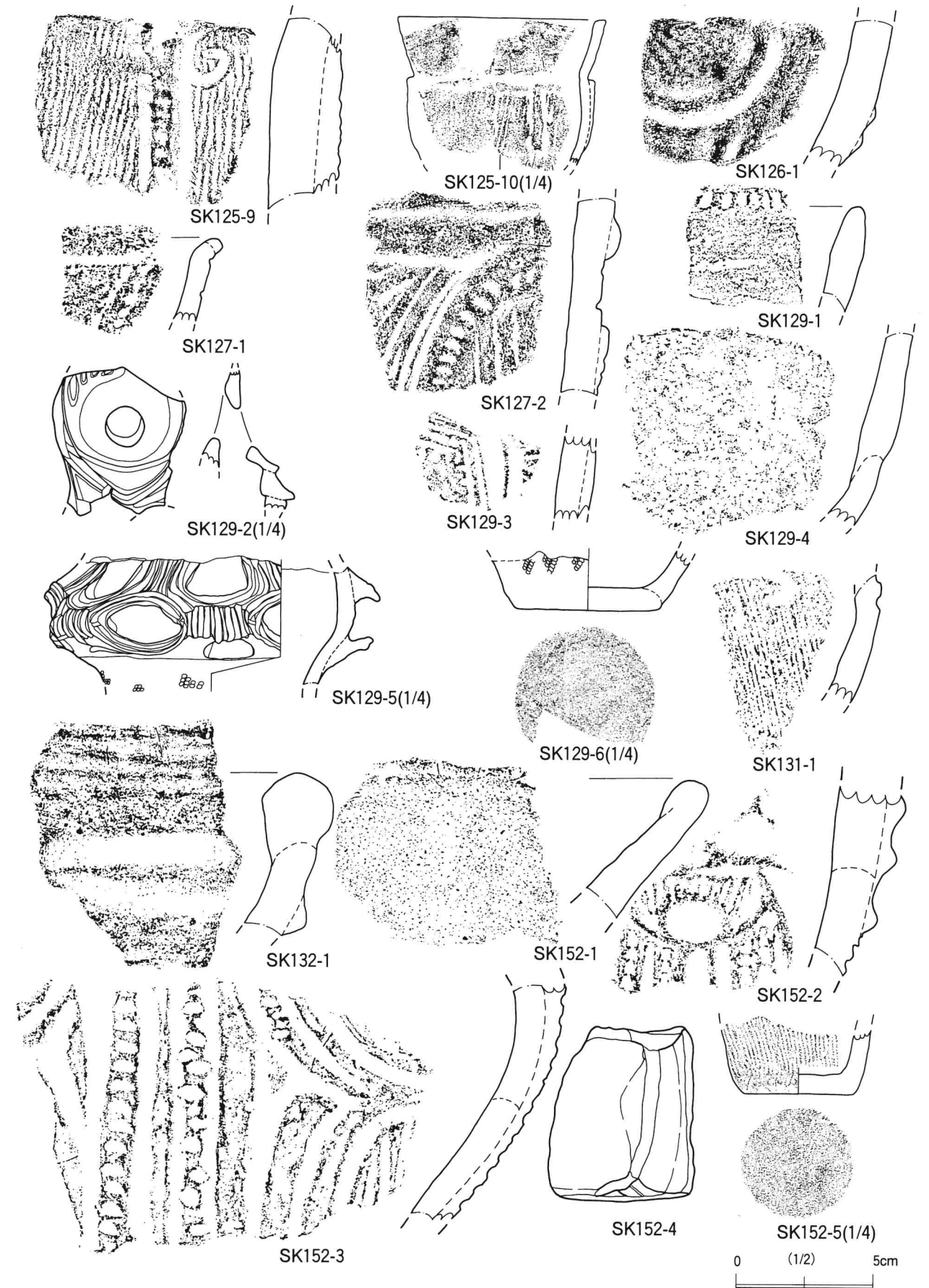
第83図 3区土坑出土土器 (10)



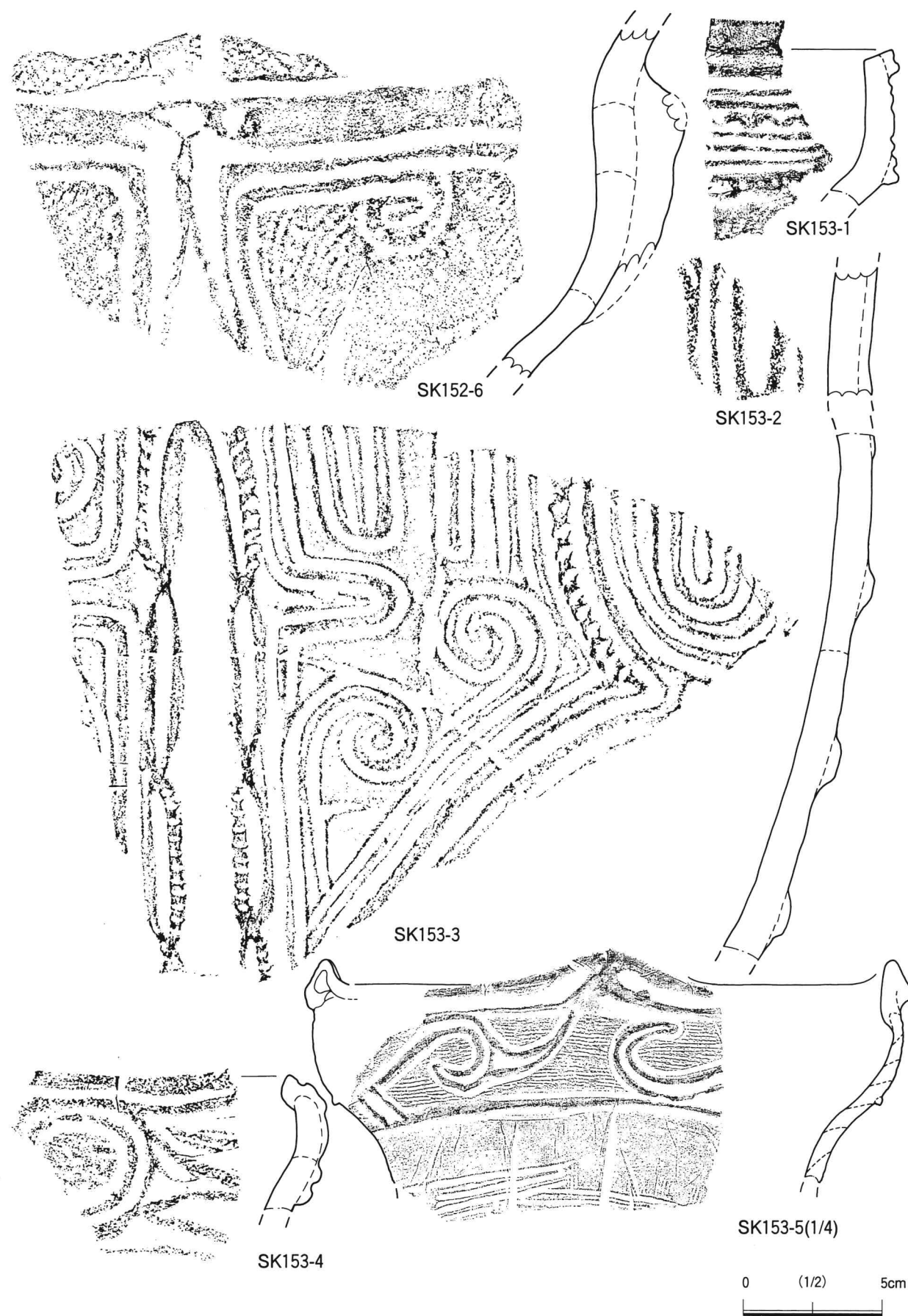
第84図 3区土坑出土土器 (11)



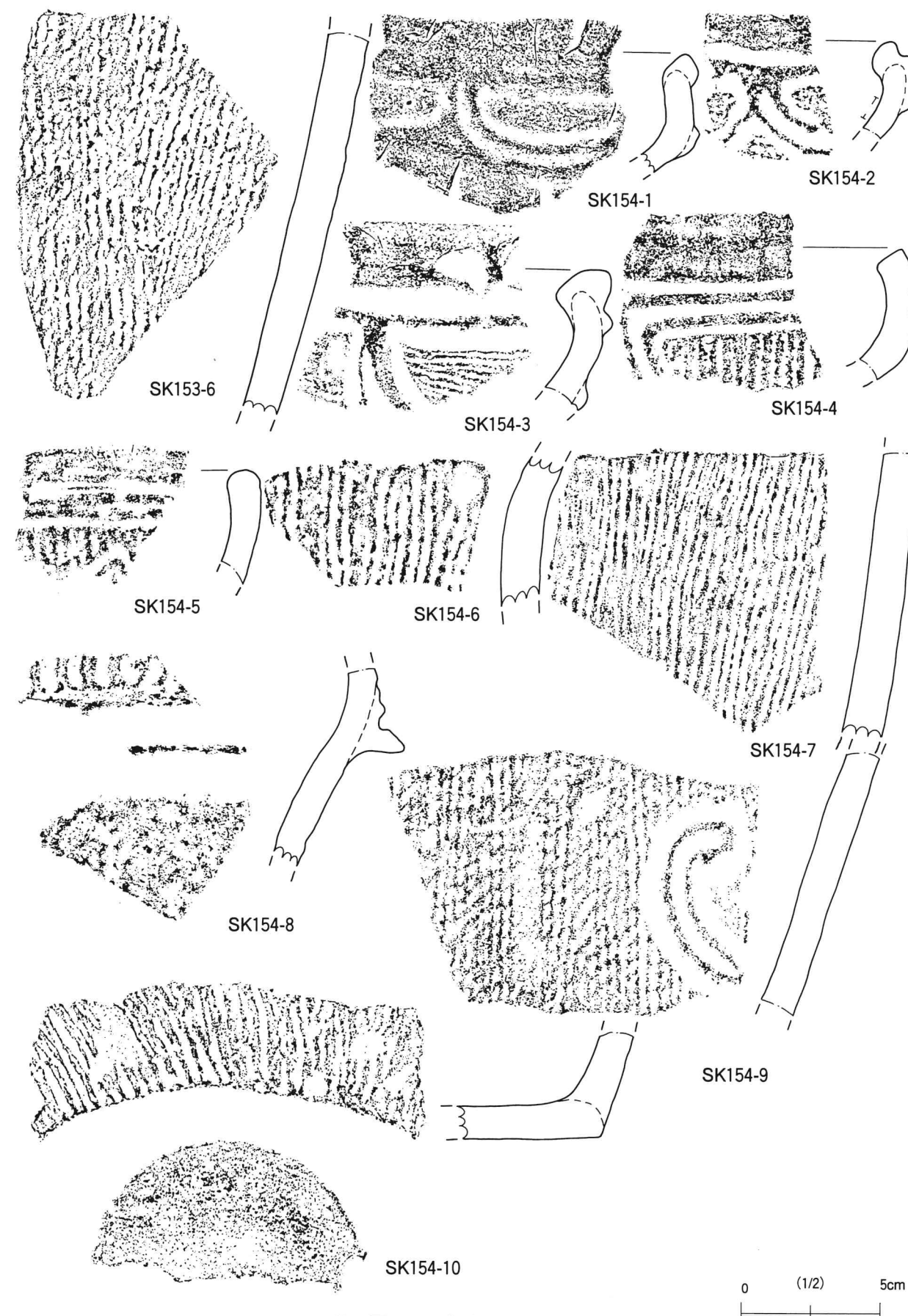
第85図 3区土坑出土土器 (12)



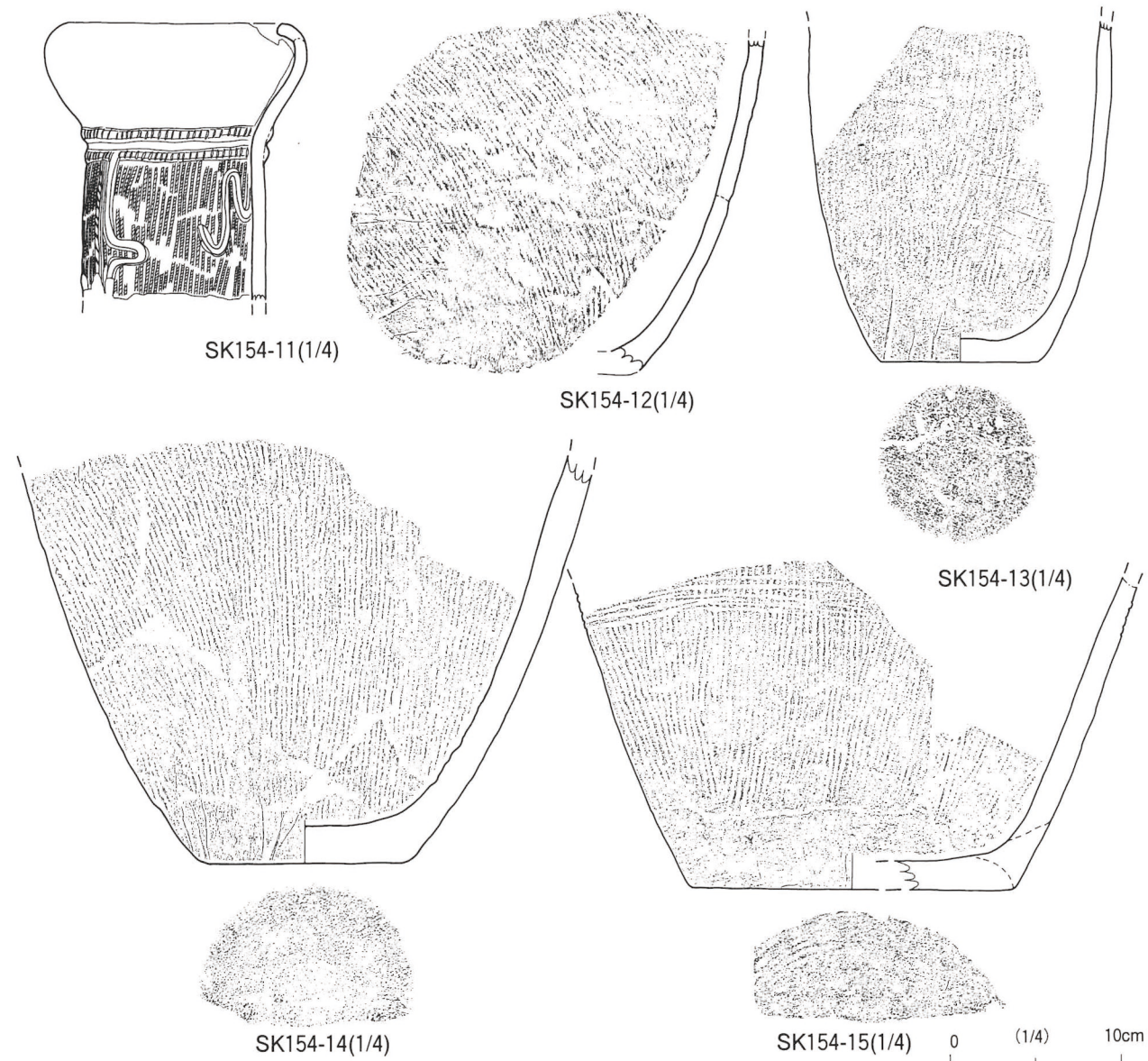
第86図 3区土坑出土土器 (13)



第87図 3区土坑出土土器 (14)



第88図 3区土坑出土土器 (15)

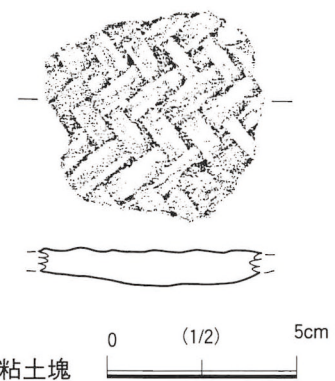


第89図 3区土坑出土土器 (16)

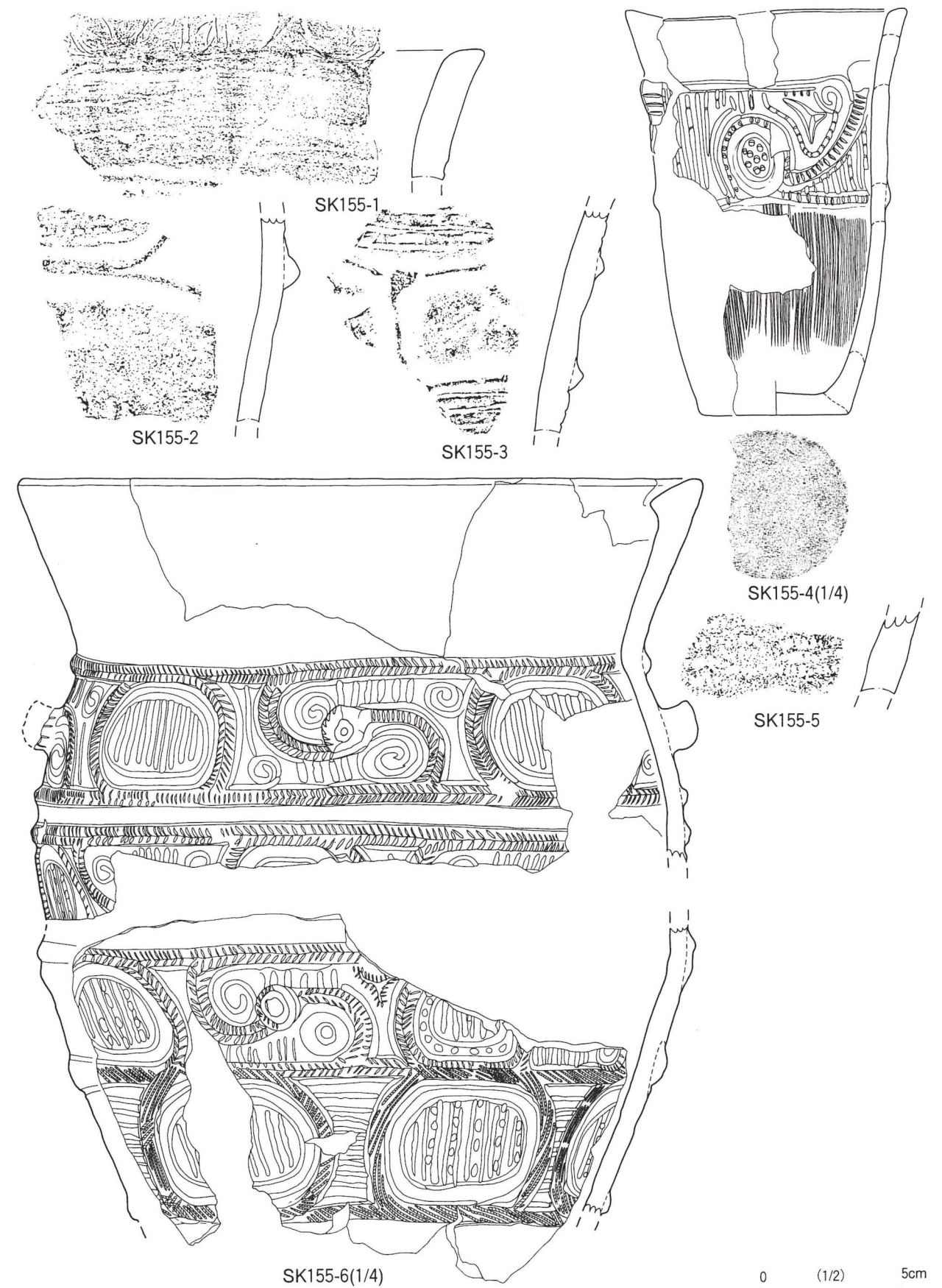
SK154からは、多くの土器が出土しており、底部の大破片が多い。しかし、特に鉢被りとみられるような出土状態は確認しておらず、単なる廃棄による可能性もある。

出土土器は、風化して観察できないものを除き、すべて地文が撚糸文である。地文を施した後は、SK154-9や11のように、粘土紐で細い隆帯を付しているものがある一方、SK154-15のように、横方向の沈線が幅狭く何本か施されているものもある。磨消のあるものは確認できない。

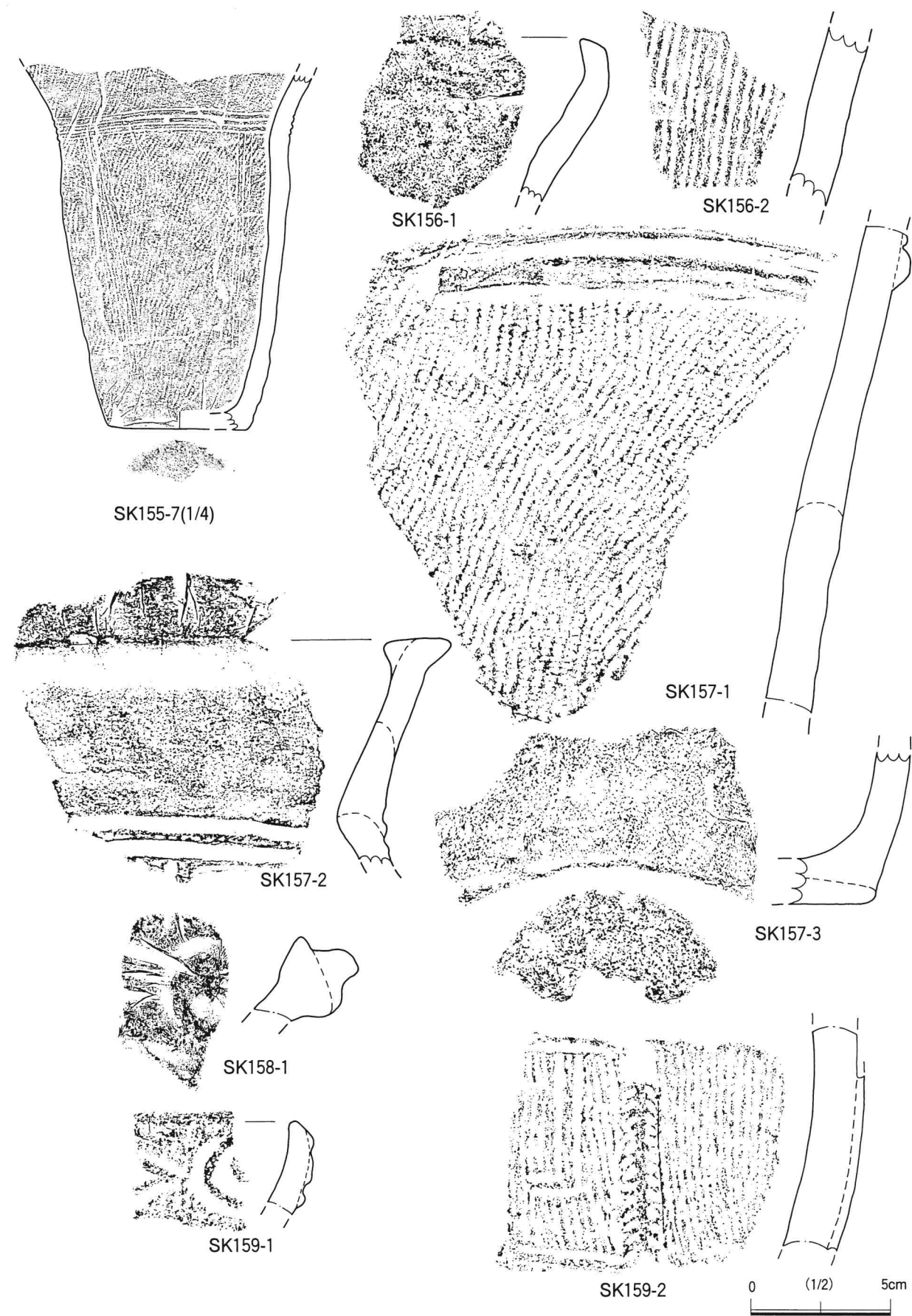
この土坑出土土器に限らず、本遺跡からは、底部圧痕のある縄文土器は出土していない。わずかSK154-15の底部拓影左よりに、何かが回転して付いたような筋が見える。また、3区遺構外から粘土塊に網代痕の付いたものが出土している。一括遺物のため正確な時期は不明だが、胎土から見て縄文時代中期の所産と考えられるため、参考資料としてあげておきたい。



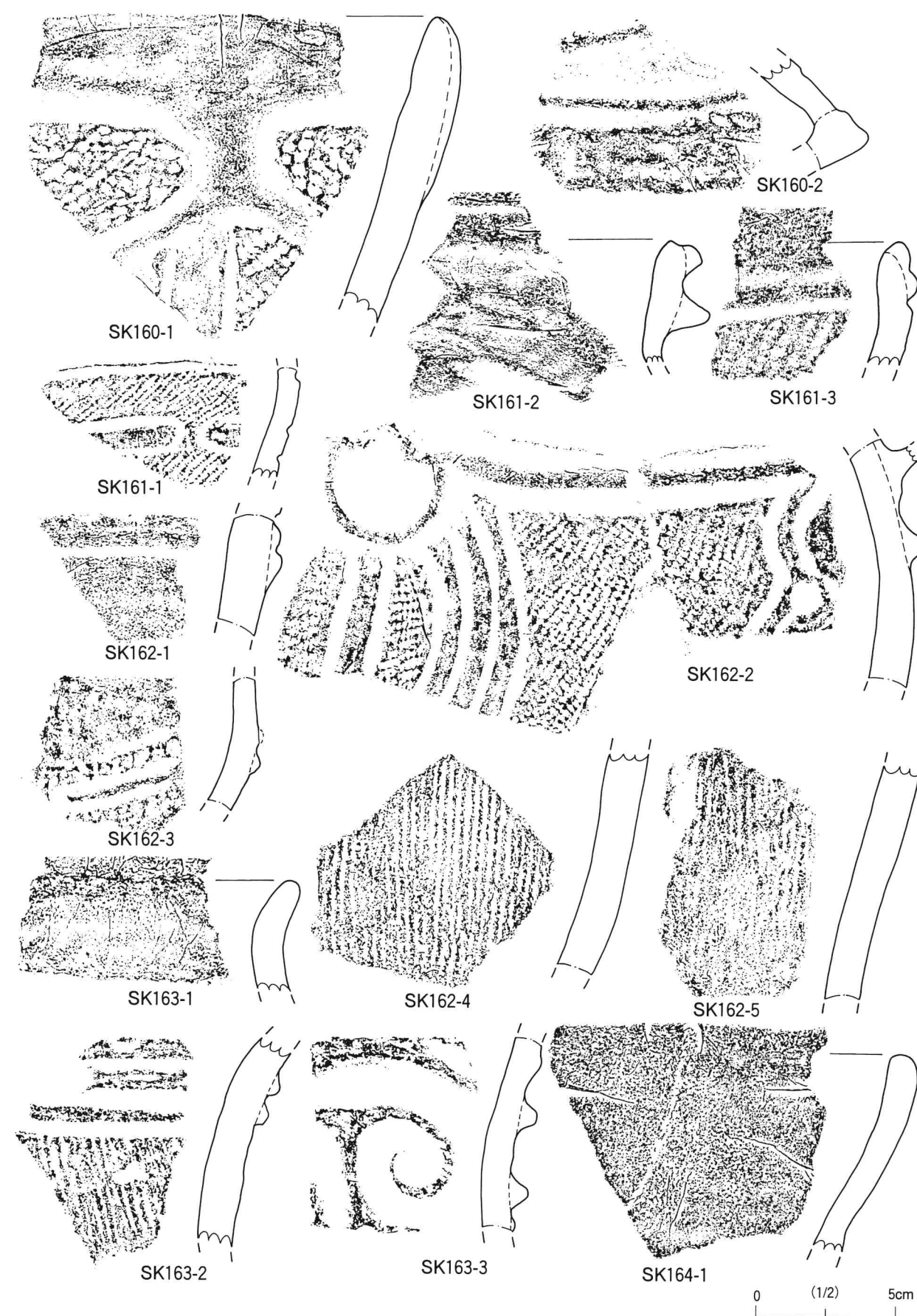
第90図
網代痕ある焼成粘土塊



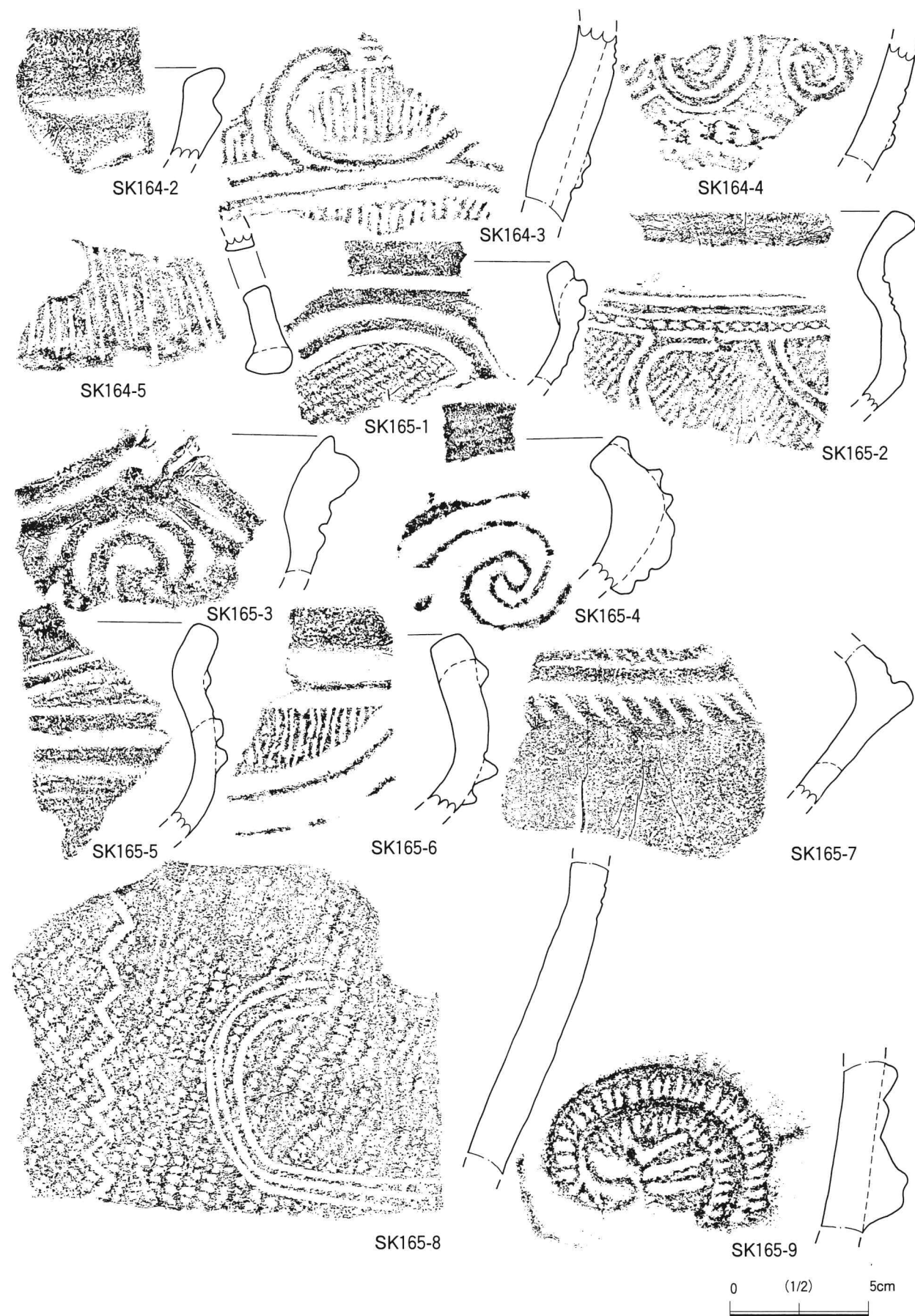
第91図 3区土坑出土土器 (17)



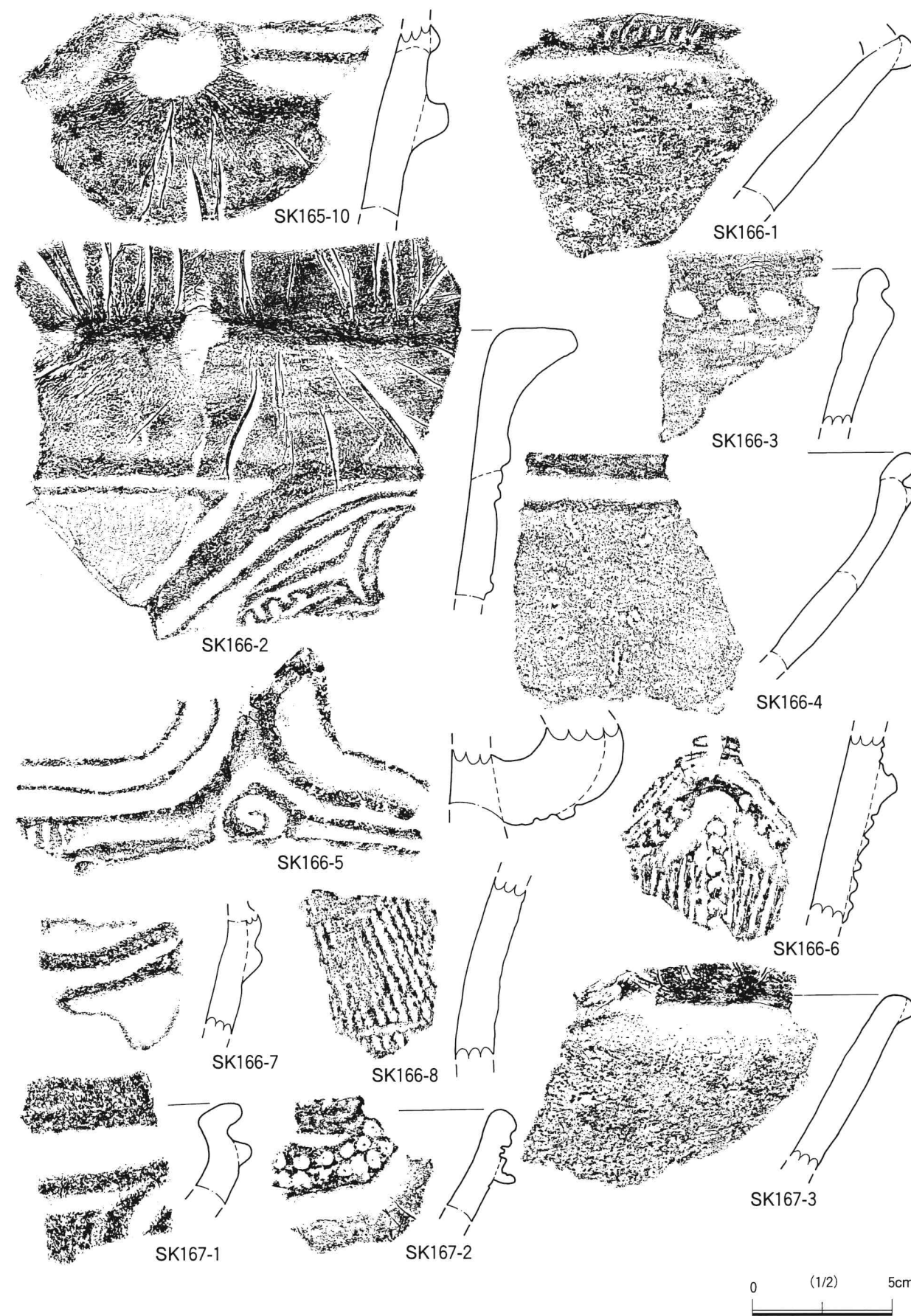
第92図 3区土坑出土土器 (18)



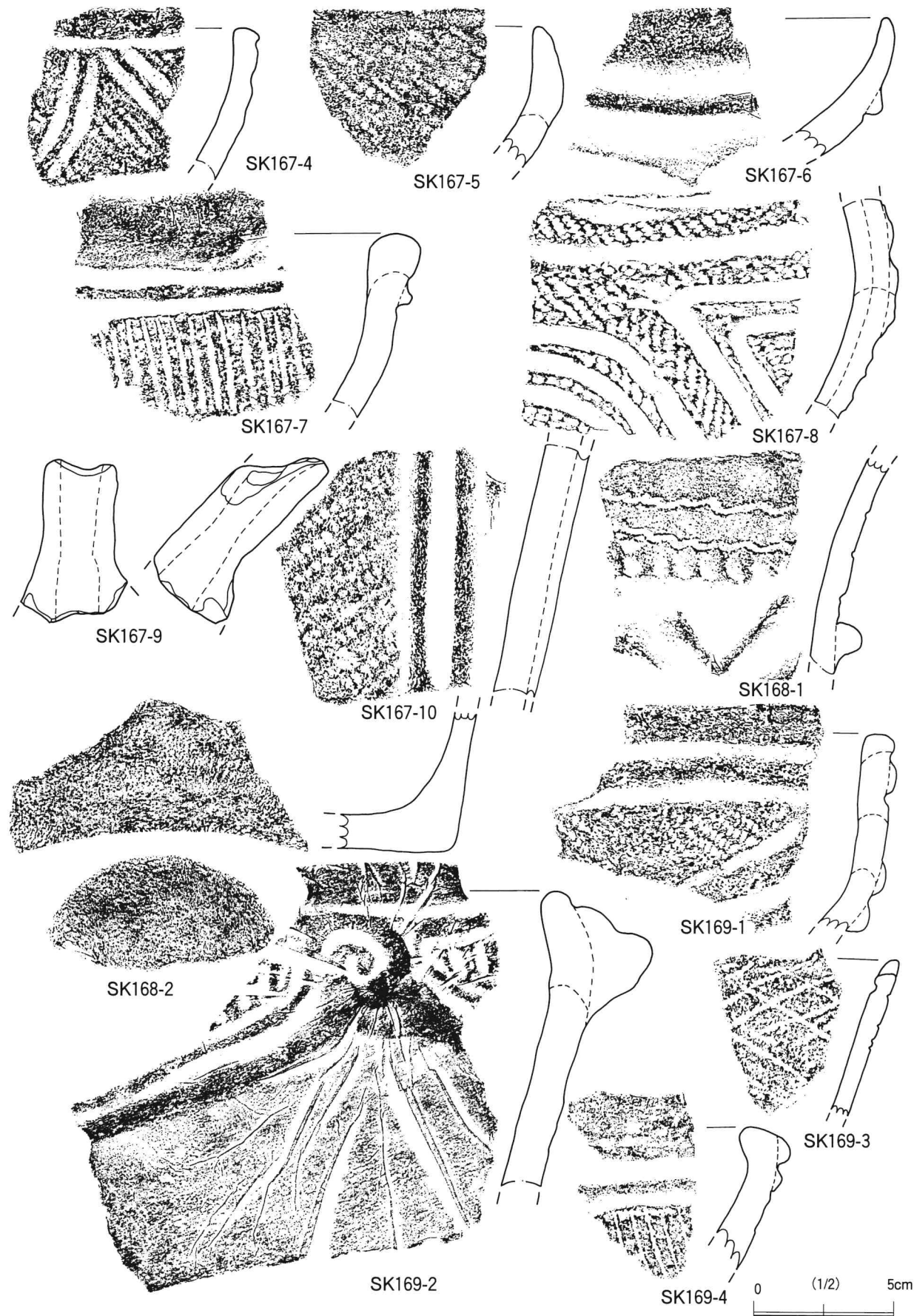
第93図 3区土坑出土土器 (19)



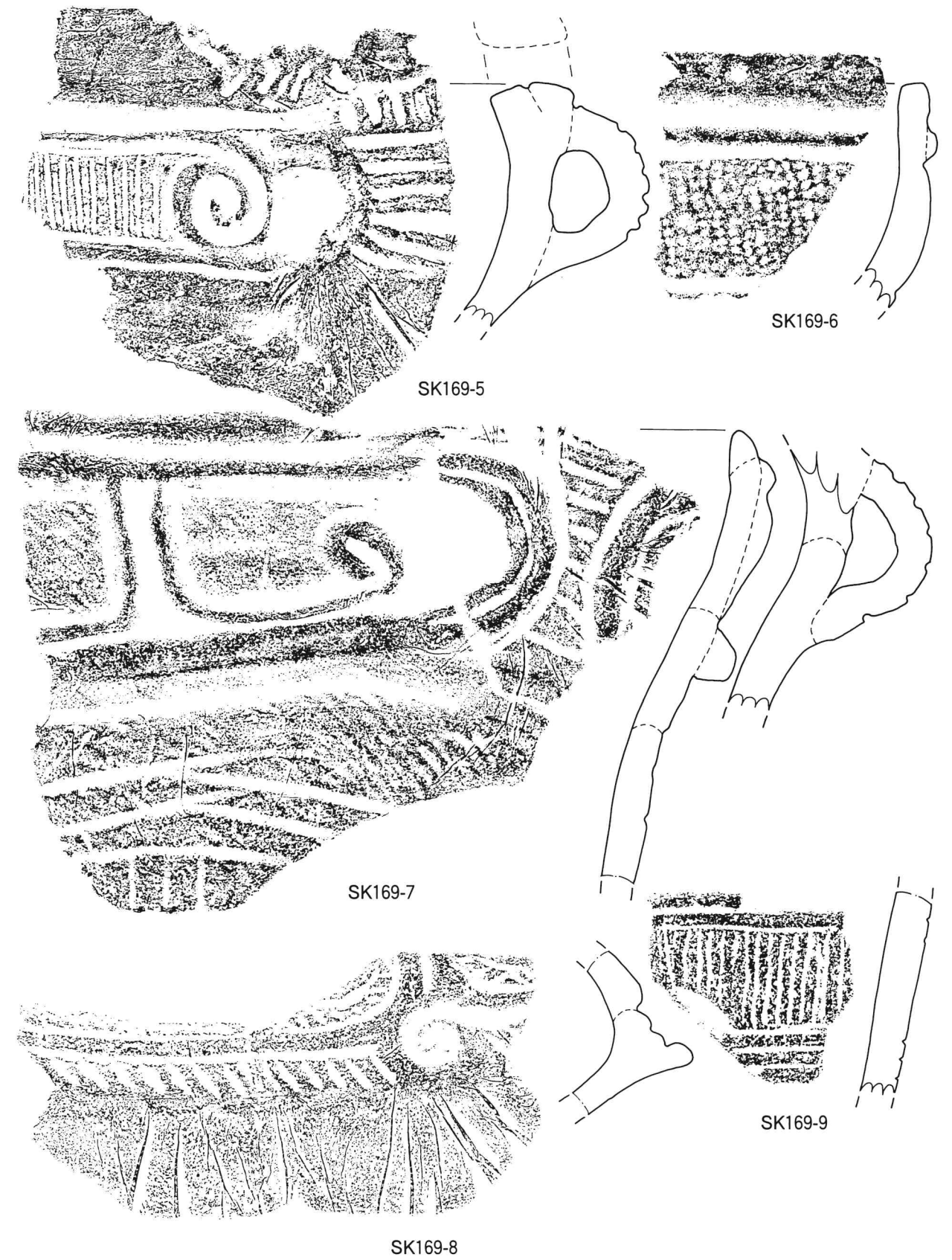
第94図 3区土坑出土土器 (20)



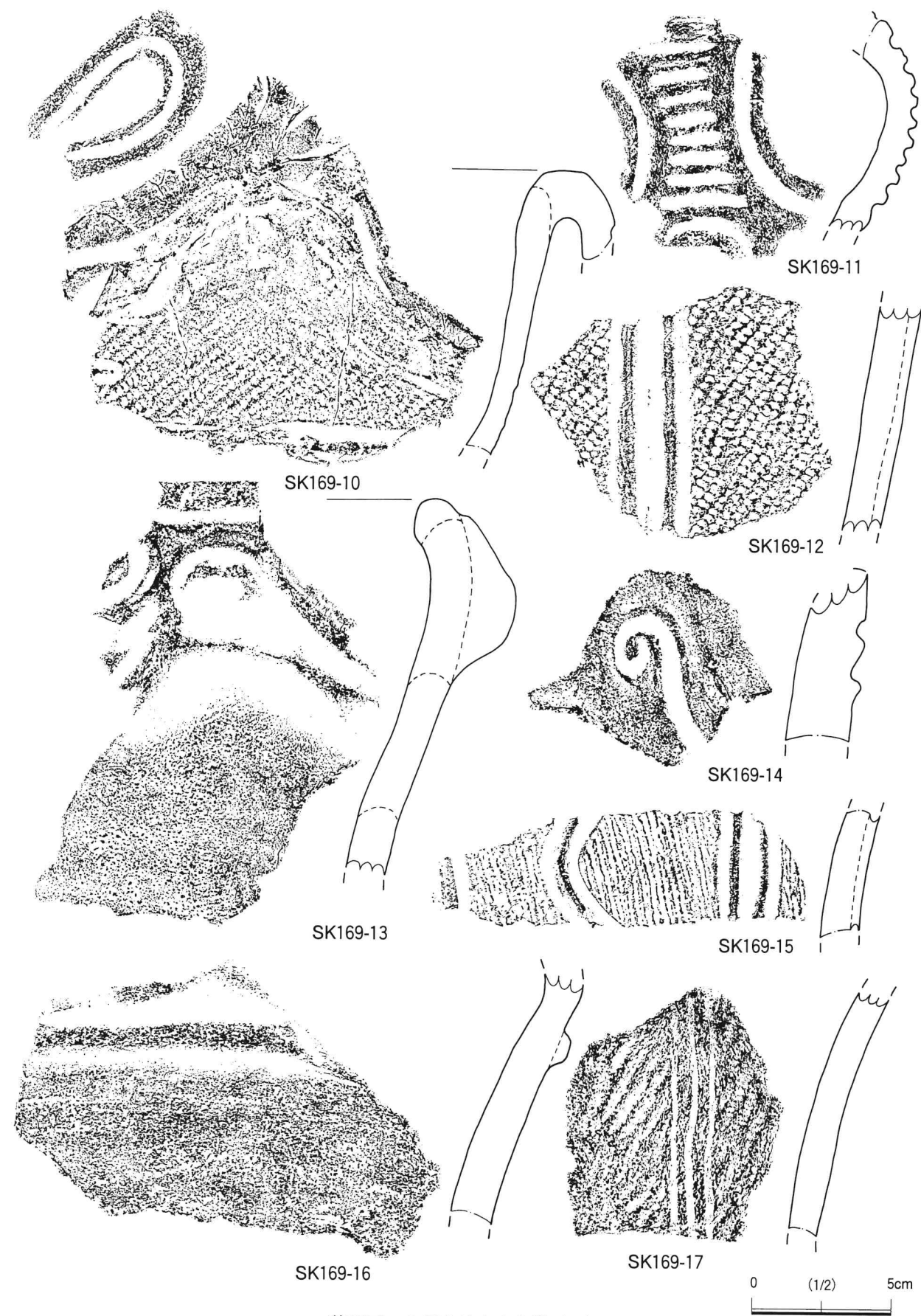
第95図 3区土坑出土土器 (21)



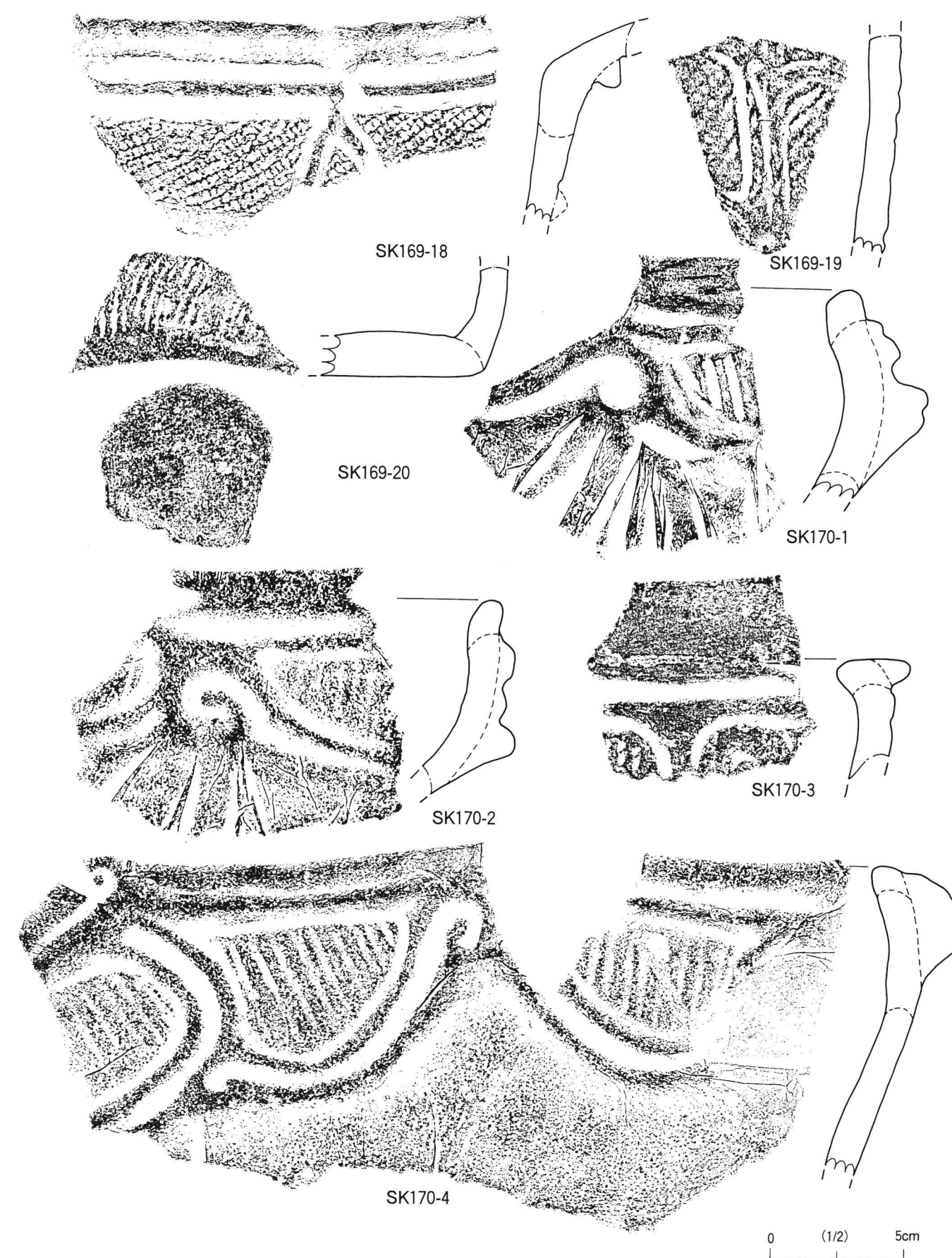
第96図 3区土坑出土土器 (22)



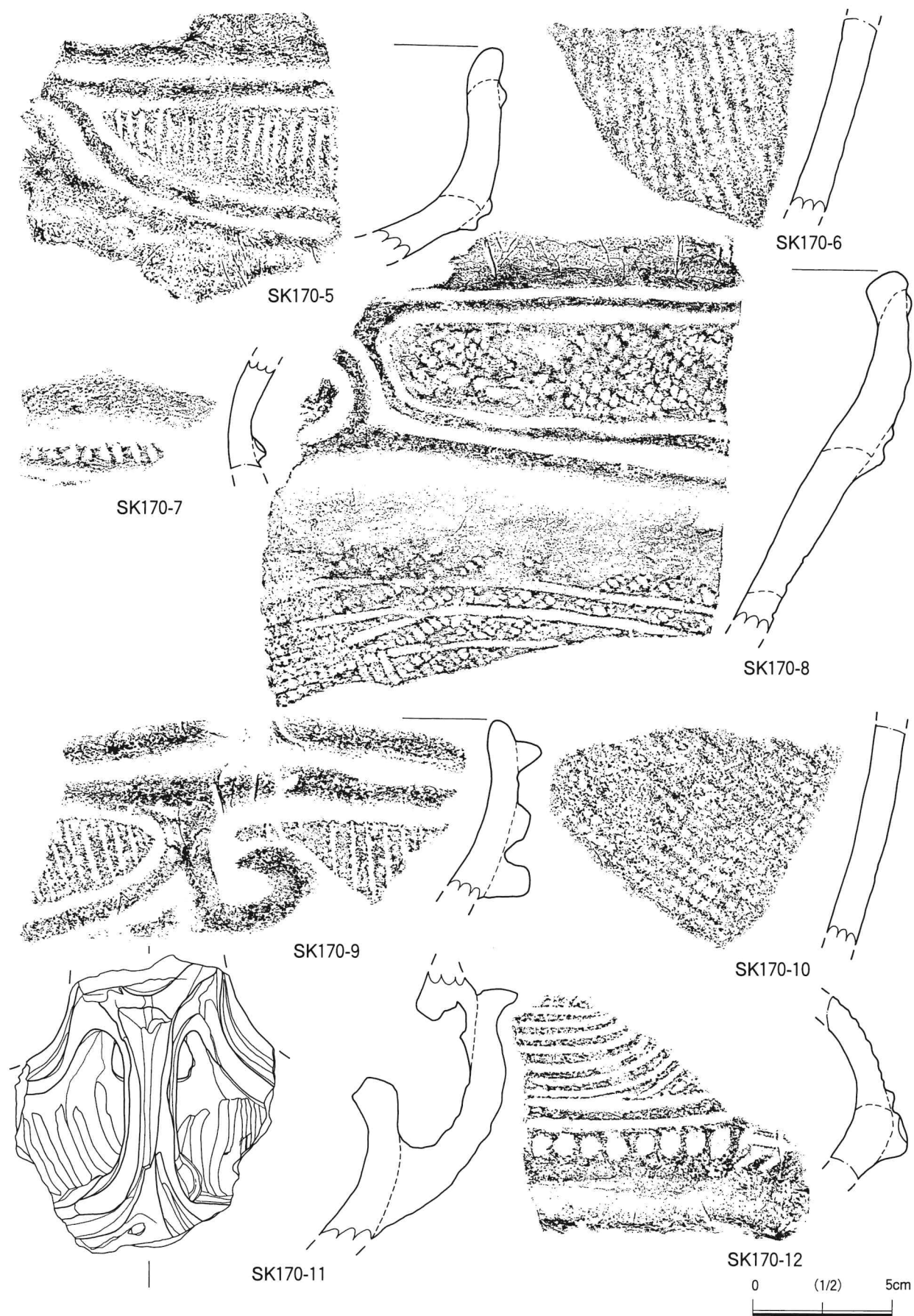
第97図 3区土坑出土土器 (23)



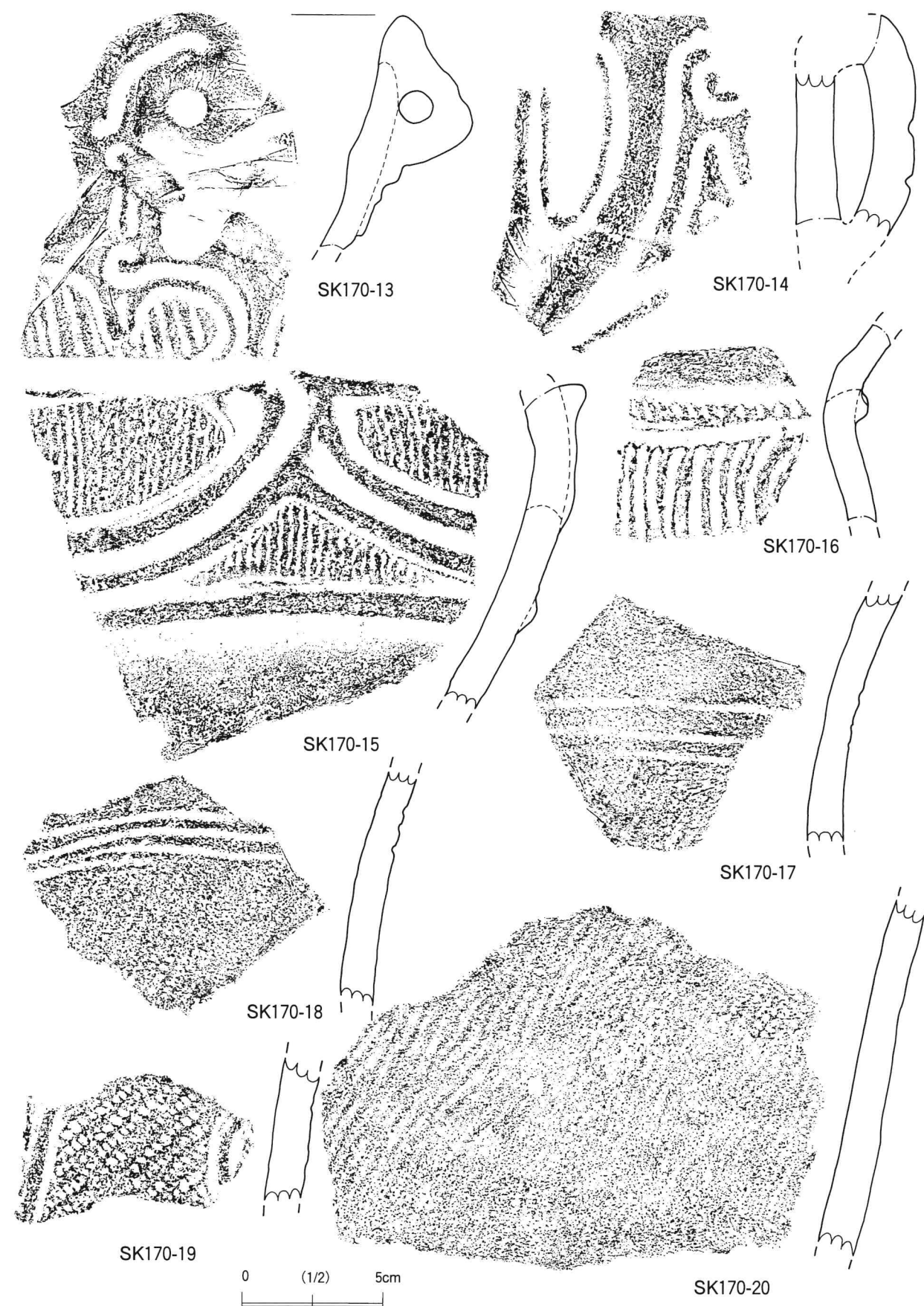
第98図 3区土坑出土土器 (24)



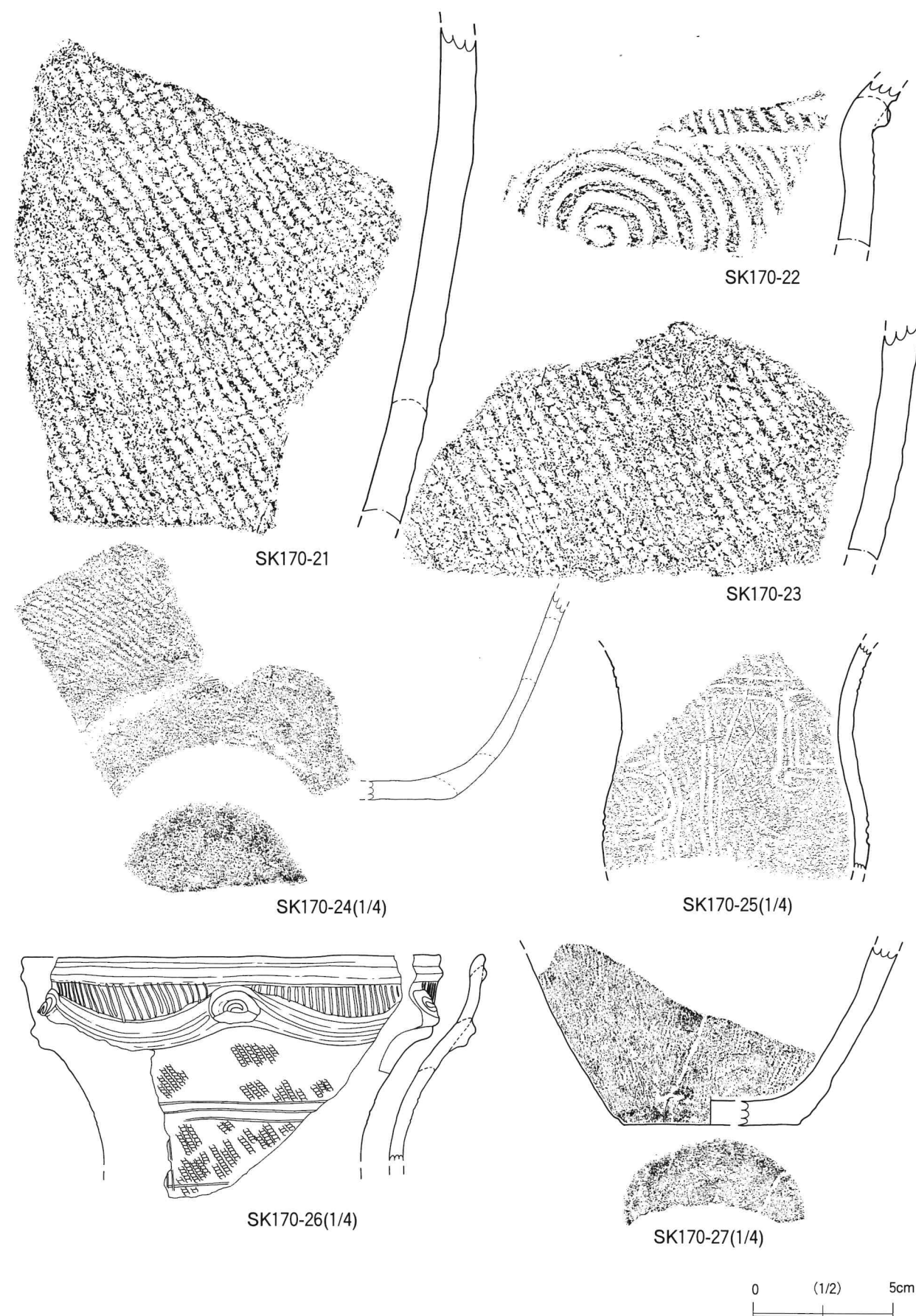
第99図 3区土坑出土土器 (25)



第100図 3区土坑出土土器 (26)



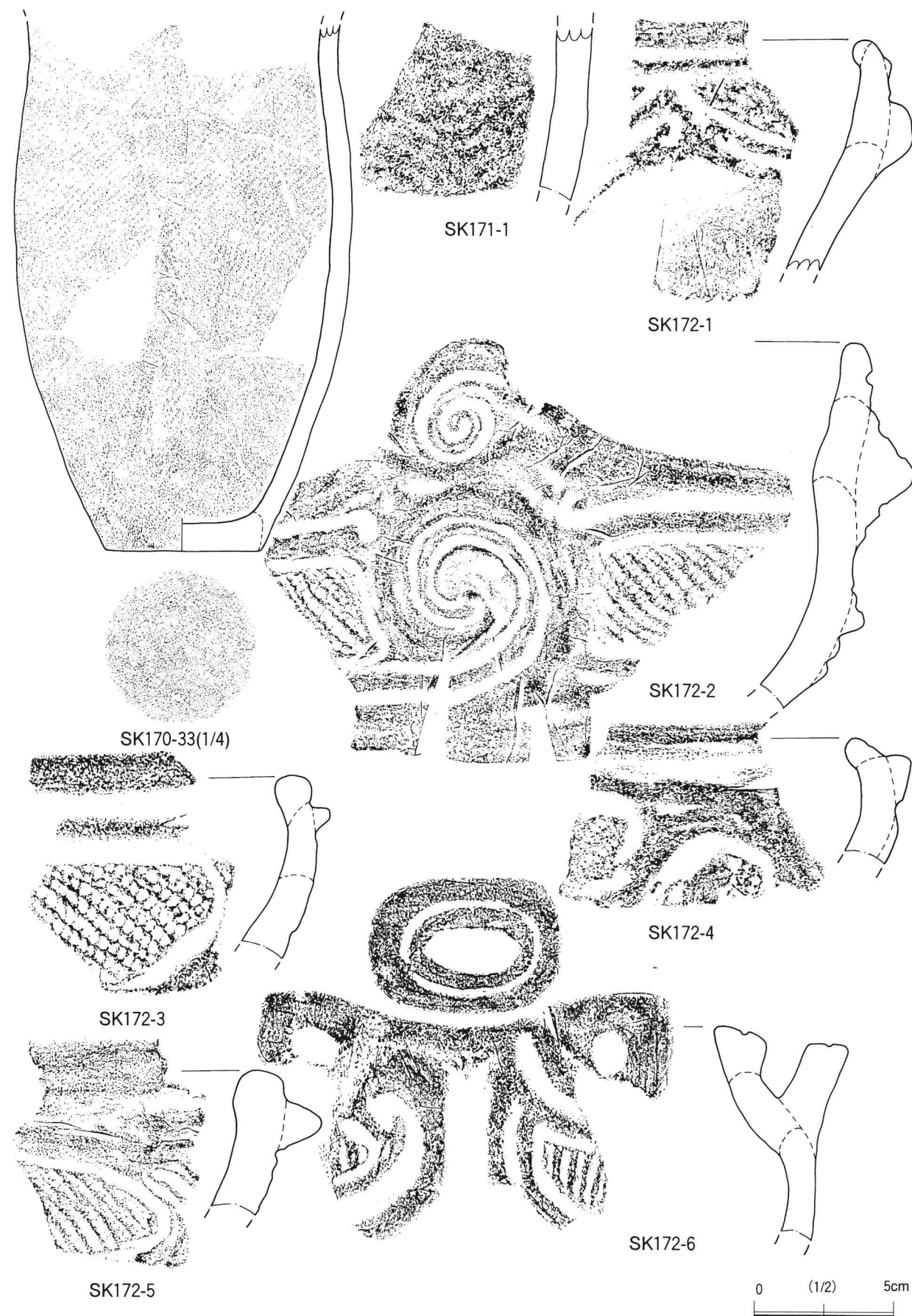
第101図 3区土坑出土土器 (27)



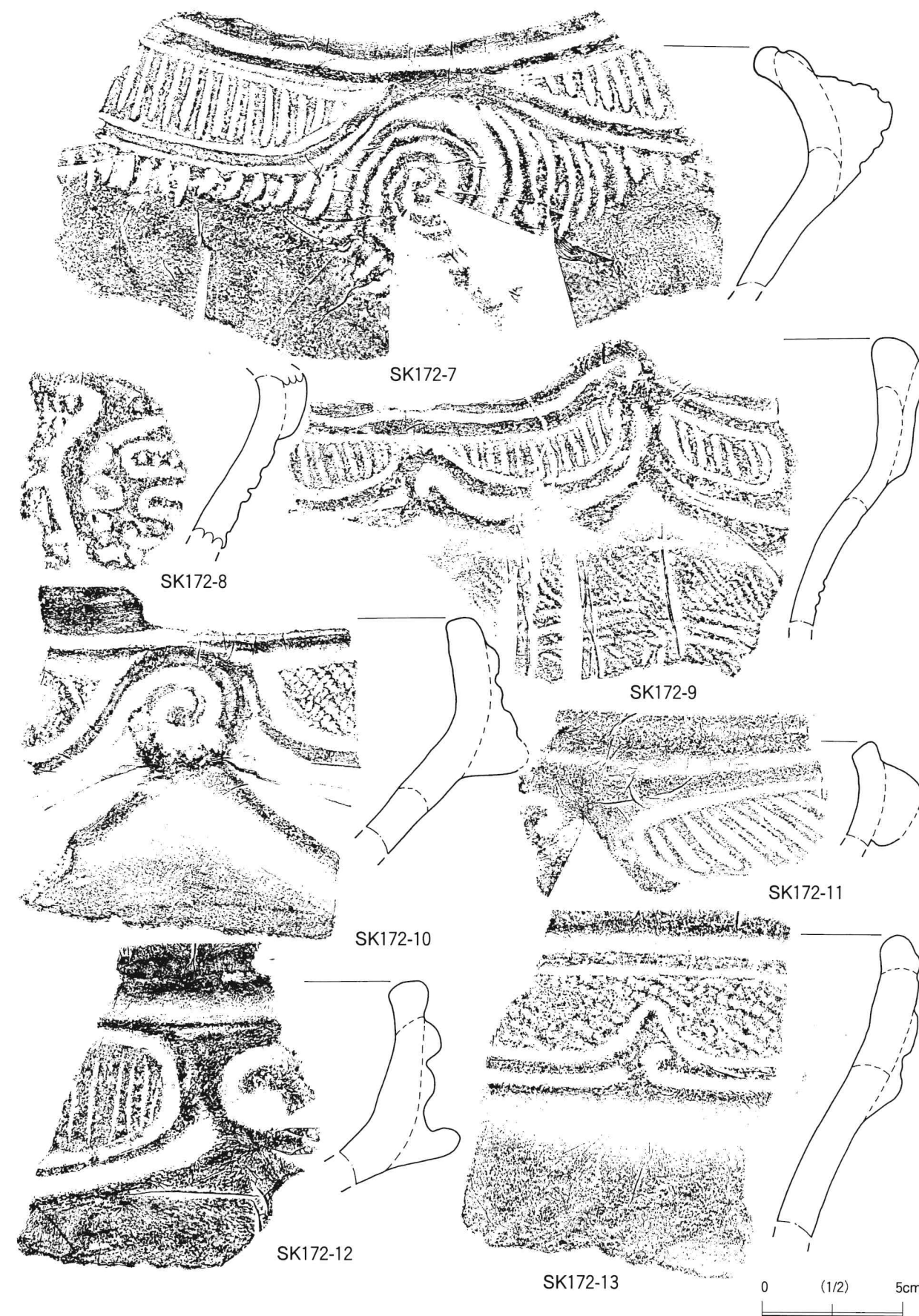
第102図 3区土坑出土土器 (28)



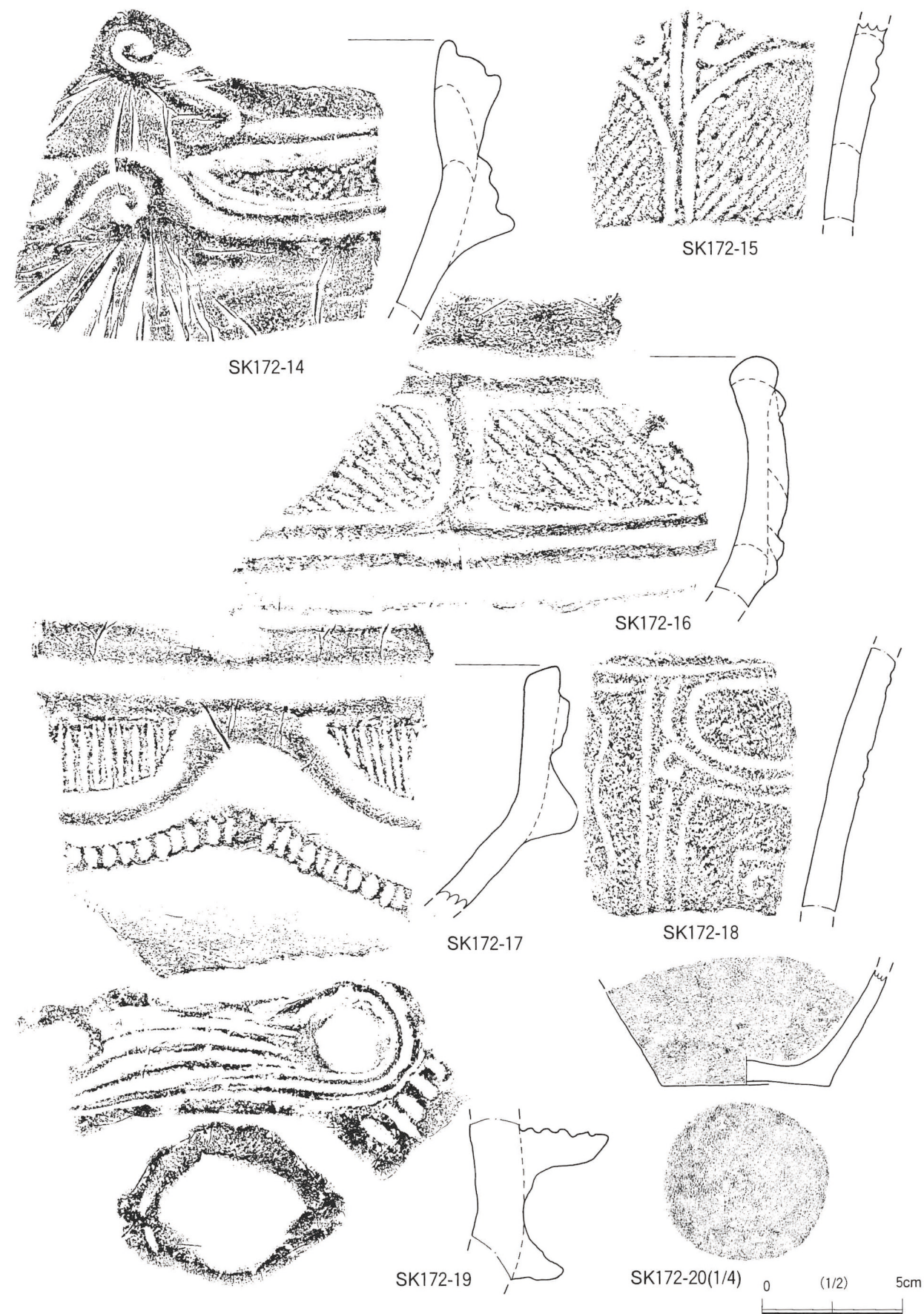
第103図 3区土坑出土土器 (29)



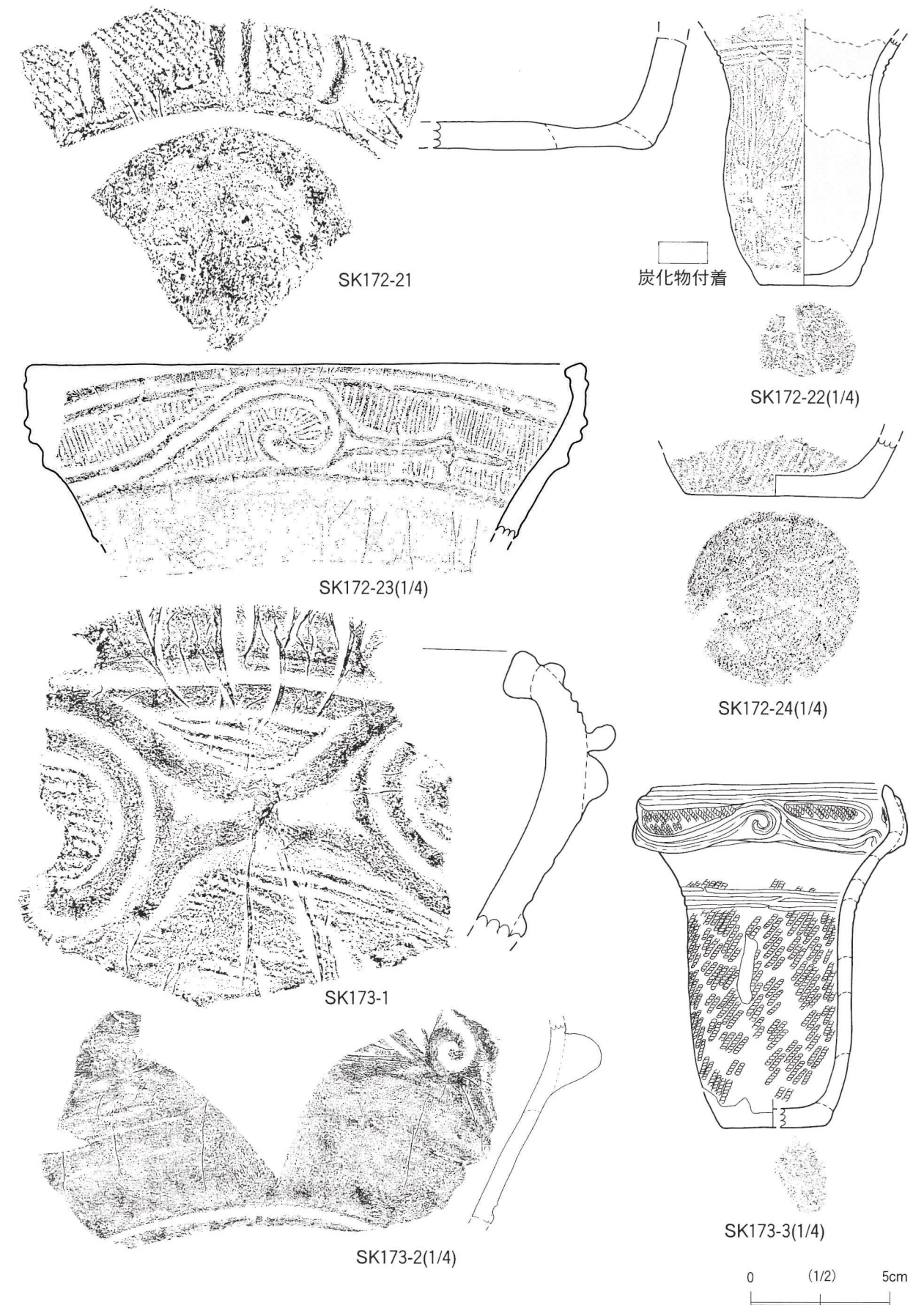
第104図 3区土坑出土土器 (30)



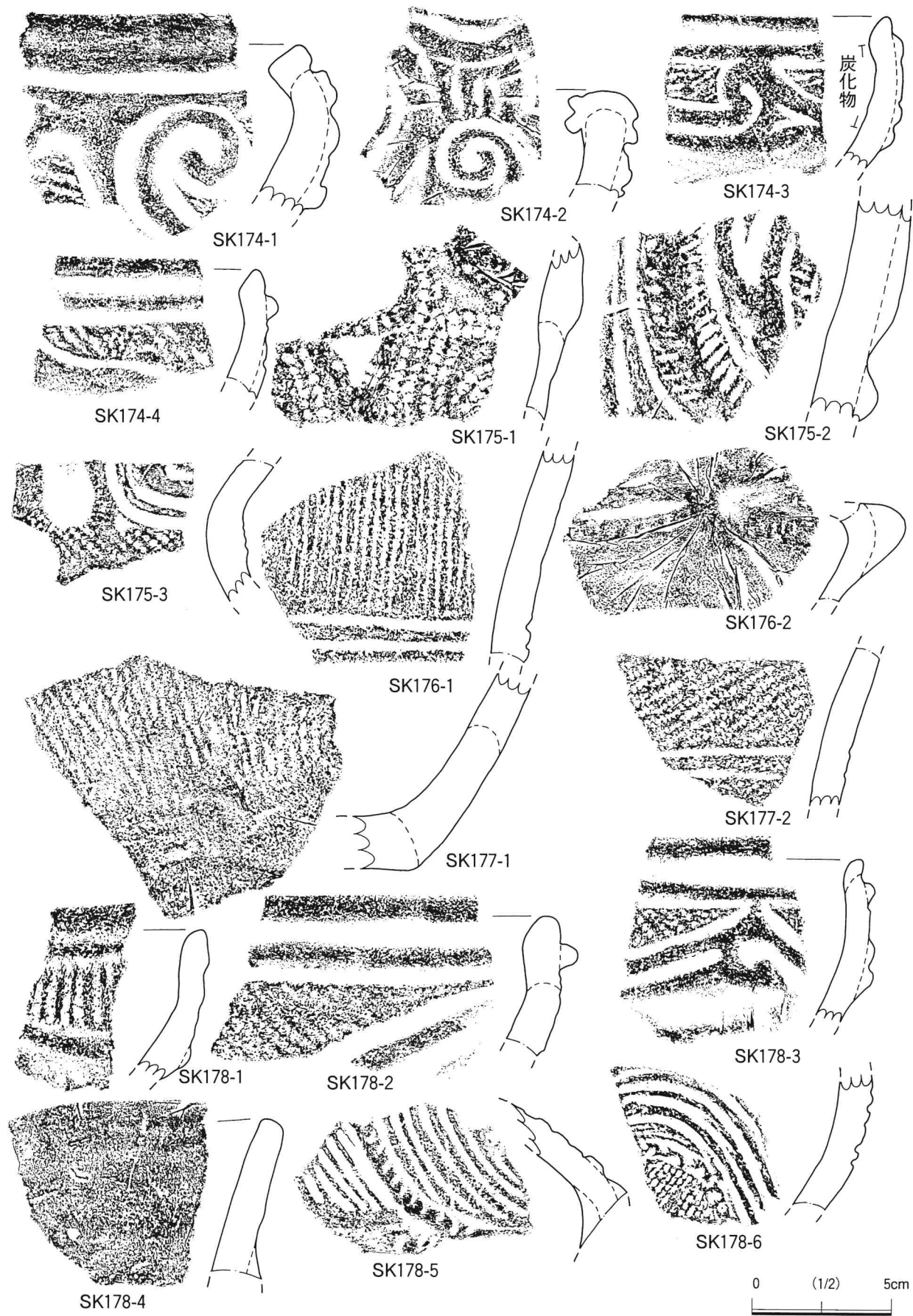
第105図 3区土坑出土土器 (31)



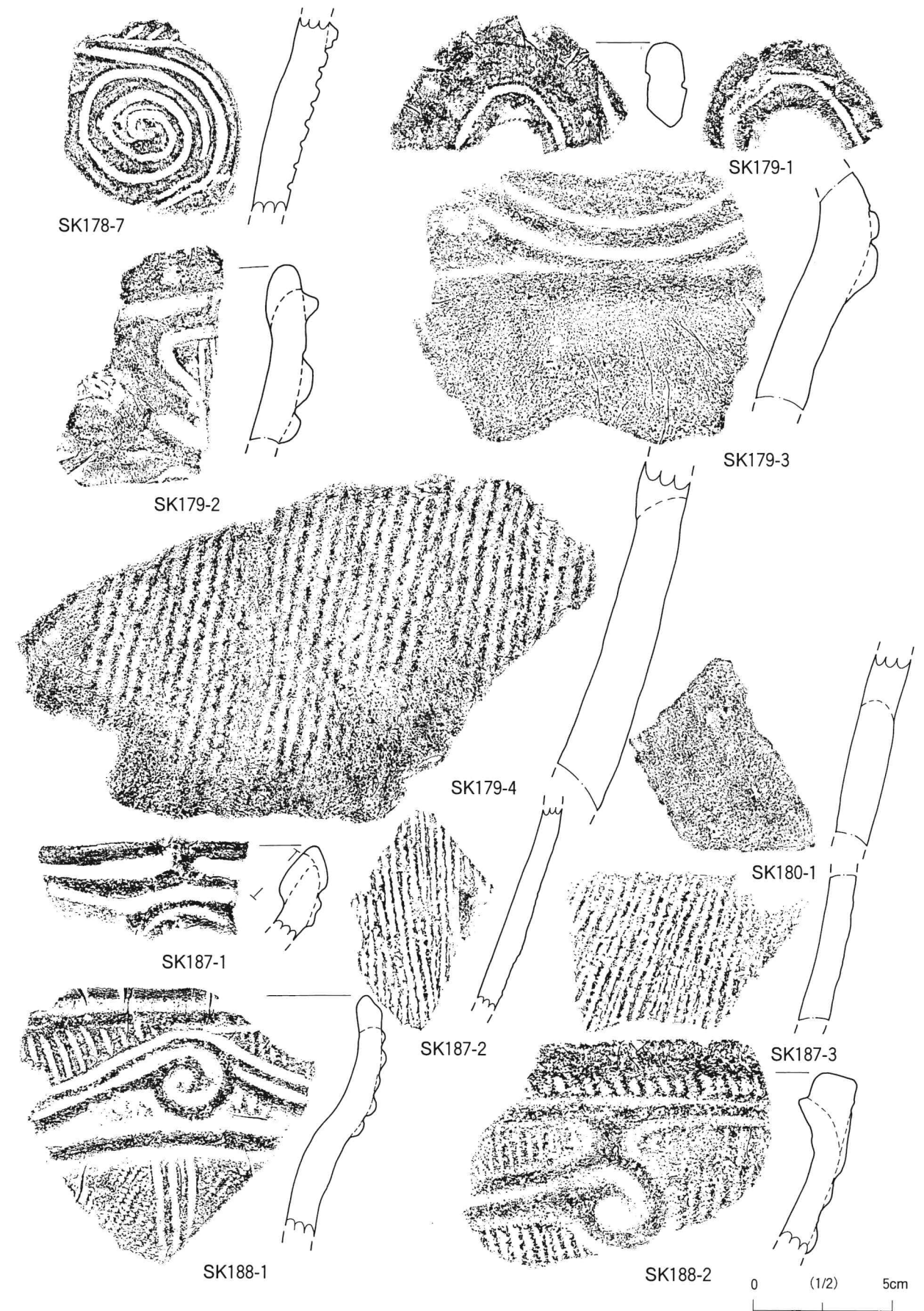
第106図 3区土坑出土土器 (32)



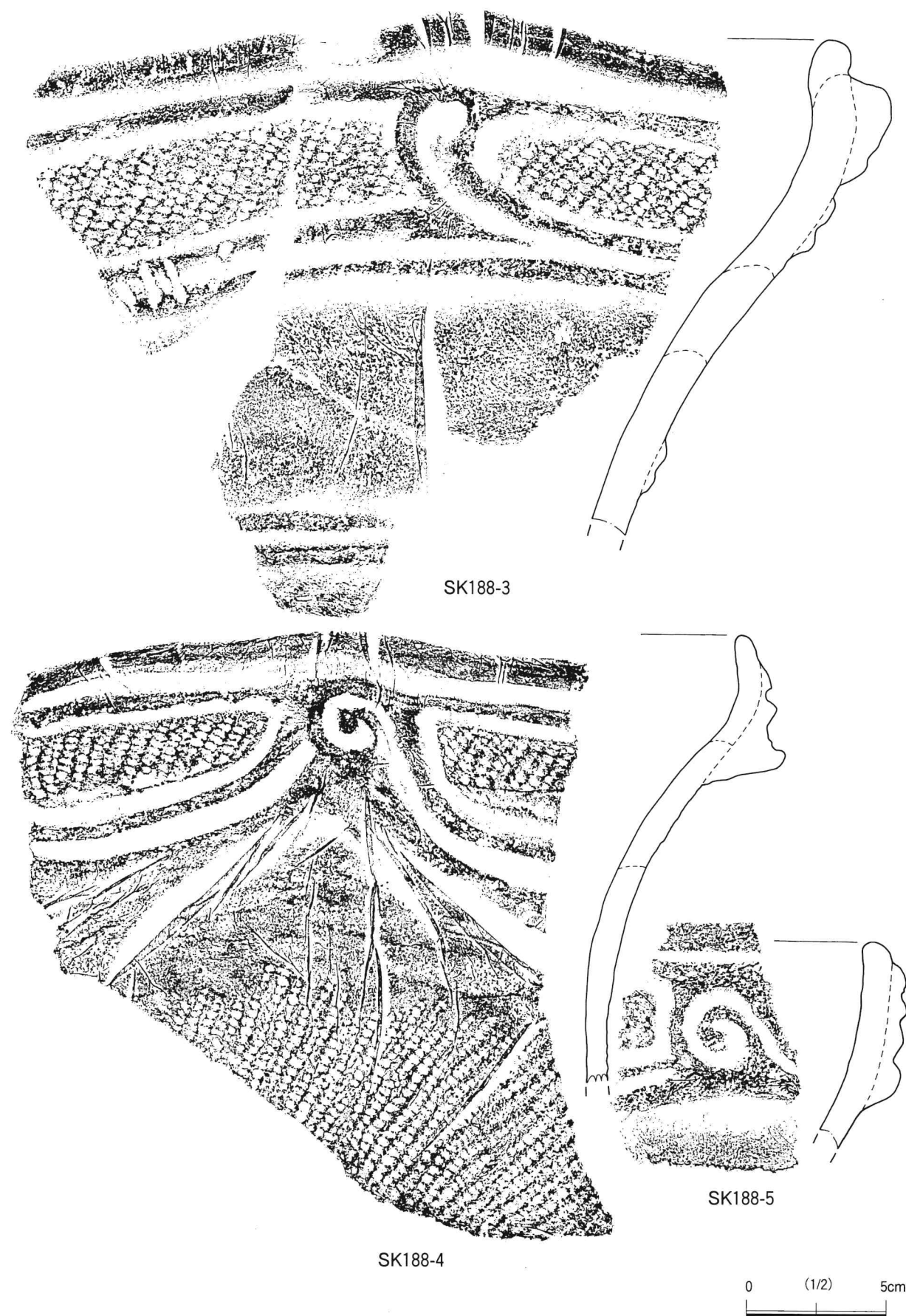
第107図 3区土坑出土土器 (33)



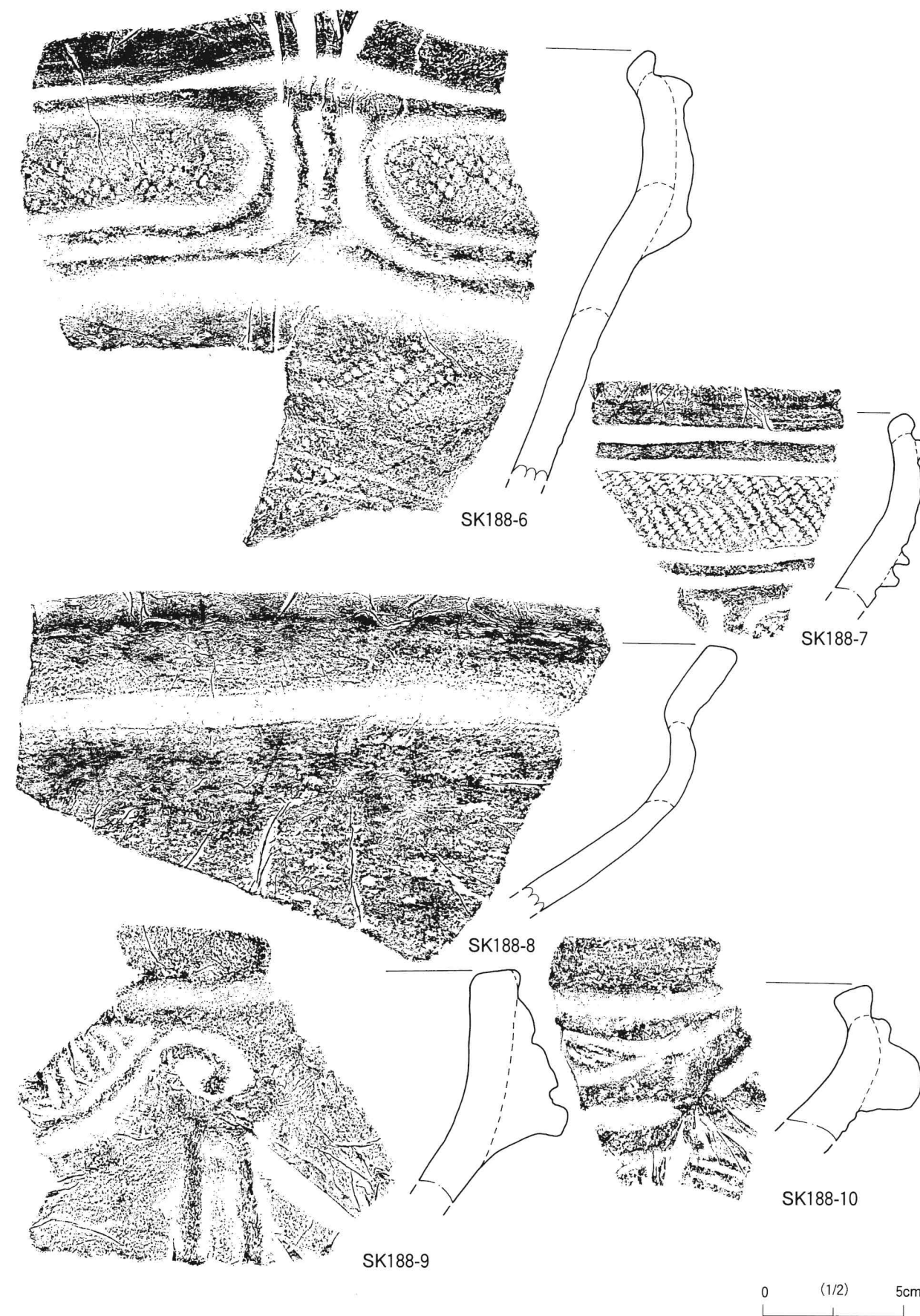
第108図 3区土坑出土土器 (34)



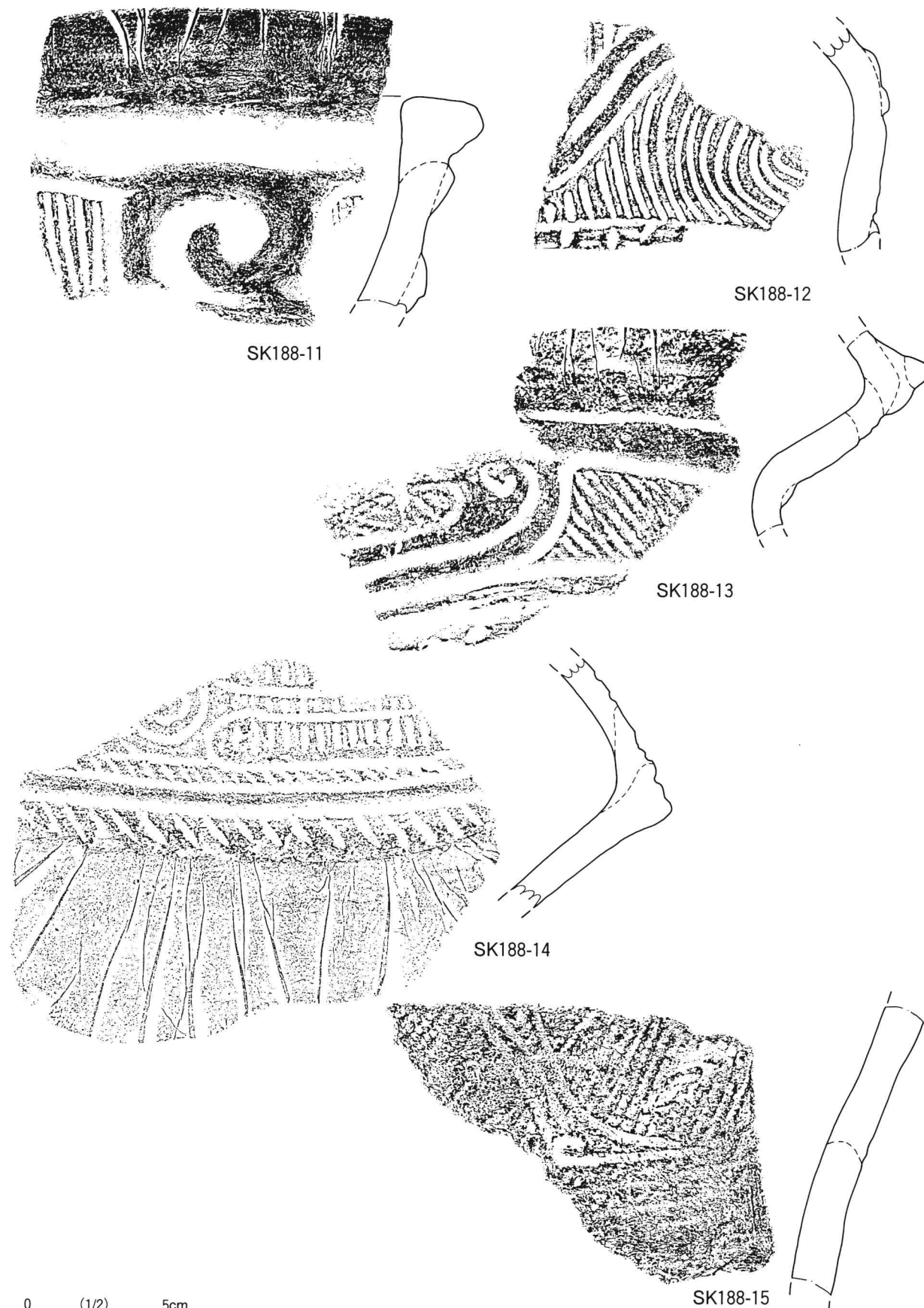
第109図 3区土坑出土土器 (35)



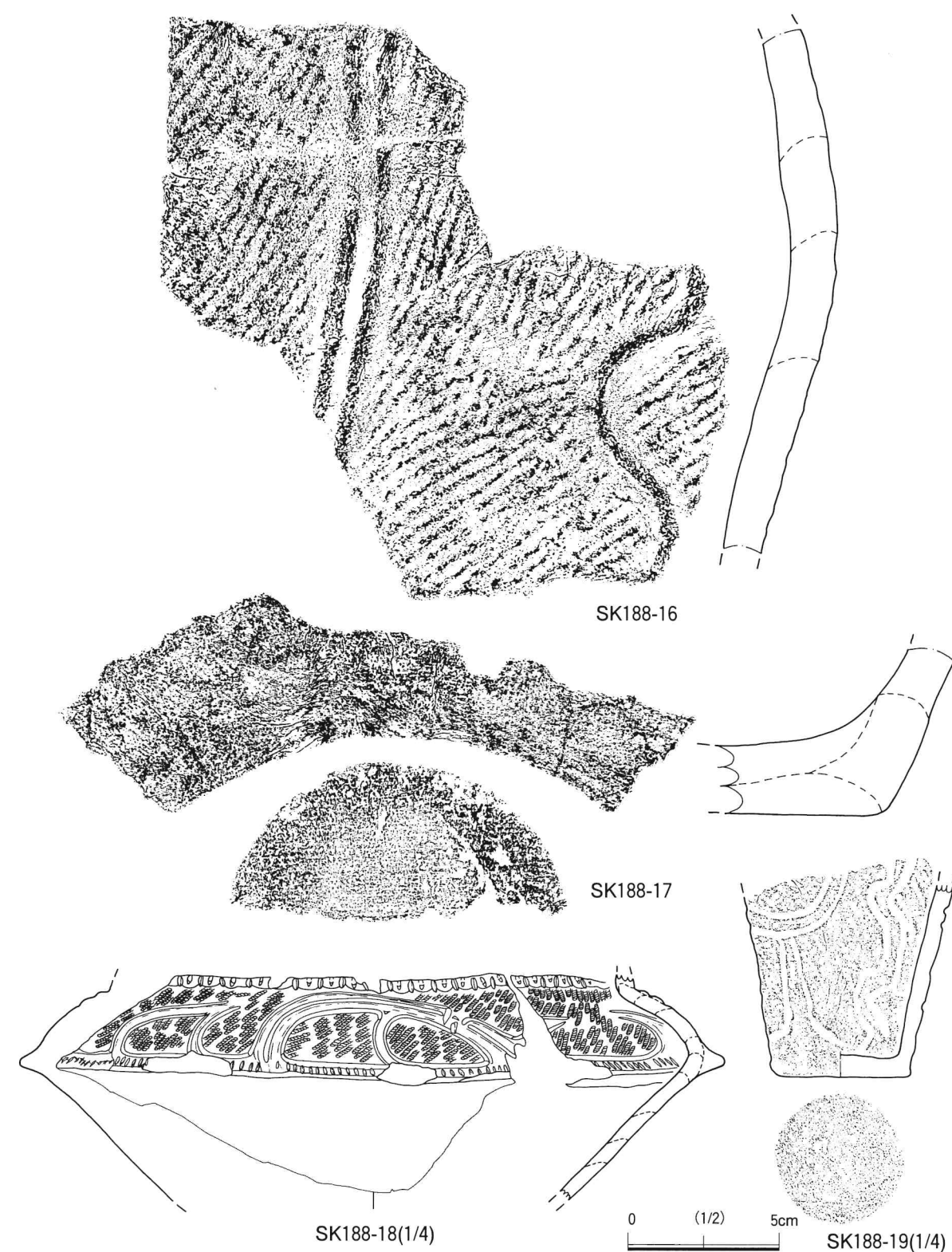
第110図 3区土坑出土土器 (36)



第111図 3区土坑出土土器 (37)



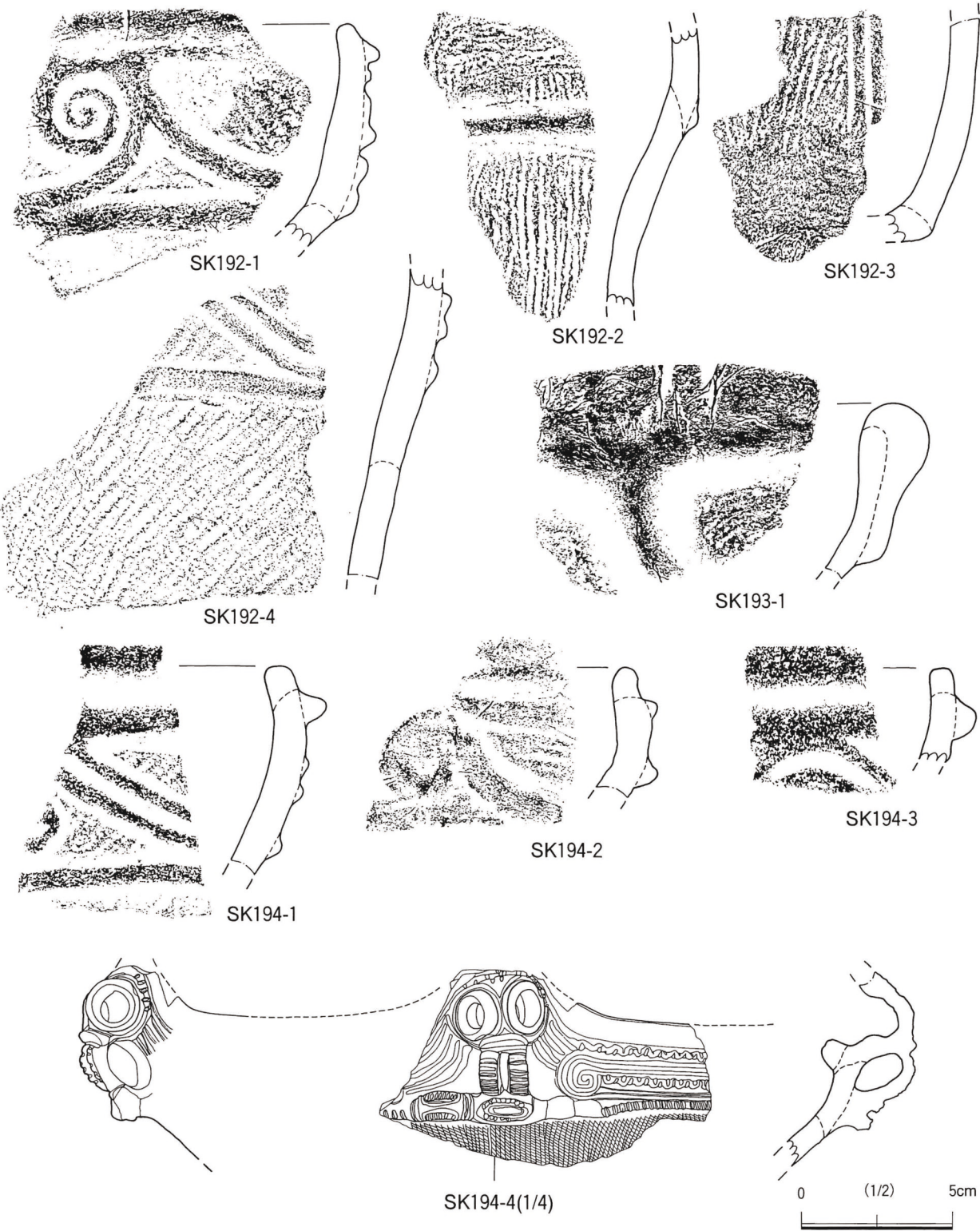
第112図 3区土坑出土土器 (38)



第113図 3区土坑出土土器 (39)

3区の発掘調査中には、土坑が全て砂層でバックされていたことや、覆土に違いが見られないことなどから、かなり短期間のうちに構築・使用され、埋没した土坑群であると考えていた。

しかし、出土土器を改めて概観すると、土坑によっていくつかの異なる段階の土器が出土していることがわかる。重複し切り合っている土坑があることも勘案すると、幾世代かにわたって、この区域が使用されたことが予想される。

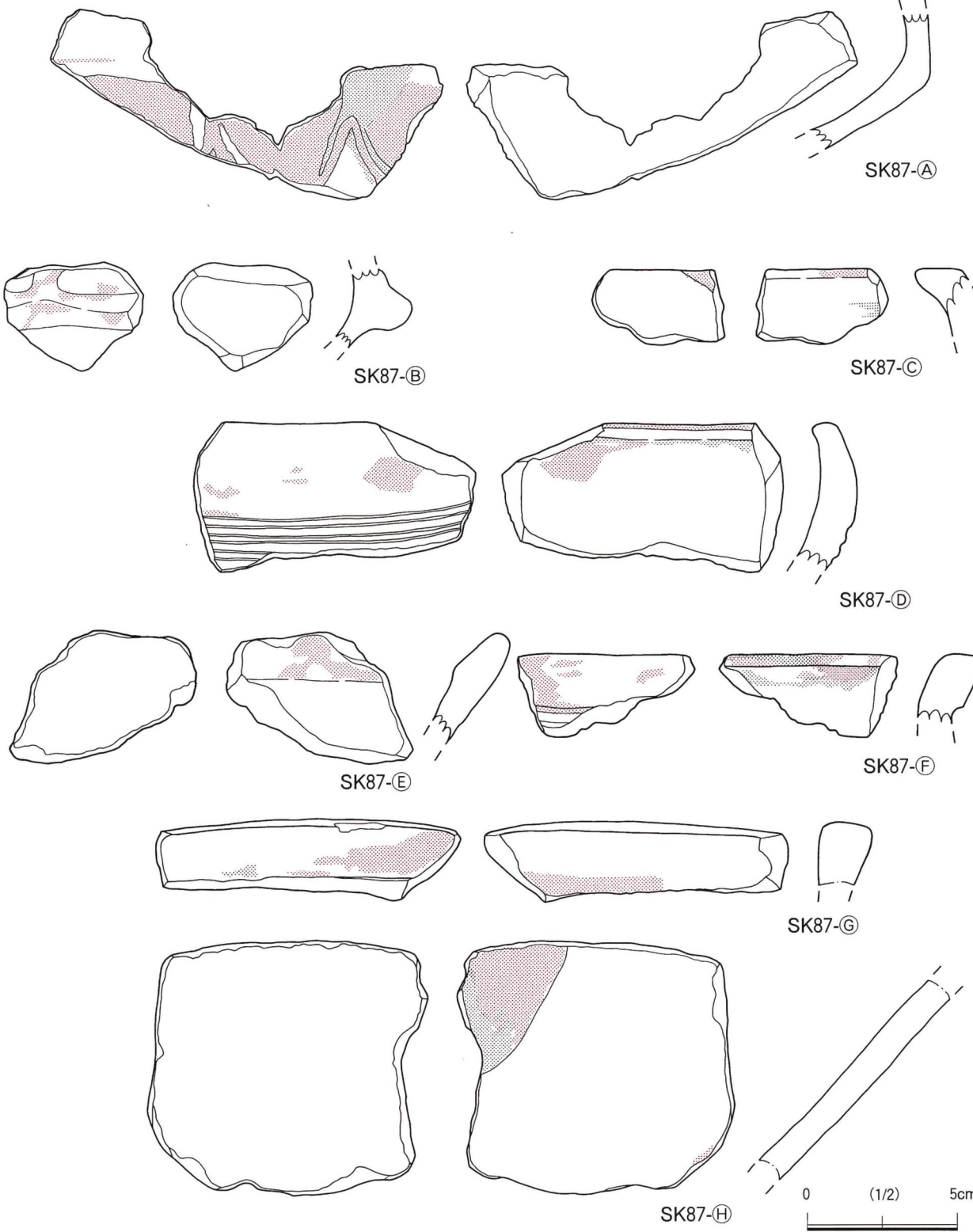


第114図 3区土坑出土土器 (40)

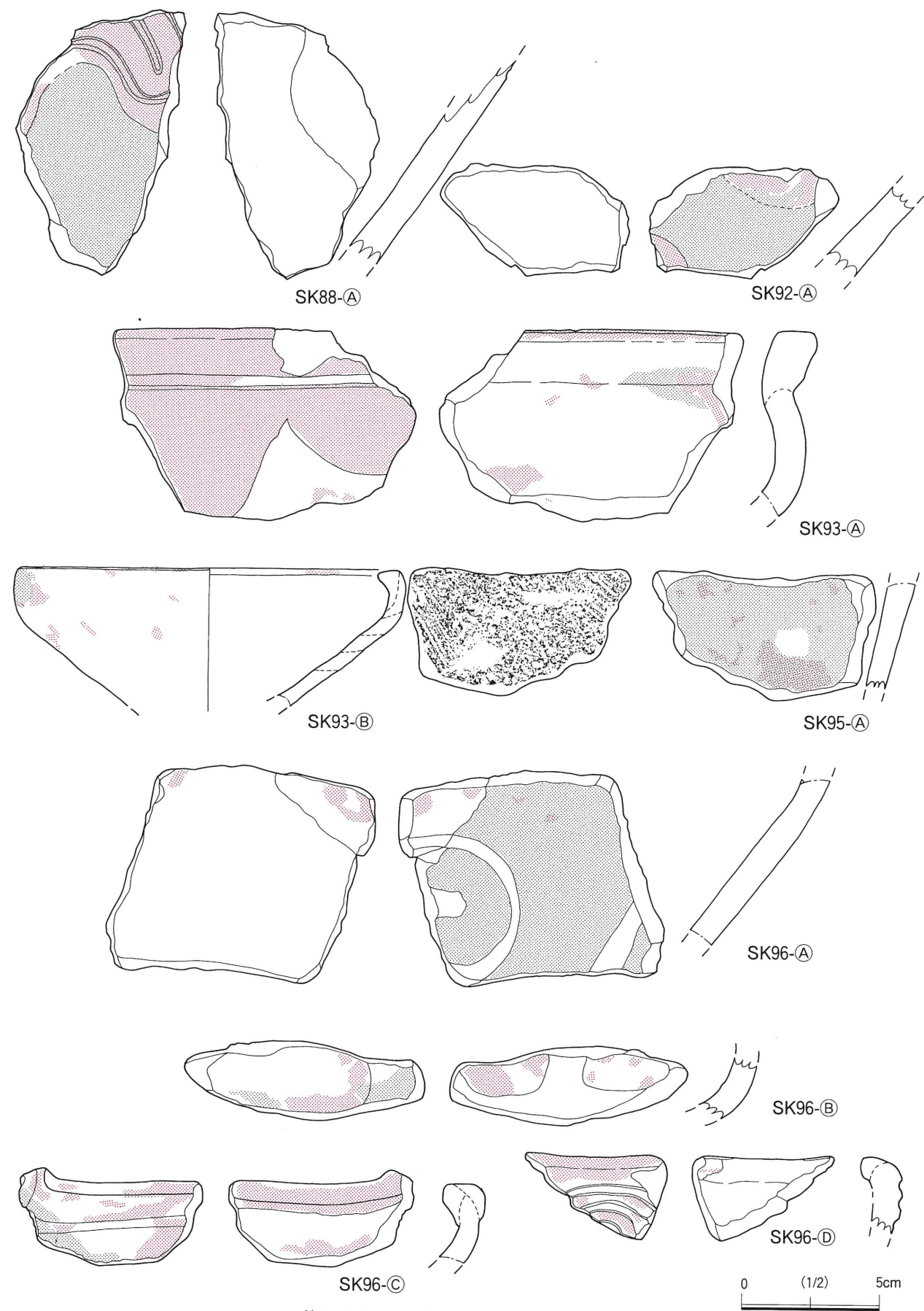
3区の土坑からは、多量の土器破片が出土しているが、土器の出土量が多い土坑と少ない土坑とがある。これが何を意味しているのか明確ではないが、土坑の最終的な機能の違いを示すものであることは間違いない。SK188は、土器の出土量が多い遺構である。SK188-8は浅鉢の破片である。彩色していたものと考えられるが、現状でその痕跡は不明確である。SK188-14と18は、SK169-8とともに、珍しい円盤形土器の破片であるが、これらは同一個体ではない。SK188-19は全周が残る小形深鉢形土器の胴～底部破片である。

(3) 彩色土器

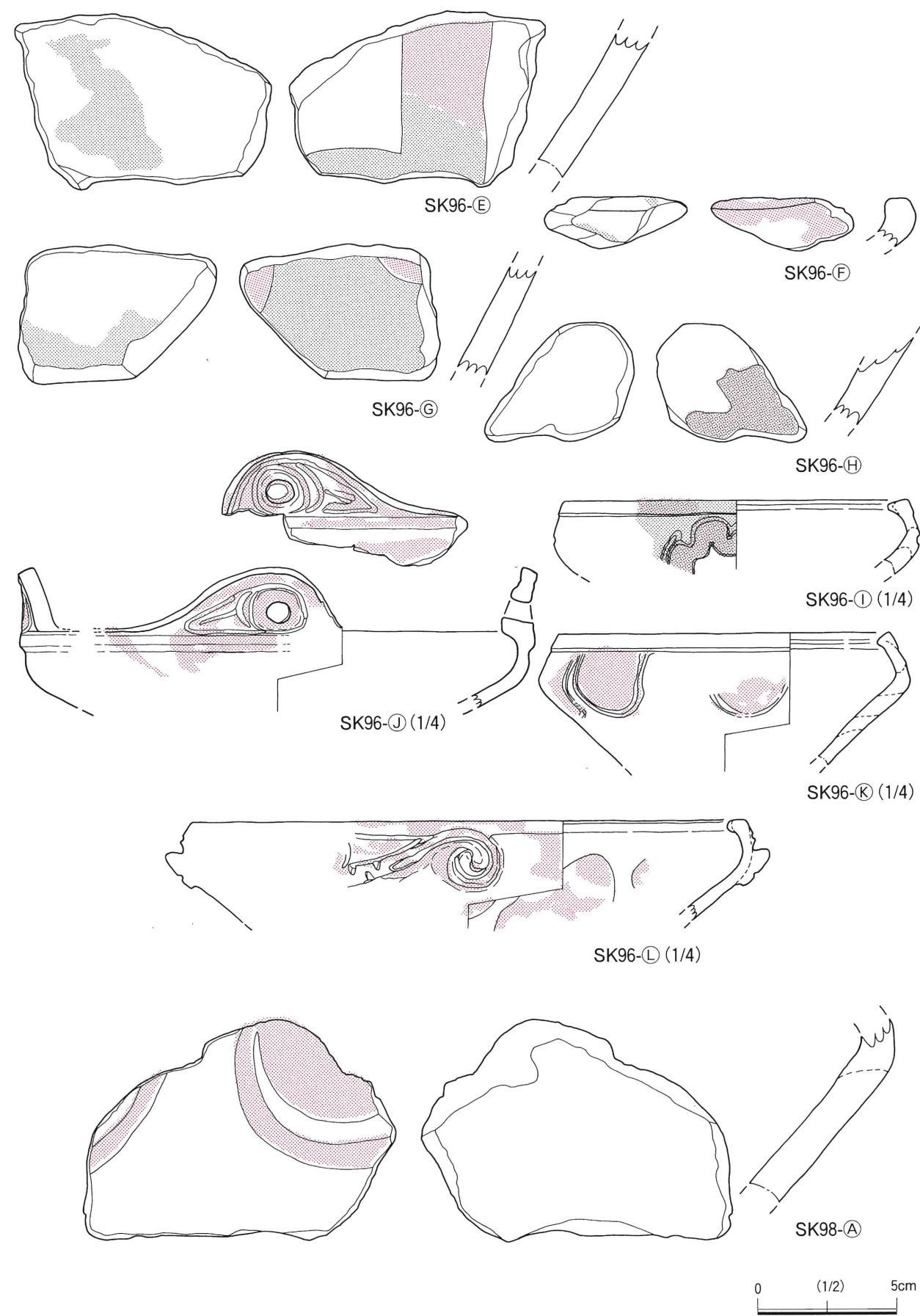
3区からは、多くの彩色土器が出土している。今回、彩色土器を全て図化し、掲載した。黒のスクリーントーンは黒色の彩色、赤のスクリーントーンは赤色の彩色を表す。文様モチーフが明らかなものについては、彩色を实践で囲った。3区は谷地形であり、水づきの環境だったため、赤や黒の彩色が残っていたものと考えられる。これら彩色土器のうち、器形の確認できるものは全て浅鉢形土器であるが、彩色や口縁部形態のパターンは多彩である。



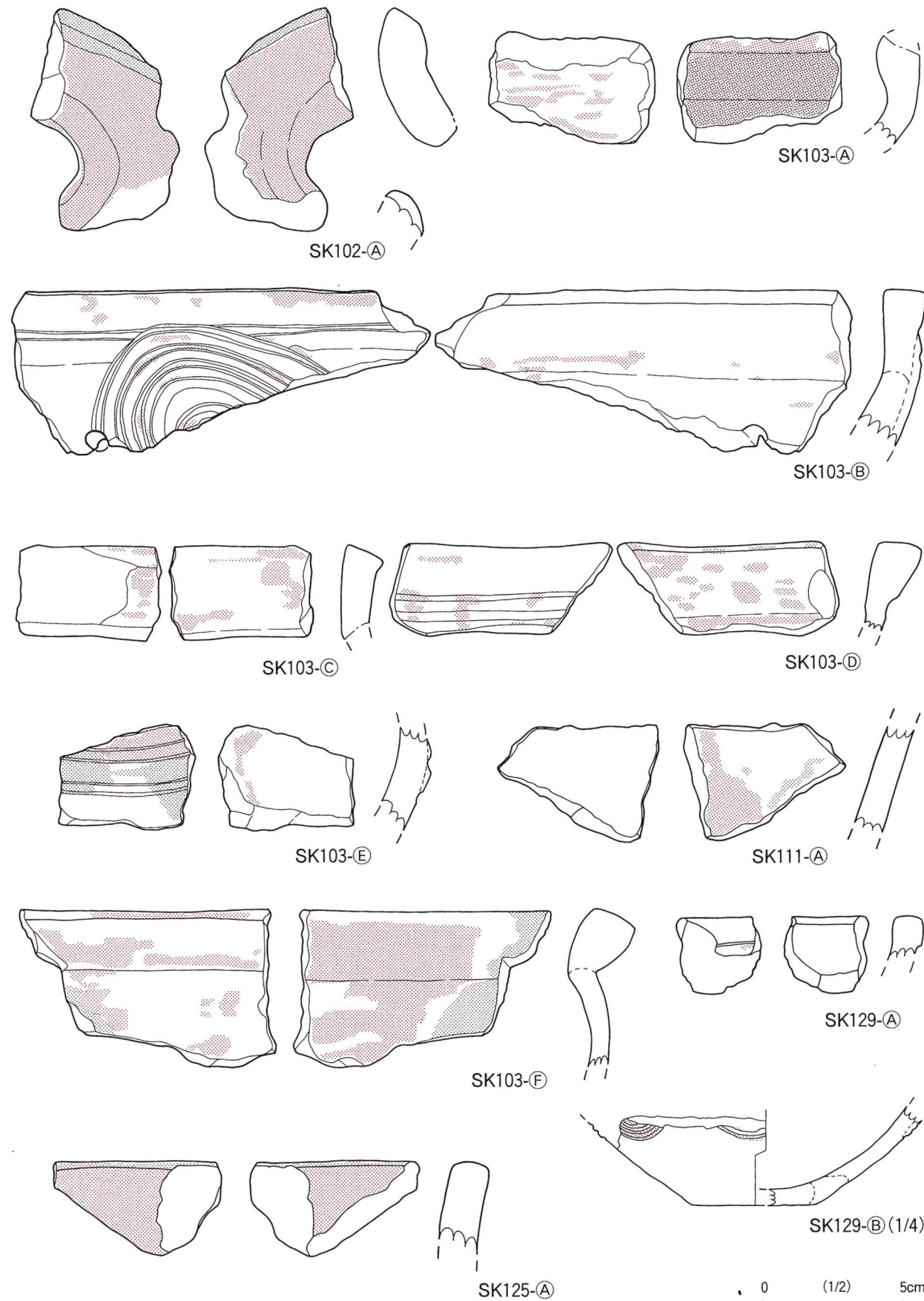
第115図 3区土坑出土彩色土器 (1)



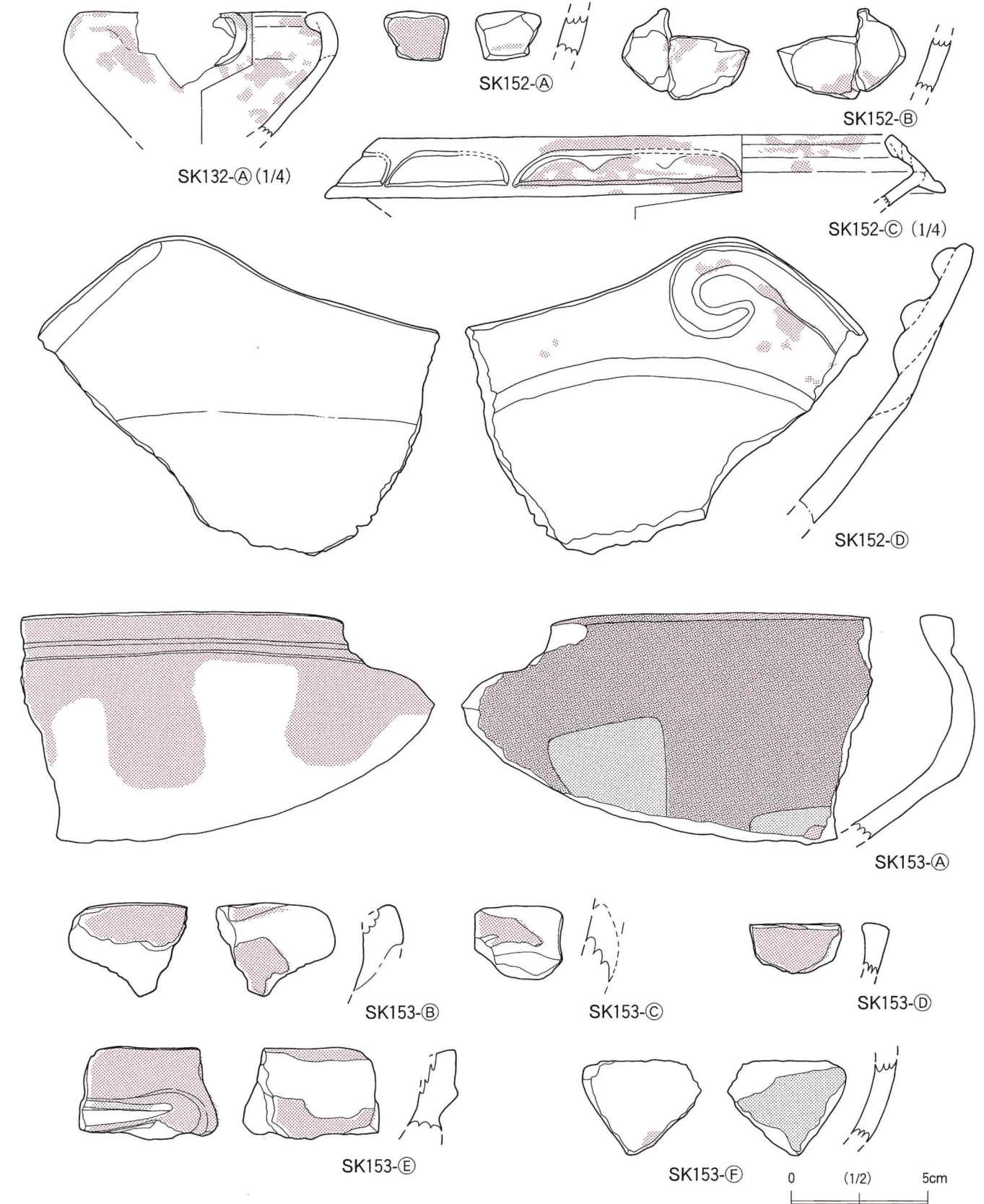
第116図 3区土坑出土彩色土器（2）



第117図 3区土坑出土彩色土器（3）

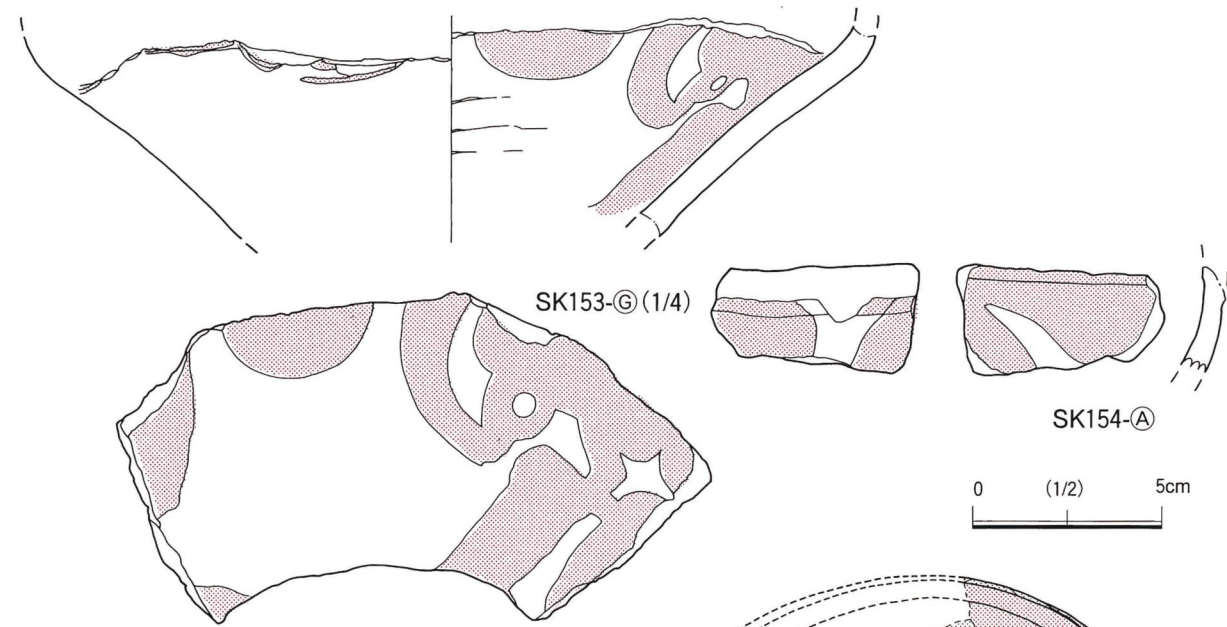


第118図 3区土坑出土彩色土器（4）



第119図 3区土坑出土彩色土器（5）

SK152-Cは、円盤形の浅鉢形土器であろう。SK152-Dは、立体的文様が内側に残り、4～5単位の波状口縁をもつ土器である。胎土には金雲母を多く含む。この遺跡出土の彩色土器の中では比較的古い段階のものであると考えられる。

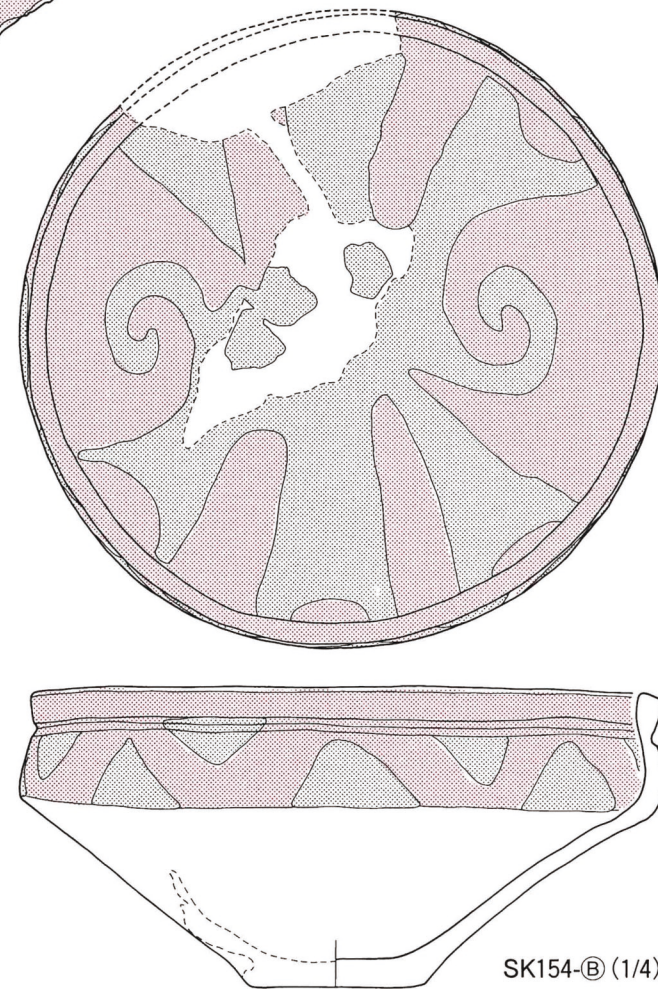


SK153-Gは、破片としては最も残りの良いものの一つである。彩色モチーフの残りも良い。全体はわからないが、内面は曲線を多用した複雑な幾何学的モチーフが施される。外面には沈線が施され、そこに赤色顔料が残っており、口縁部文様帯の一番下の部分がわずかに残存していたものであると考えられる。内面に輪積痕が残っており、1.2～1.6cmほどの高さの粘土紐を積み上げたものと考えられる。

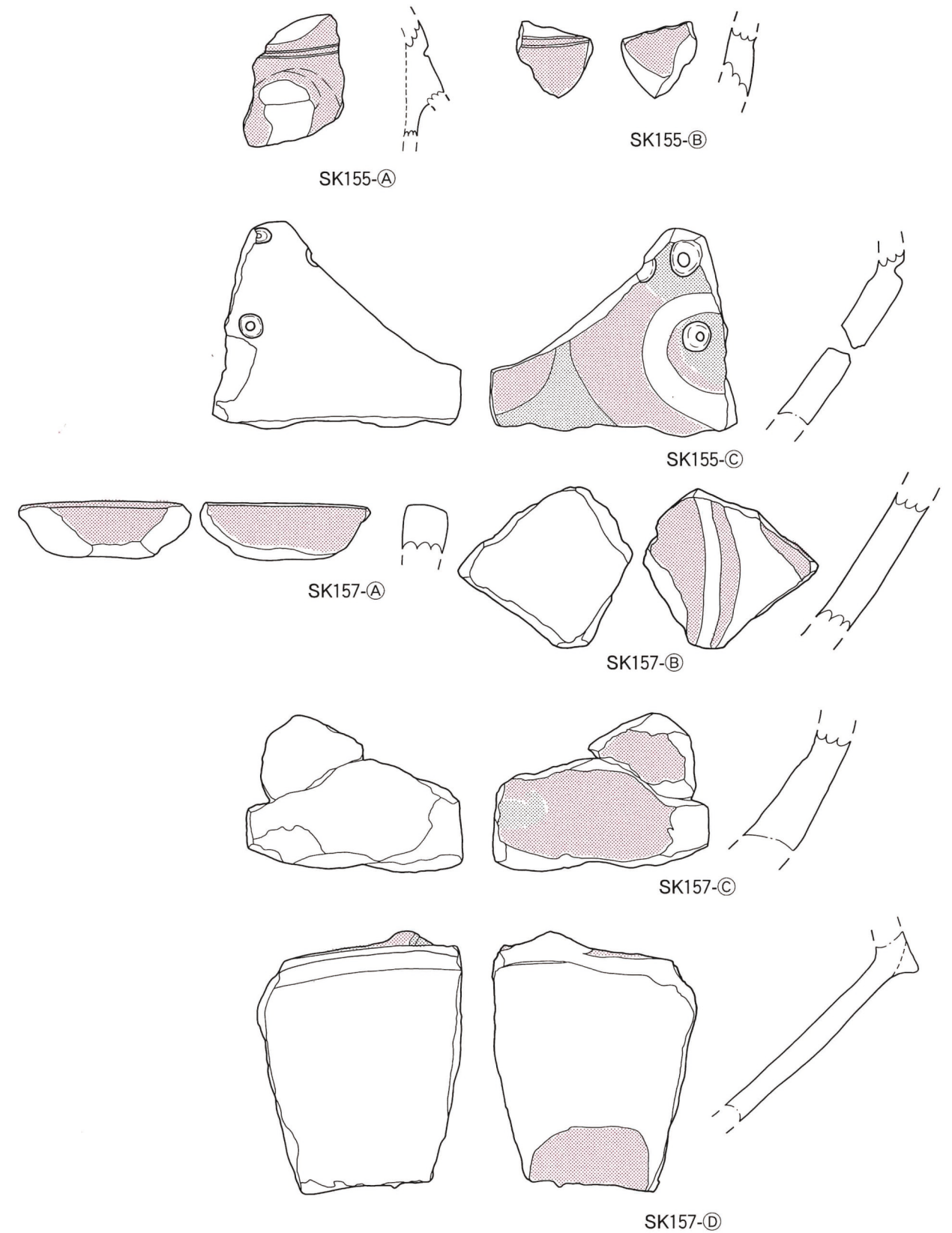
SK154-Bは、ほぼ完形に復元できる彩色土器である。口唇部は、上がほぼ平らで（平縁）、外側に向けてやや突き出る。

口唇部下は、外側に沈線が巡る。幅が広く直線的で、彩色との関連もないことから、SK152-C外面の沈線のように、文様効果を狙ったものではなく、機能にかかわるものであると考えられる。江古田泥炭層遺跡の浅鉢形土器に装着されているツル状の付着物のようなものを縛り付けるために準備されたくほみであろう。

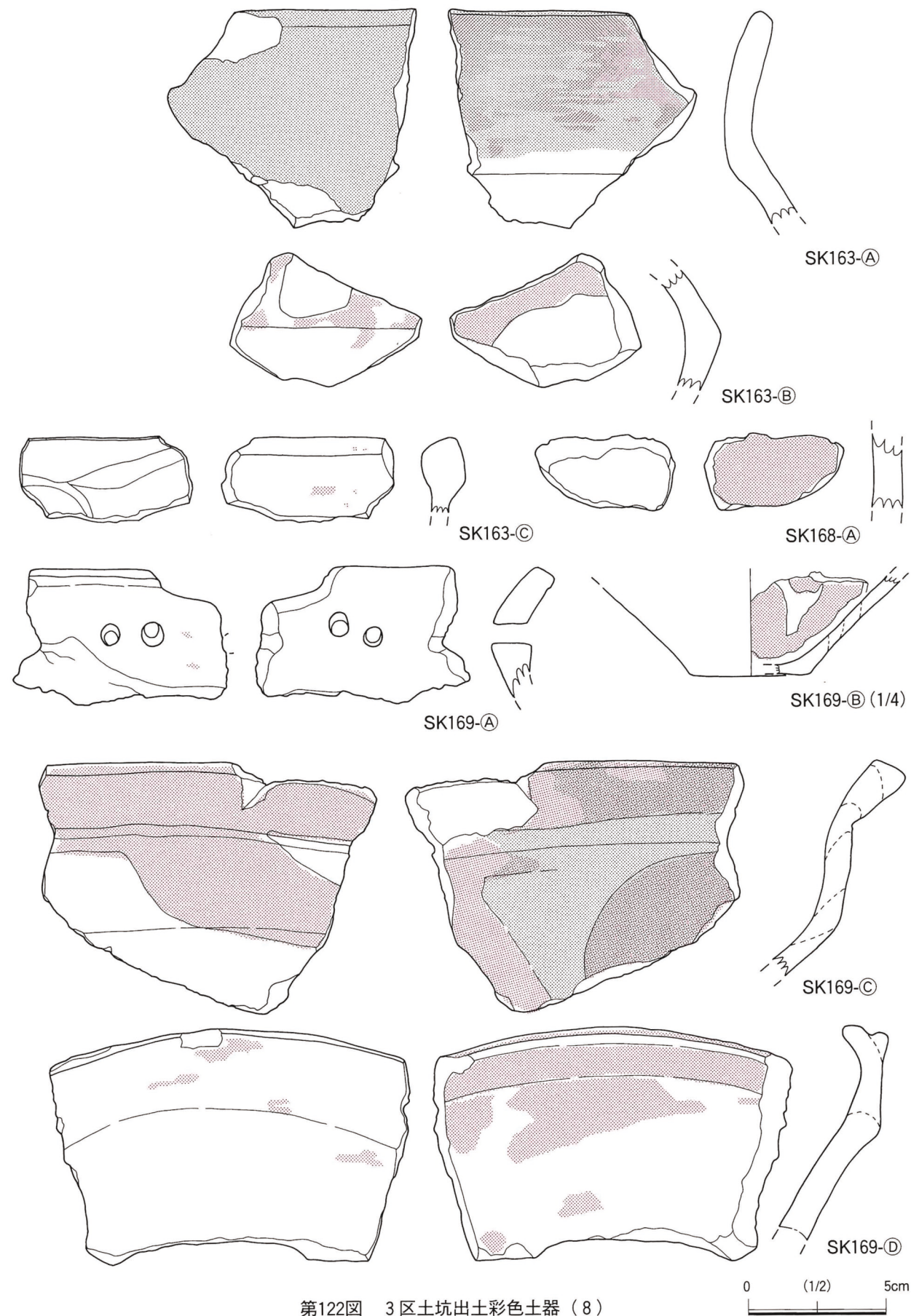
こうした口縁部沈線を持つ浅鉢形土器は、ほかにも多く出土している。浅鉢形土器の細分形式を考える上では、沈線が文様効果を狙ったものなのか、それとも機能に関わるものなのか、分別していくことが重要である。



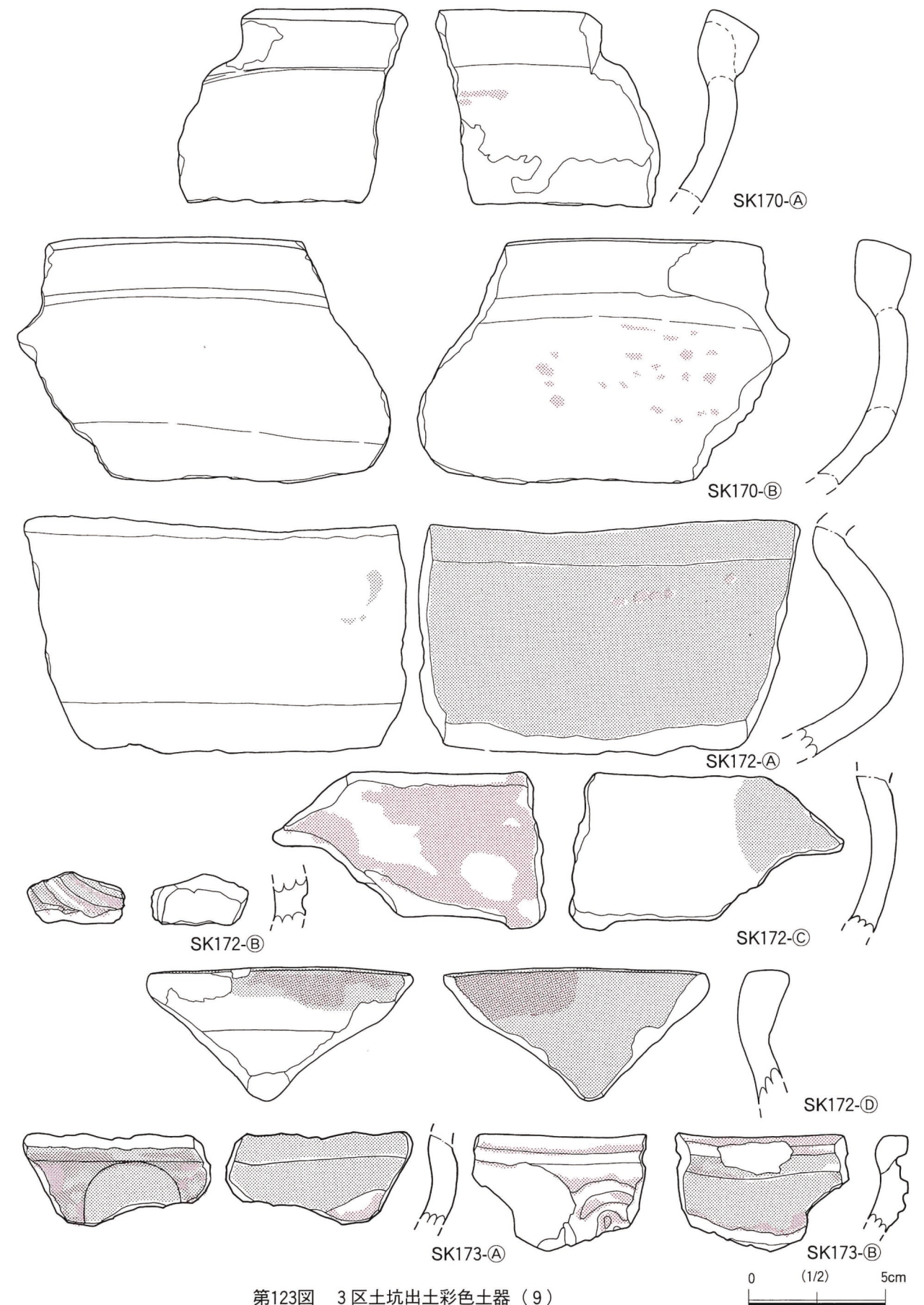
第120図 3区土坑出土彩色土器（6）



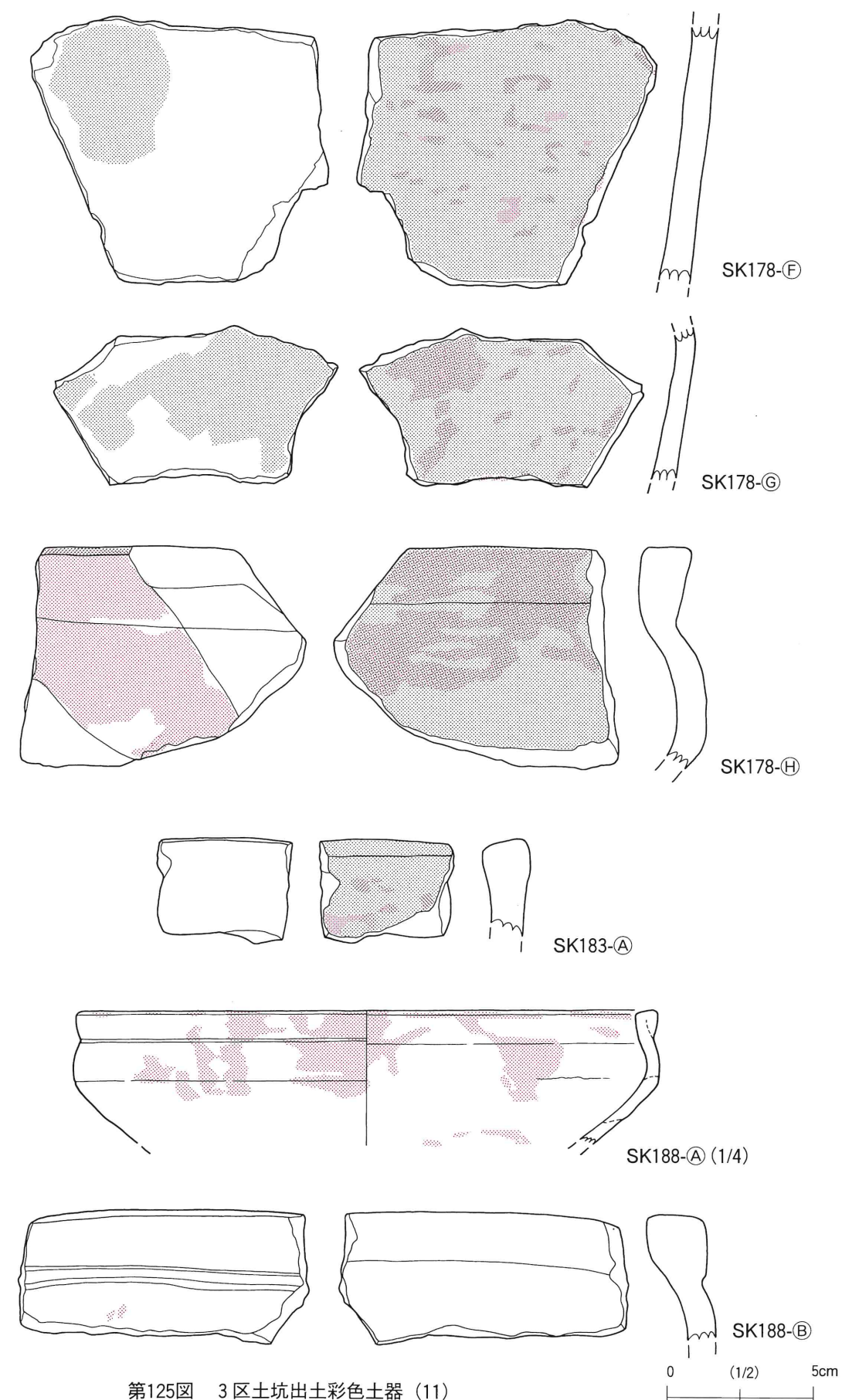
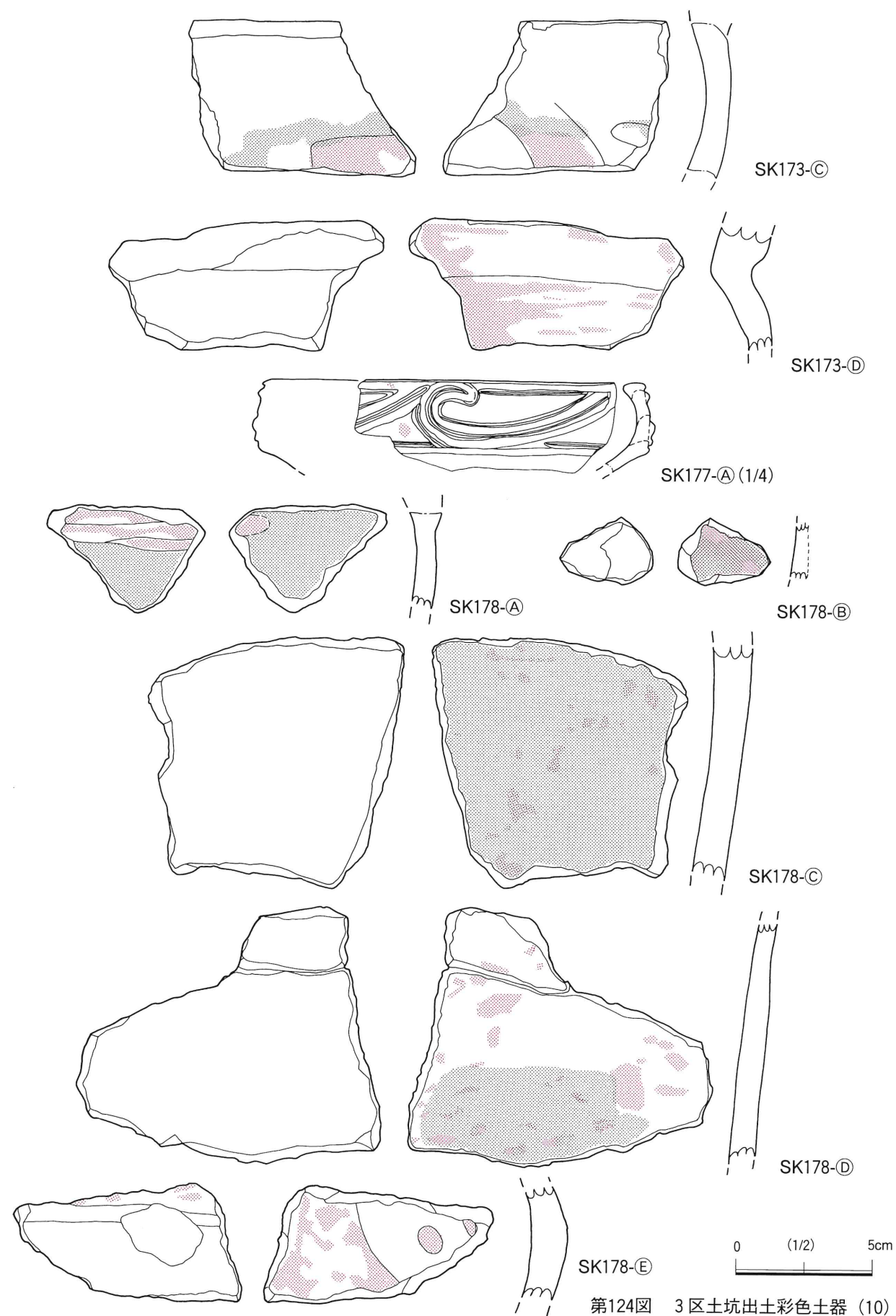
第121図 3区土坑出土彩色土器（7）

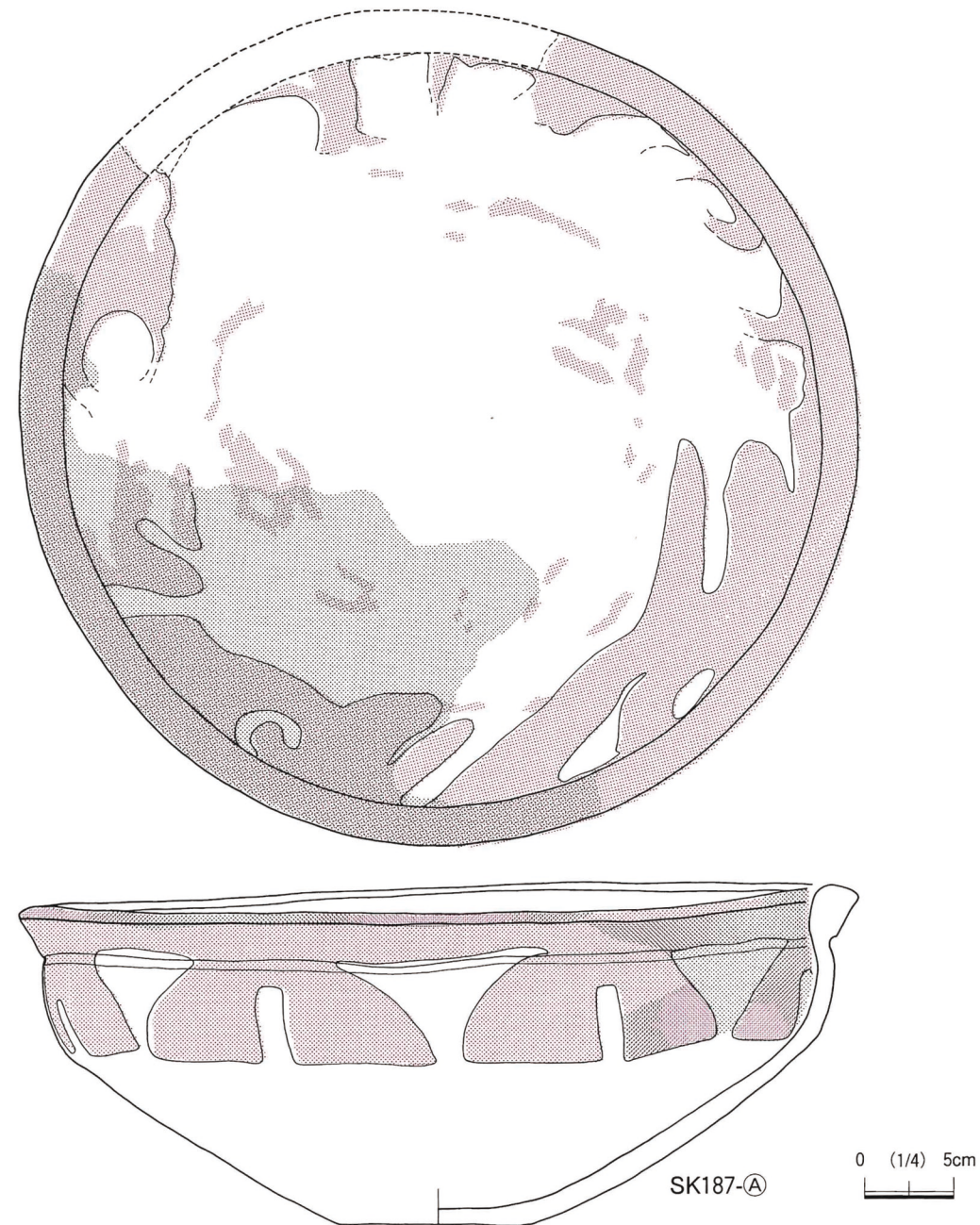


第122図 3区土坑出土彩色土器（8）



第123図 3区土坑出土彩色土器（9）



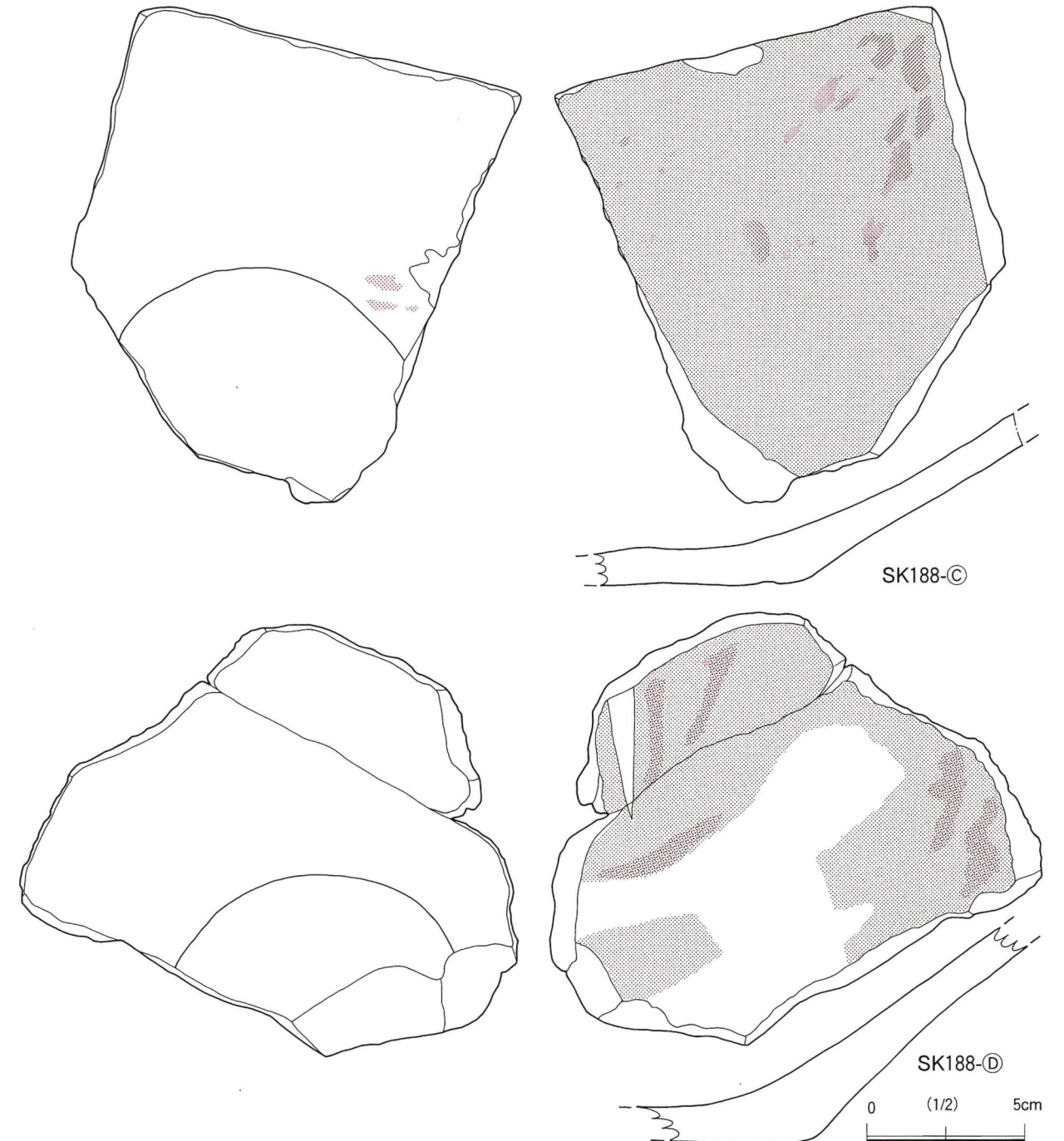


第126図 3区土坑出土彩色土器 (12)

SK187-Aは、口唇の一部が欠落しているほかは、ほぼ完形に復元できる。かなり大形であり、口縁はややゆがむが、意図的なものではなく、平らに整形しようとしたがあまりに大きいため、うまくいかなかったものと考えられる。口唇下の外側には、沈線が巡るが、すでに述べたように、これは飾るための沈線ではなく、機能に関わる沈線である可能性が高い。器形は懐が深く、かなりの量のものが納められる。

彩色は赤色のみである。内面は曲線を多用した彩色が施されるが、周縁を除いて剥がれ落ちている。そのため、彩色モチーフの全容はわからないが、対称的な文様であるように見受けられる。外面は、口唇が全て赤色に塗られている。沈線の下は別の文様帯になっていて、袂状耳飾りのような文様が8単位施される。

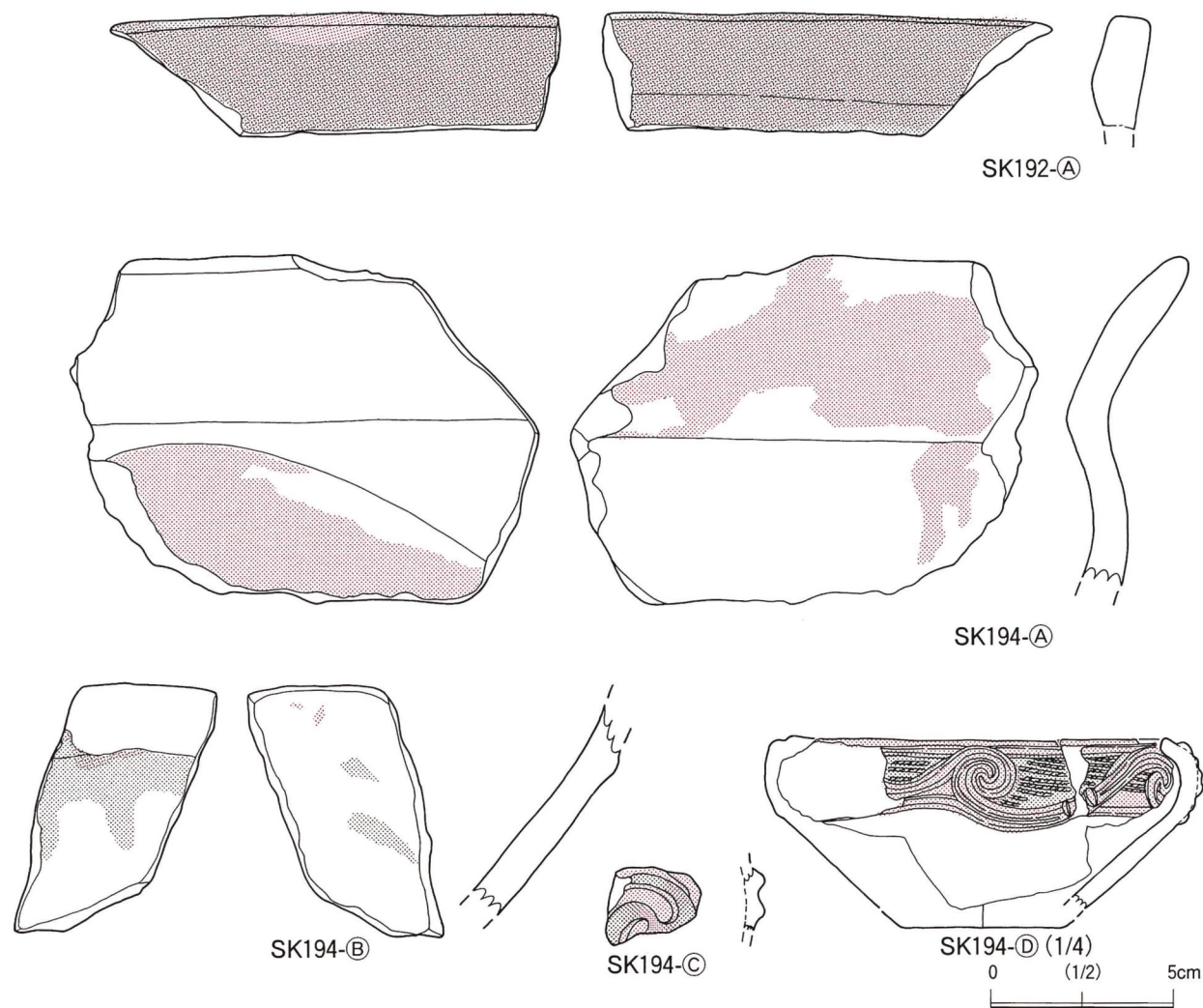
内面は、保存状態が悪くて剥がれ落ちたというよりも、摩滅しているように見受けられる。意図的に磨かれたというより、かなり使い込まれたことにより摩滅したと考えられ、この器が何かの目的で使用されていた器であることを暗示している。



第127図 3区土坑出土彩色土器 (13)

SK188-C、SK188-Dは浅鉢形土器の胴下半～底部破片である。双方とも、底径は直径約10cm。表面には彩色の痕跡がほとんどないことから、当初より塗られていなかったものと考えられる。ほかの彩色土器をみても、この表面胴部下半には、彩色が施されていないことが多い。例えば、完形で彩色の残りの良いSK154-B、SK187-Aなども、表面の文様は口唇部と、口縁部下の文様帯を除いては施されていない。これに対して、内面には全体に彩色文様が施されている。

この理由として、彩色ある浅鉢形土器の胴部下半は、おおむね底部に向かって傾斜が急になっていき、ここに施文しても、横から見たときの視覚効果が薄いために、彩色しなかったと考えられる。あるいは、縄文人が上や横から見たとき（使用する時）には彩色が見え、下から見たとき（収納し伏せておいた時）には彩色が見えないという効果をあえて狙ったものではないかとも考えられる。



第128図 3区土坑出土彩色土器 (14)

SK192-Aは、小破片のため正確な口径が測定できないが、完形であればかなり大きな土器であると思われる。

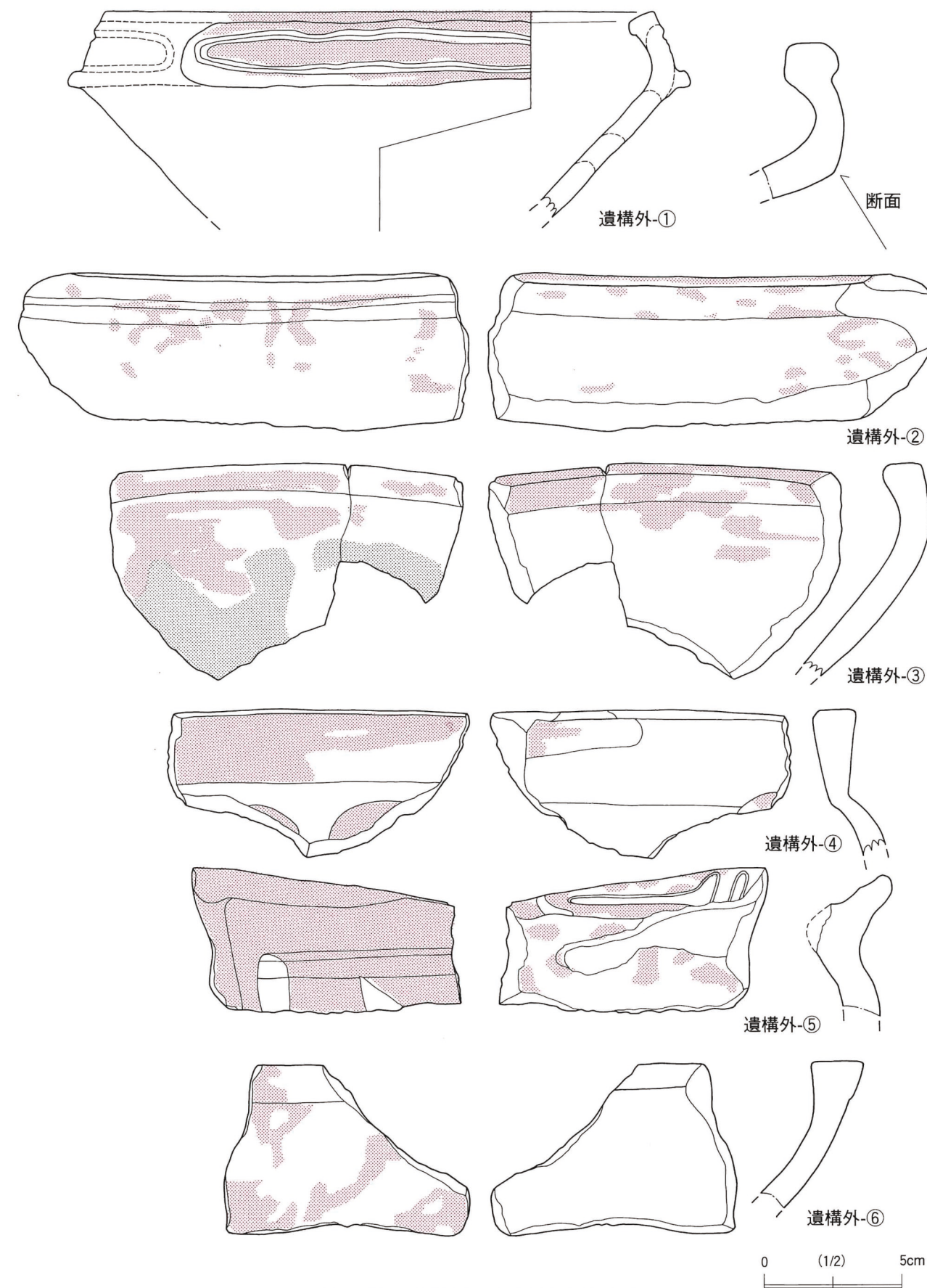
SK194-Aは、口唇部が丸みを帯びており、口縁はくの字に折れ曲がる。

SK194-Bは、口縁部下の部分だと考えられる。内面にわずかに彩色の痕跡が残る。

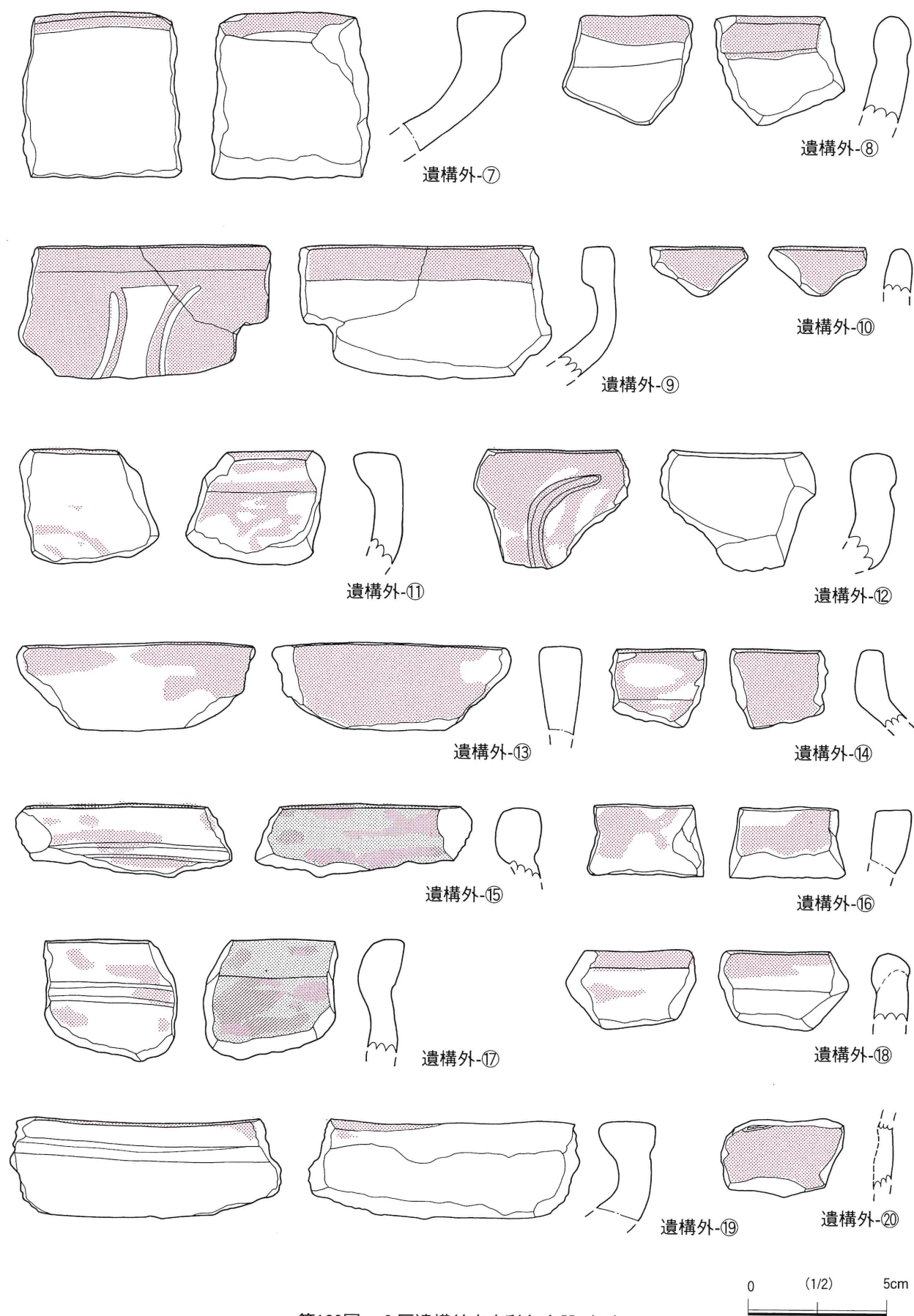
SK194-CとSK194-Dは同一個体である。底部は発見されていないが、口縁～胴部の器形から見て浅鉢形土器と考えられるため、底部の想定線を描いておいた。この土器は、彩色土器には珍しく、加曽利E式土器に特徴的な、6単位の立体的口縁部文様帯がある。しかし、彩色はこの口縁部文様帯に施されているだけで、内外面とも彩色によるモチーフの描き出しは無い。

先に筆者は、この遺跡の彩色土器の一部を資料紹介した際に、「彩色された浅鉢が立体的文様を持つことはごく珍しい」とした(角田・神戸2000:前掲75頁)。しかしその後、詳細に遺物を観察したり、ほかの遺跡の出土例などを実見し、この見解を訂正する必要があると感じている。黒色・赤色などの彩色により、モチーフを描き出している土器が、別の立体的な文様帯を持つことは確かにまれであるが、このSK194-Dのように、立体的文様の上に単に彩色が施されていることは、ほかの遺跡での出土例、特にこの遺跡で出土している土器より、やや古い段階の土器においてはそう珍しいことではない。正しくは「彩色によるモチーフと立体的文様が個別に共存する土器はごく珍しいが、立体的文様の上に彩色が施されることはある」である。

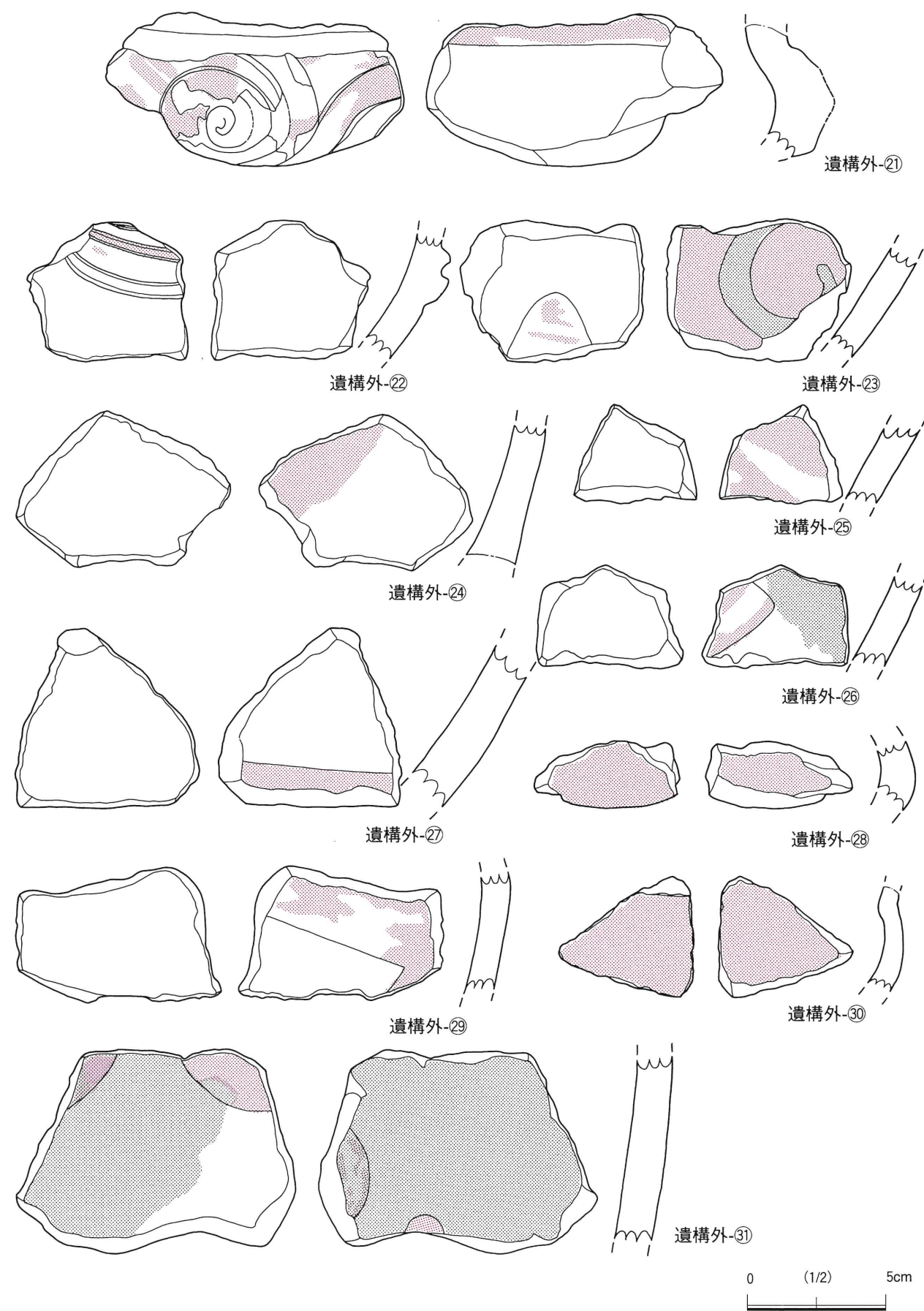
このSK194-Dは、立体的文様に対応して、赤色と黒色を塗り分けた土器である。



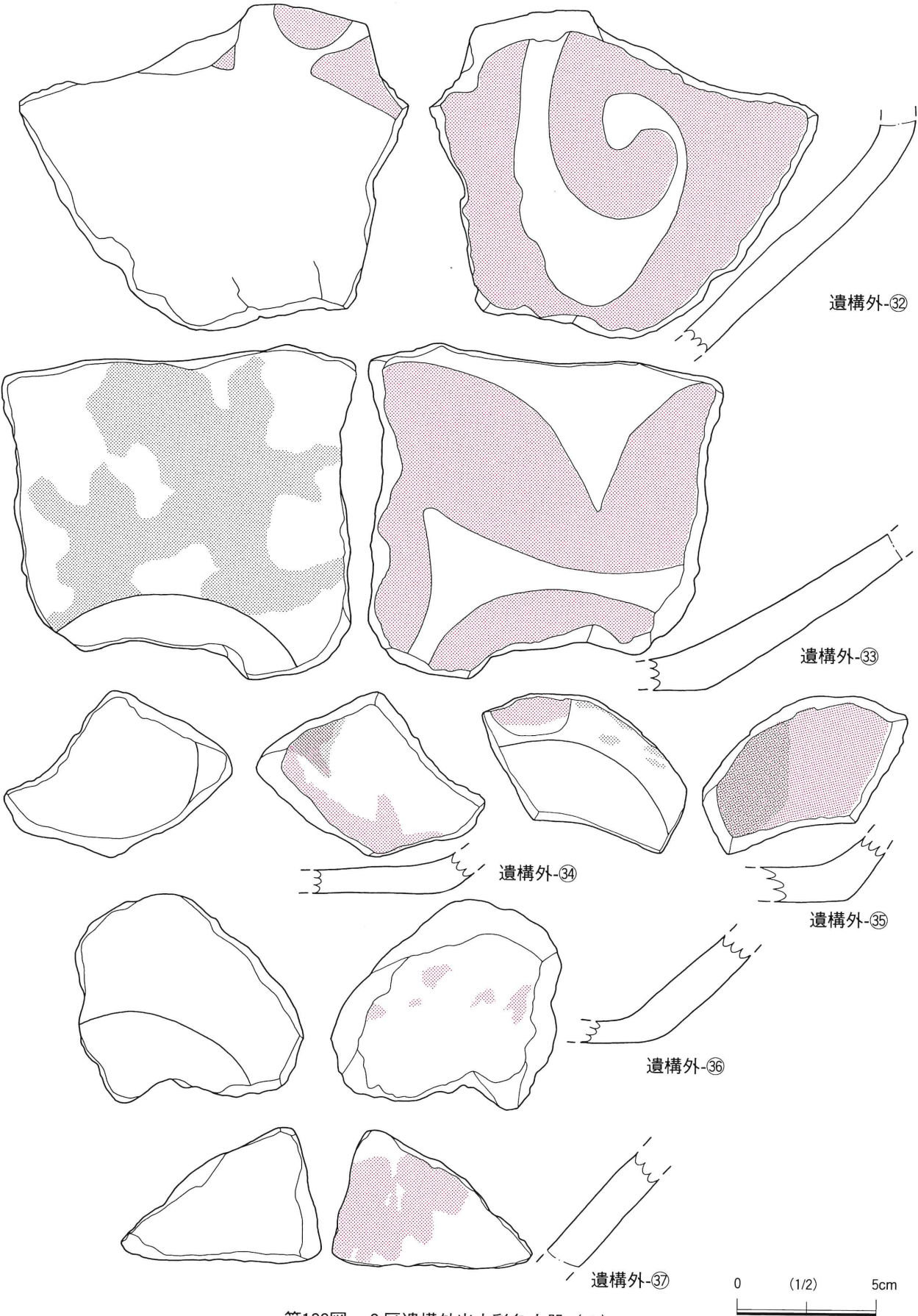
第129図 3区遺構外出土彩色土器 (1)



第130図 3区遺構外出土彩色土器（2）



第131図 3区遺構外出土彩色土器（3）



第132図 3区遺構外出土彩色土器（4）

（4）石器

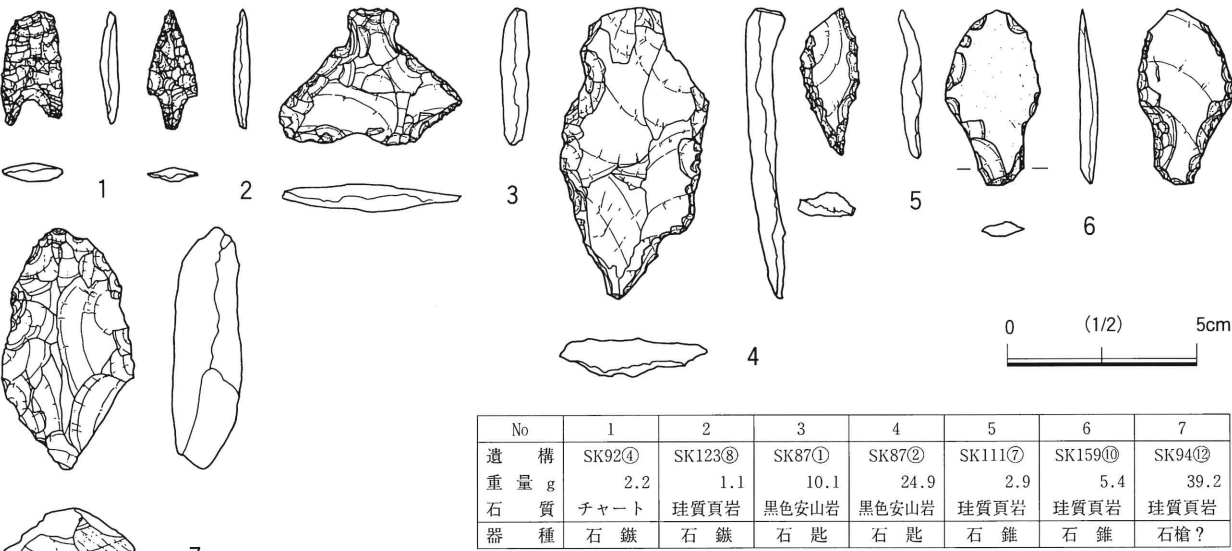
3区土坑からは、多量の石器が見つかった。器種も多彩であるが、打製石斧や磨石などが多く、中期の器種粗製の典型的な例を示している。また、結晶片岩の棒状礫は、2区同様、3区でも一定量の出土をみる。

1）石鏃・石匙・石錐・石槍（第133図）

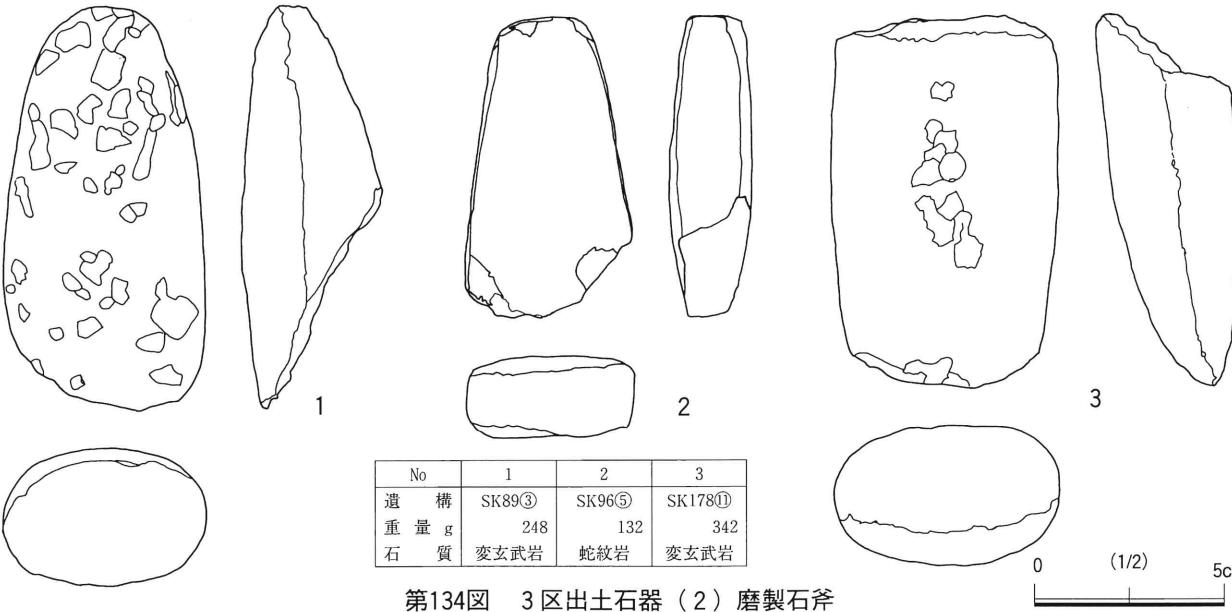
- 1・2は石鏃である。第133図は有茎で良質の珪質頁岩を使用しており、東北の香りのする石器である。
- 3・4は石匙である。3は横形の石匙で、あまり丁寧には調整されていない。4は、いわゆる粗製石匙である。
- 5・6は石錐である。5は端部の厚みがあまり無く、石鏃未製品の可能性もある。6は先端が欠損している。
- 7は石槍としたが、先端部作り出しは甘い。両面調整石器である。

2）磨製石斧（第134図）

1・3は同じような質の、緑色の石材を使用している。敲打調整後、磨いて完成させているが敲打痕が表裏に残る。2は良質の蛇紋岩製である。いわゆる定角式といわれるものである。刃部破碎後、再調整のため磨いたものの、再度刃部が破碎している様子が見て取れる。SK96の底面から出土した。



第133図 3区出土石器（1）石鏃・石匙・石錐・石槍

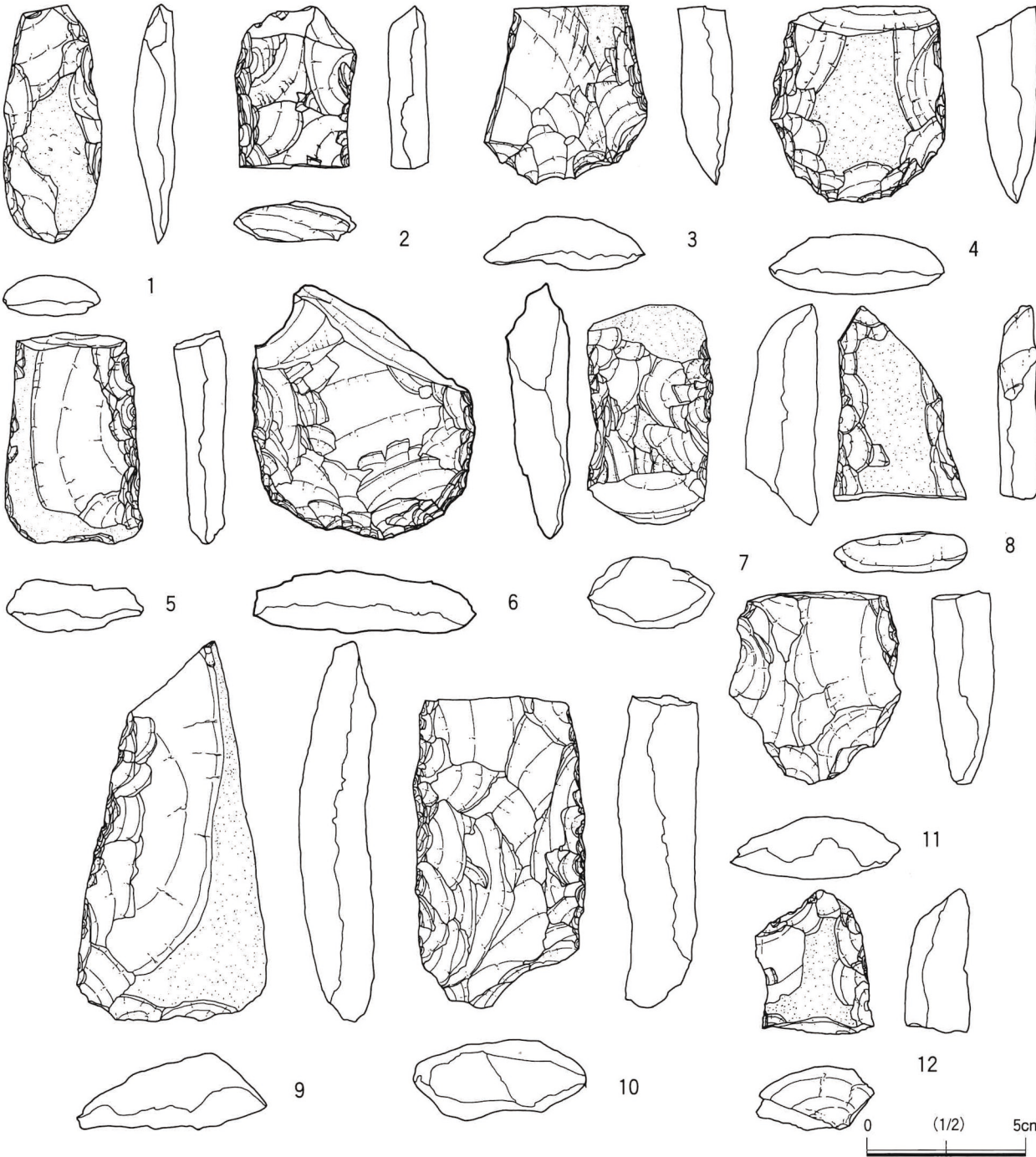


第134図 3区出土石器（2）磨製石斧



No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
遺構	SK87①	SK87②	SK89③	SK89④	SK92⑤	SK92⑥	SK92⑦	SK93⑦	SK96⑪	SK96⑫	SK96⑬	SK96⑭
重量 g	106	62	99	138	78	182	97	112	114	186	77	69
石質	変玄武岩	黒色頁岩	デイサイト	細粒輝石安山岩	デイサイト	黒色頁岩	珪質頁岩	流紋岩	珪質頁岩	流紋岩	珪質頁岩	珪質頁岩

第135図 3区出土石器 (3) 打製石斧①



No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
遺構	SK96⑨	SK96⑬	SK96⑬	SK97⑮	SK98⑯	SK100⑰	SK100⑱	SK103⑳	SK103㉑	SK103㉒	SK103㉓	SK103㉔
重量 g	34	36	52	77	59	95	76	38	156	168	74	36
石質	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	流紋岩	硬質泥岩	硬質泥岩	珪質頁岩	デイサイト?	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩

第136図 3区出土石器 (4) 打製石斧②

1は、小形品である。使用痕は観察できず、非実用的なミニチュア品かもしれないが、スクレイパーとしての機能を持ち、皮なめしなどの用途に用いられるために製作された可能性もある。

2～12は、9を除き、使用により折れている。横方向に力が加わった結果であろう。なお、10・11の先端部は破砕しており、縦に力が加わったものと考えられる。9は、打製石斧として使用された痕跡はない。おそらく未製品であろう。



No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
遺構	SK103㉔	SK103㉔	SK103㉔	SK104㉔	SK106㉔	SK106㉔	SK108㉔	SK104㉔	SK106㉔	SK107㉔	SK112㉔	SK108㉔
重量 g	35	57	118	318	30	58	256	136	74	44	11	150
石質	珪質頁岩	珪質頁岩	硬質泥岩	デイサイト	デイサイト	珪質頁岩	デイサイト	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	硬質頁岩	デイサイト

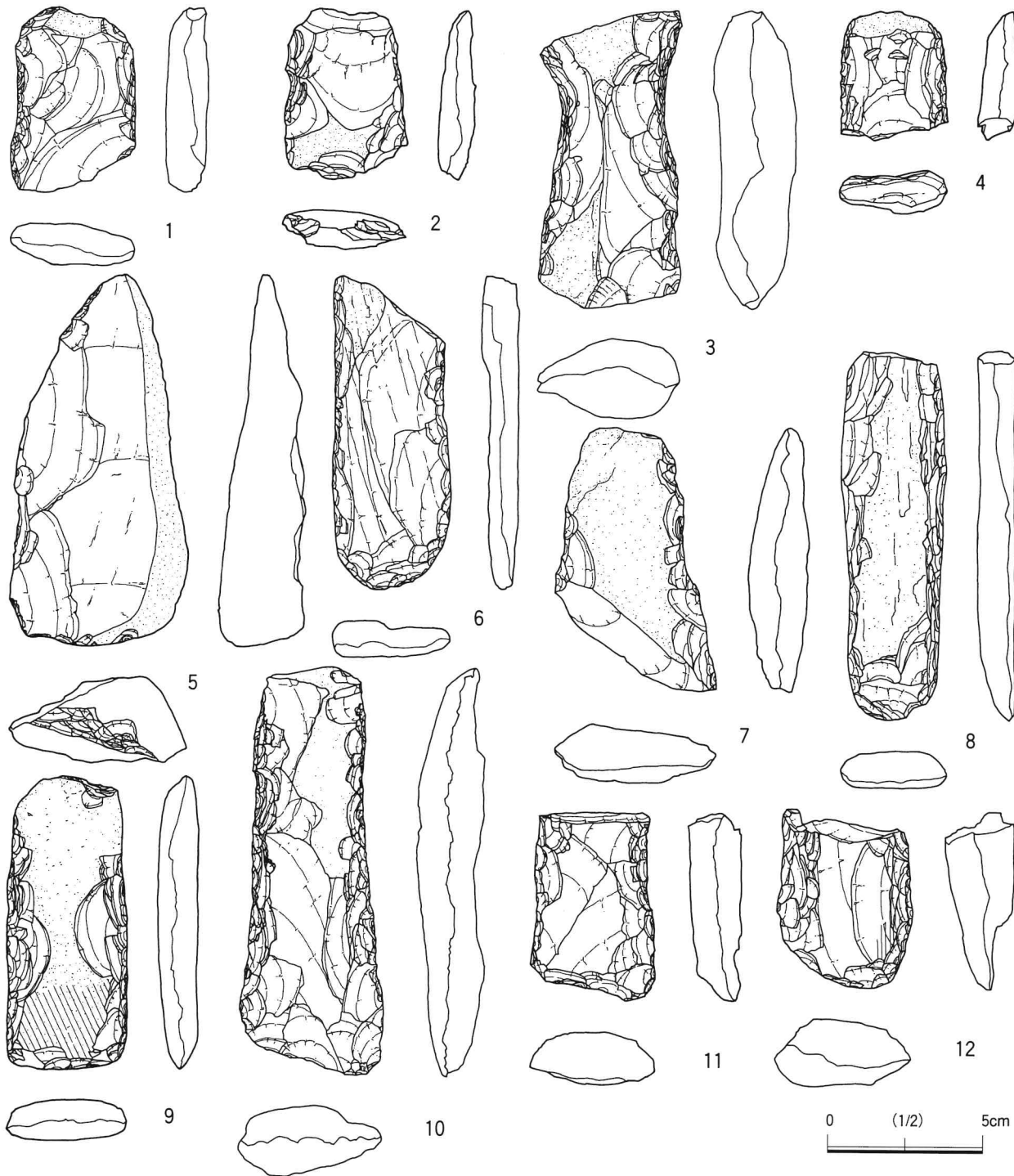
第137図 3区出土石器（5）打製石斧③



No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
遺構	SK112㉔	SK112㉔	SK112㉔	SK112㉔	SK125㉔	SK125㉔	SK125㉔	SK125㉔	SK125㉔	SK127㉔	SK129㉔	SK132㉔
重量 g	98	116	76	112	120	172	120	17	48	53	34	166
石質	珪質頁岩	デイサイト	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	デイサイト	珪質頁岩	デイサイト	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	デイサイト

第138図 3区出土石器（6）打製石斧④

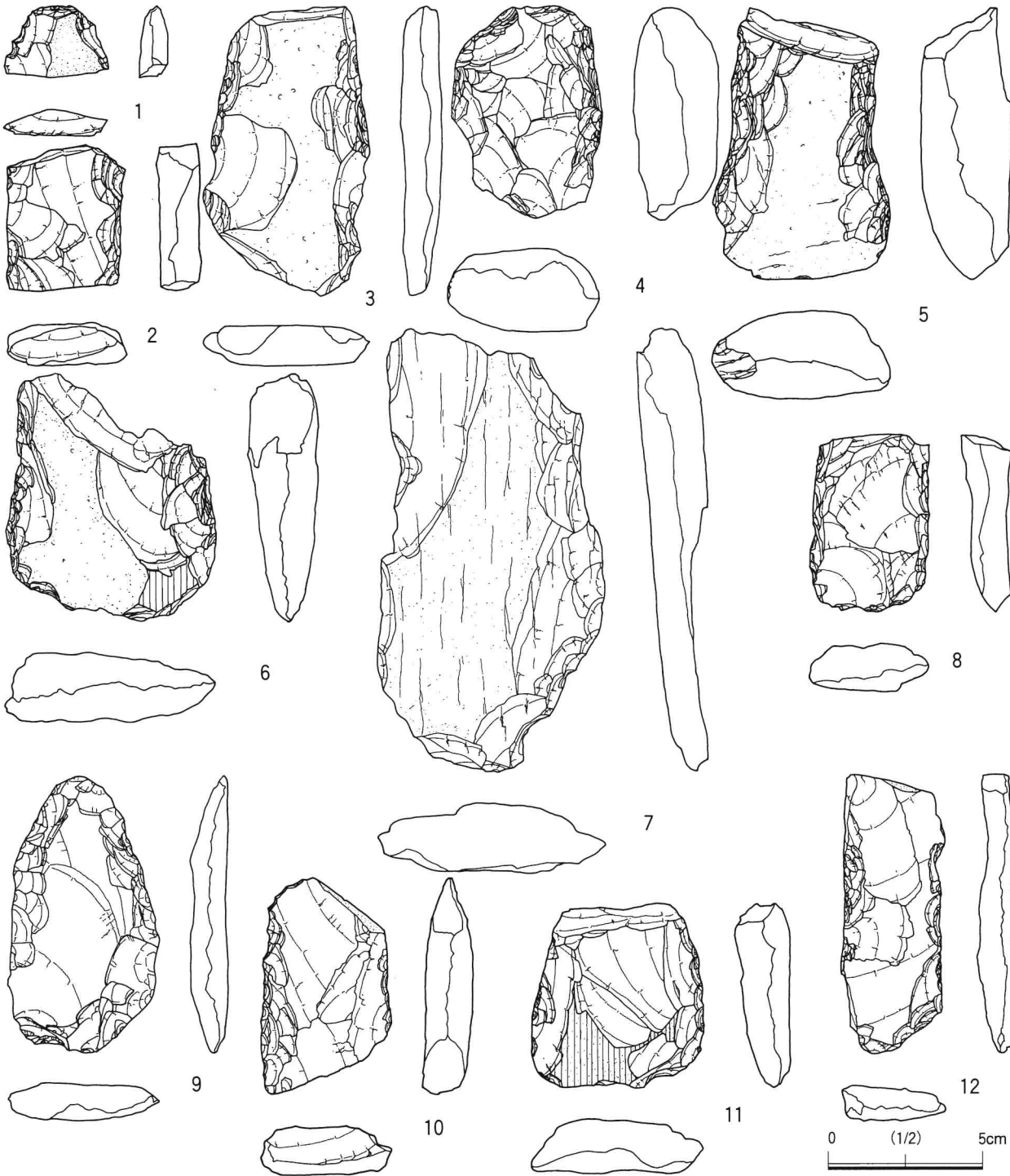
前頁第137図-2は、打製石斧としたが、楔形石器に転用されている。第138図-1は、使用の際に縦に大きな力が加わった見え、左下から大きく剥げており、2・5・12は良く使い込まれて使用痕がついている。第138図-6・8・9・10・11などは、横方向の力で折れている。5・7・12は中央をやや挟らせて着柄しやすく加工している。



No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
遺構	SK132㉔	SK152㉔	SK152㉔	SK153㉔	SK153㉔	SK154㉔	SK154㉔	SK154㉔	SK155㉔	SK155㉔	SK155㉔	SK155㉔
重量 g	36	29	132	24	162	56	75	73	75	140	57	54
石質	硬質泥岩	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	雲母石英片岩	珪質頁岩	雲母石英片岩	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩

第139図 3区出土石器 (7) 打製石斧⑤

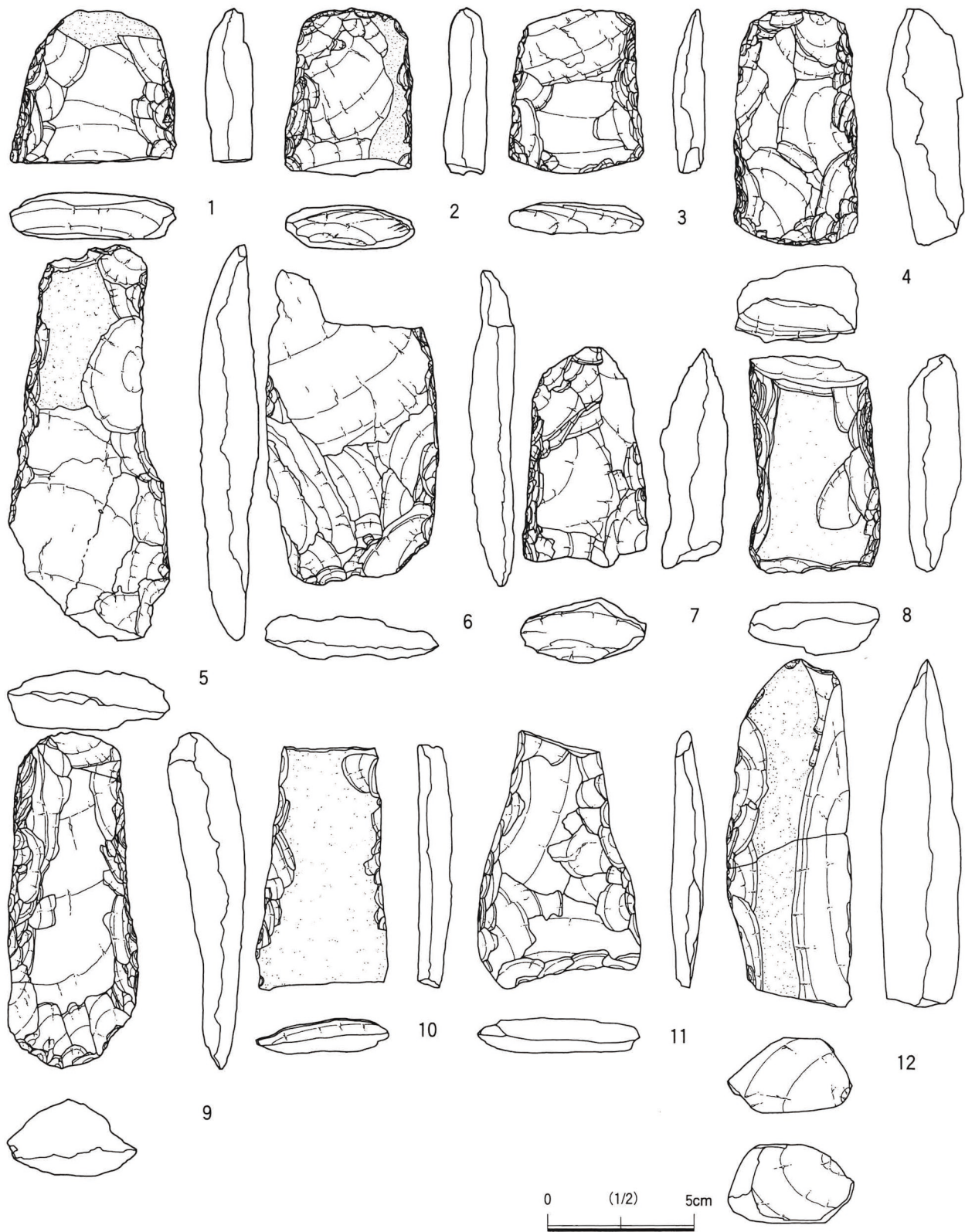
2は、楔形石器として転用されたものであろう。3は、両側縁の挟りを意識しており、前頁の5・7・12などに似た形態を示す。上下端が折れている。4・6・7・11・12は、使用による横方向の力が加わり折れている。こうした力は、土を起すような動作をしたとき加わるものとみられる。5は未製品と思われ、裏側は周縁調整されているが、削器の可能性もある。6・8は結晶片岩製で細身に作られる。9は使用により下端部の稜が摩滅している。



No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
遺構	SK155㉔	SK156㉔	SK155㉔	SK155㉔	SK157㉔	SK157㉔	SK157㉔	SK157㉔	SK158㉔	SK158㉔	SK159㉔	SK159㉔
重量 g	8	56	85	112	57	112	220	58	39	53	70	43
石質	珪質頁岩	珪質頁岩	デイサイト	硬質泥岩	珪質頁岩	流紋岩	雲母石英片岩	珪質頁岩	黒色頁岩	流紋岩	珪質頁岩	流紋岩

第140図 3区出土石器 (8) 打製石斧⑥

1は、上端破片である。2は、上下が折れている。3は下端が破碎している。4は、分銅形に近い短冊形打製石斧の基部破片であろう。5・6・8・11は上部が折れている。6・11は、使用により稜が摩滅した後、さらに使用されたようで、微細な剥離が観察できる。7は大形であるが未製品だと考えられる。9は周縁調整が丁寧であり、へら状のスクレーパーである可能性がある。



No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
遺構	SK159㉔	SK159㉕	SK159㉖	SK159㉗	SK159㉘	SK160㉙	SK160㉚	SK162㉛	SK162㉜	SK162㉝	SK162㉞	SK162㉟
重量 g	67	47	37	108	138	78	78	86	122	52	72	160
石質	流紋岩	流紋岩	珪質頁岩	珪質頁岩	デイサイト	流紋岩	流紋岩	デイサイト	硬質泥岩	デイサイト	流紋岩	流紋岩

第141図 3区出土石器（9）打製石斧⑦



No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
遺構	SK163㉑	SK163㉒	SK165㉓	SK165㉔	SK165㉕	SK165㉖	SK165㉗	SK165㉘	SK165㉙	SK166㉚	SK166㉛	SK167㉜
重量 g	48	67	57	33	30	156	88	67	44	170	182	138
石質	珪質頁岩	珪質頁岩	デイサイト	珪質頁岩	珪質頁岩	デイサイト	珪質頁岩	珪質頁岩	デイサイト	細粒輝石安山岩	珪質頁岩	デイサイト

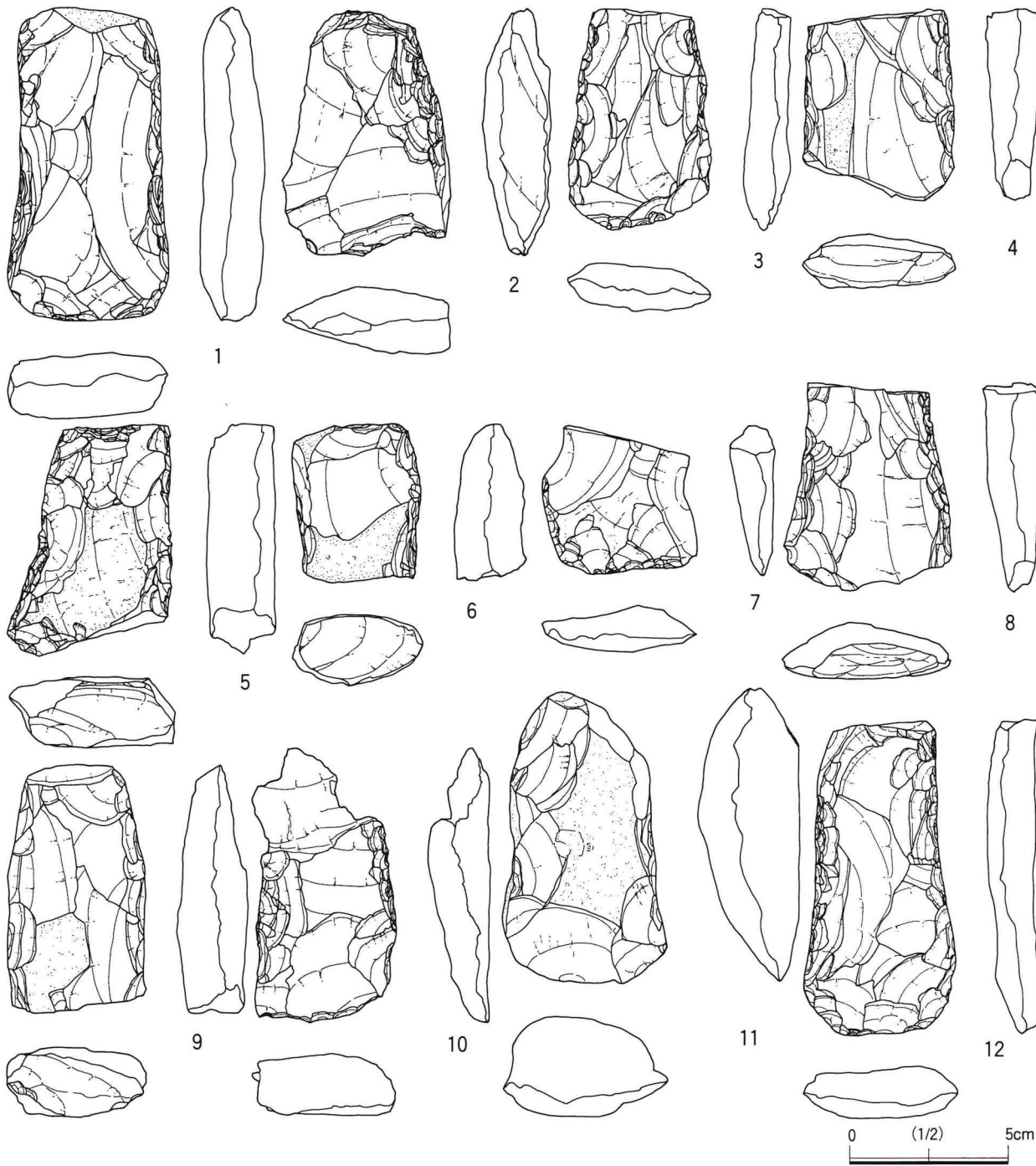
第142図 3区出土石器（10）打製石斧⑧

1は、前頁の4と同じく、寸詰まりになっている。長さ8cm位が、使用できる限界だろうか。4は、分銅形の破片である。12は、礫素材の打製石斧としたが、特異な形態であり、敲石の一種かもしれない。



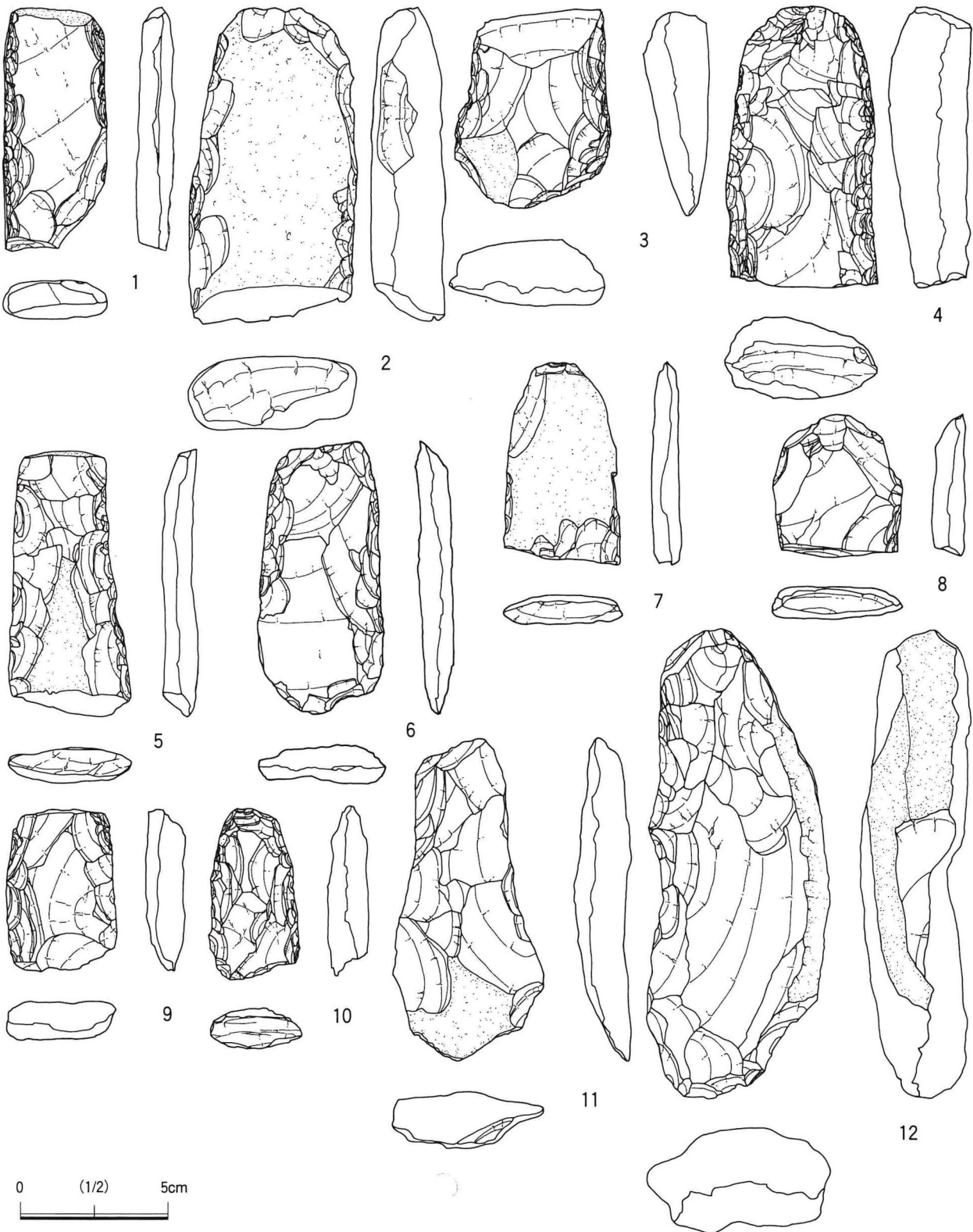
第143図 3区出土石器 (11) 打製石斧⑨

1は、下端が折れている。2は、上下端が折れており、破損後、熱を受けている。3・6は小形品である。3は、楔形石器として転用されたものか、スクレイパーとして使用されたものであろう。6は、撥型の打製石斧であると考えたが、スクレイパーかもしれない。4・5・8・11は、上端が折れている。4は、実測図の据え方が上下逆だったかもしれない。7は、上下が破砕している。9は、下端が破砕している。10は、くびれ部を作り出した短冊形打製石斧の上端であり、下部は折れている。12は、結晶片岩の礫を素材とし、厚みを減じて完成させている。刃部は作り出していないが、使用されており、この種の石器に鋭い刃部が必要なかったことを示している。



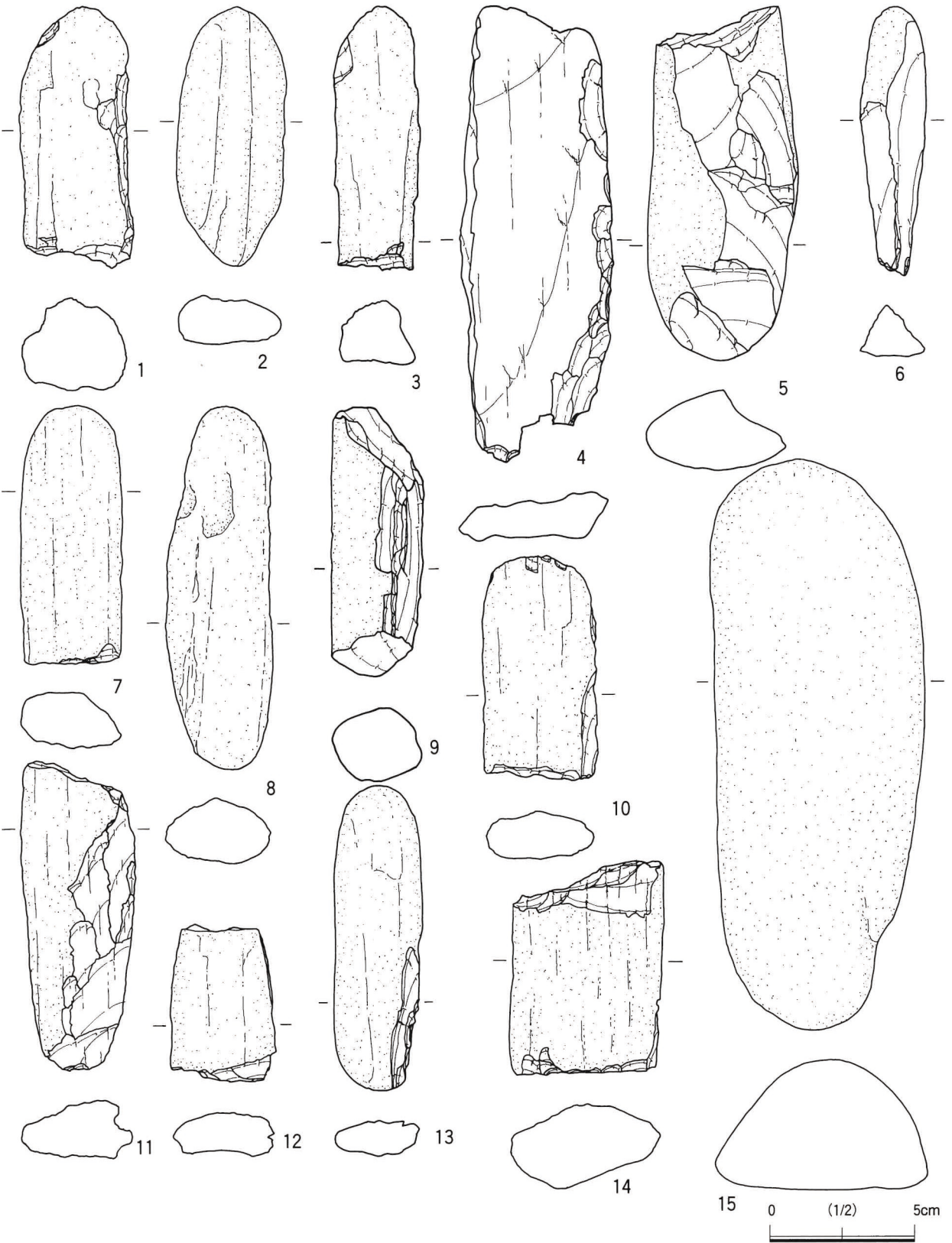
第144図 3区出土石器 (12) 打製石斧⑩

1・12は、元来もっと長かったものが使用に伴って割れたため、刃部を再生したものと考えられる。11は、使用により下端が割れ、最終的に使用に耐えられない長さになったものと考えられ、刃部は再調整されていない。2・6・9は、下部が割れている。3・7・10は、上部が折れている。4・5は、上下端が折れている。8は、上部が折れ、下端が割れている。2・5・8は撥形に近いが、短冊形打製石斧の範疇に含まれるだろう。



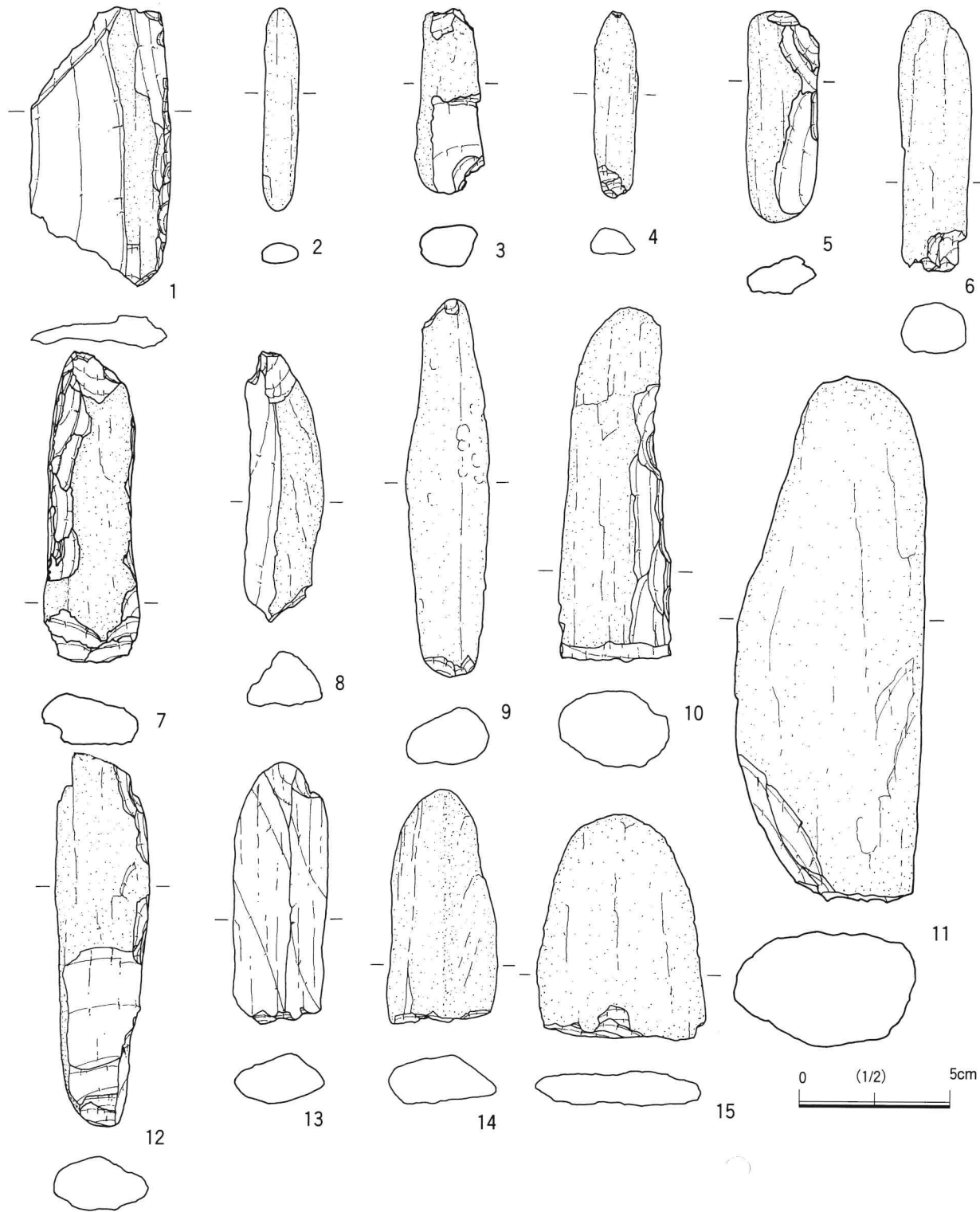
No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
遺構	SK173⑩	SK178⑩	SK187⑩	SK187⑩	SK188⑩	SK188⑩	SK195⑩	SK195⑩	SK197⑩	SK199⑩	SK202⑩	SK199⑩
重量g	53	234	89	182	52	52	32	28	27	27	97	392
石質	珪質頁岩	流紋岩	硬質泥岩	硬質泥岩	硬質泥岩	デイサイト	デイサイト	デイサイト	珪質頁岩	珪質頁岩	デイサイト	珪質頁岩

第145図 3区出土石器 (13) 打製石斧⑪



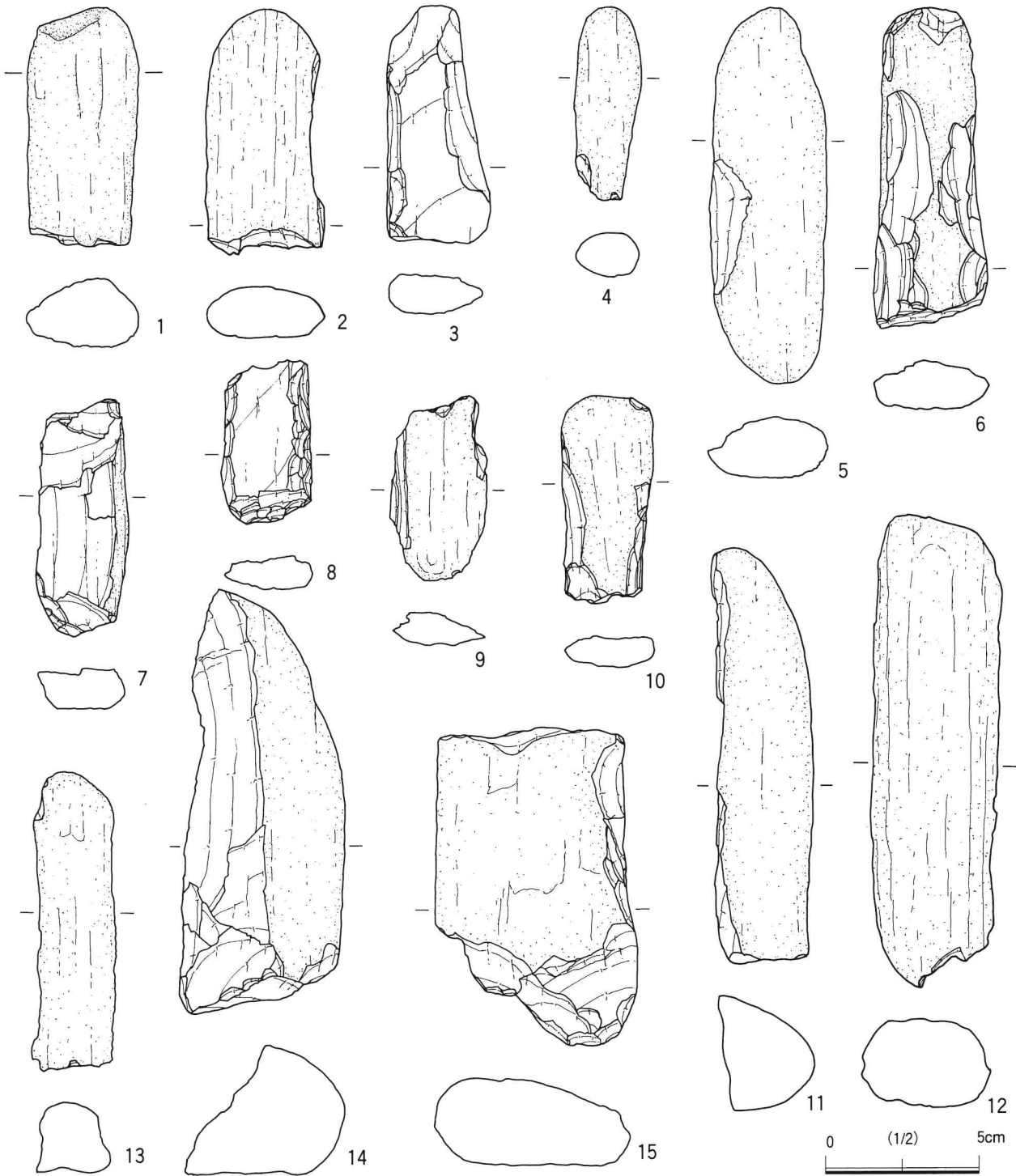
No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
遺構	SK87①	SK87②	SK88②	SK93②	SK96①	SK96③	SK96②	SK97②	SK103⑨	SK100-104②	SK103⑫	SK112③	SK108②	SK125③	SK112⑦
重量g	160	88	96	190	234	40	94	148	130	85	100	50	66	150	895
石質	雲母石英片岩	緑色片岩	雲母石英片岩	黒色片岩	変玄武岩	緑色片岩	黒色片岩	黒色片岩	雲母石英片岩	雲母石英片岩	黒色片岩	緑色片岩	黒色片岩	黒色片岩	雲母石英片岩

第146図 3区出土石器 (14) 棒状礫①



No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
遺 構	SK125㉟	SK130㉟	SK132㉟	SK154㊸	SK156㉟	SK157㊸	SK157㉟	SK158㉟	SK158㉟	SK160㉟	SK160㉟	SK164㊸	SK165㉟	SK166㉟	SK166㊸
重量g	57	11	23	10	31	61	68	47	91	90	670	84	53	66	68
石 質	黒色片岩	雲母石英片岩	黒色片岩	雲母石英片岩	黒色片岩	緑色片岩	黒色片岩	雲母石英片岩	緑色片岩	雲母石英片岩	黒色片岩	黒色片岩	緑色片岩	緑色片岩	黒色片岩

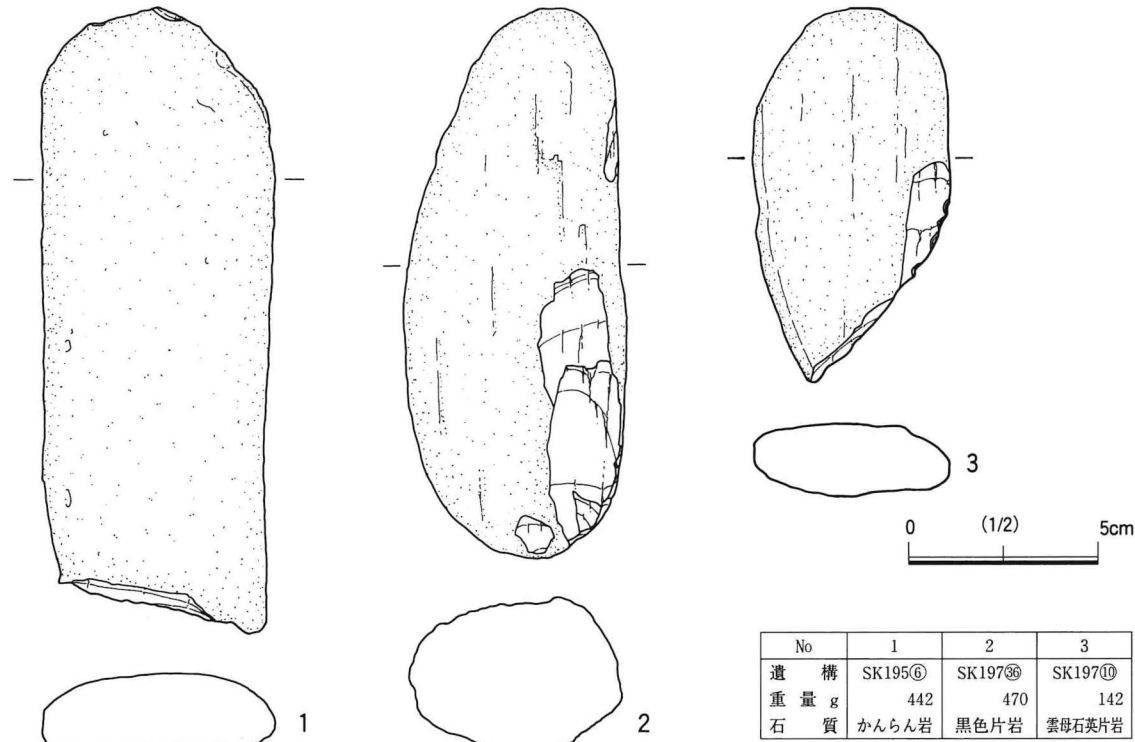
第147図 3区出土石器 (15) 棒状礫②



No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
遺 構	SK166㉟	SK166㉟	SK167㉟	SK167㊸	SK167㉟	SK172㉟	SK168㉟	SK168㊸	SK170㉟	SK174㊸	SK169㉟	SK169㉟	SK188㉟	SK172㊸	SK188㊸
重量g	96	89	48	30	152	92	45	26	16	32	256	342	94	358	268
石 質	黒色片岩	黒色片岩	雲母石英片岩	黒色片岩	黒色片岩	雲母石英片岩	黒色片岩	雲母石英片岩	緑色片岩	黒色片岩	緑色片岩	黒色片岩	雲母石英片岩	緑色片岩	黒色片岩

第148図 3区出土石器 (16) 棒状礫③

細長い形状をした使用痕ある礫、およびそれに類する棒状礫は、ほとんどが結晶片岩類を石材としている。これらの石器は、竪穴住居域である2区と、土坑の群在する3区の双方から、一定量が出土している。縄文時代中期の土器とともに出土しており、この時期に属するものと考えられる。



第149図 3区出土石器 (17) 棒状礫④

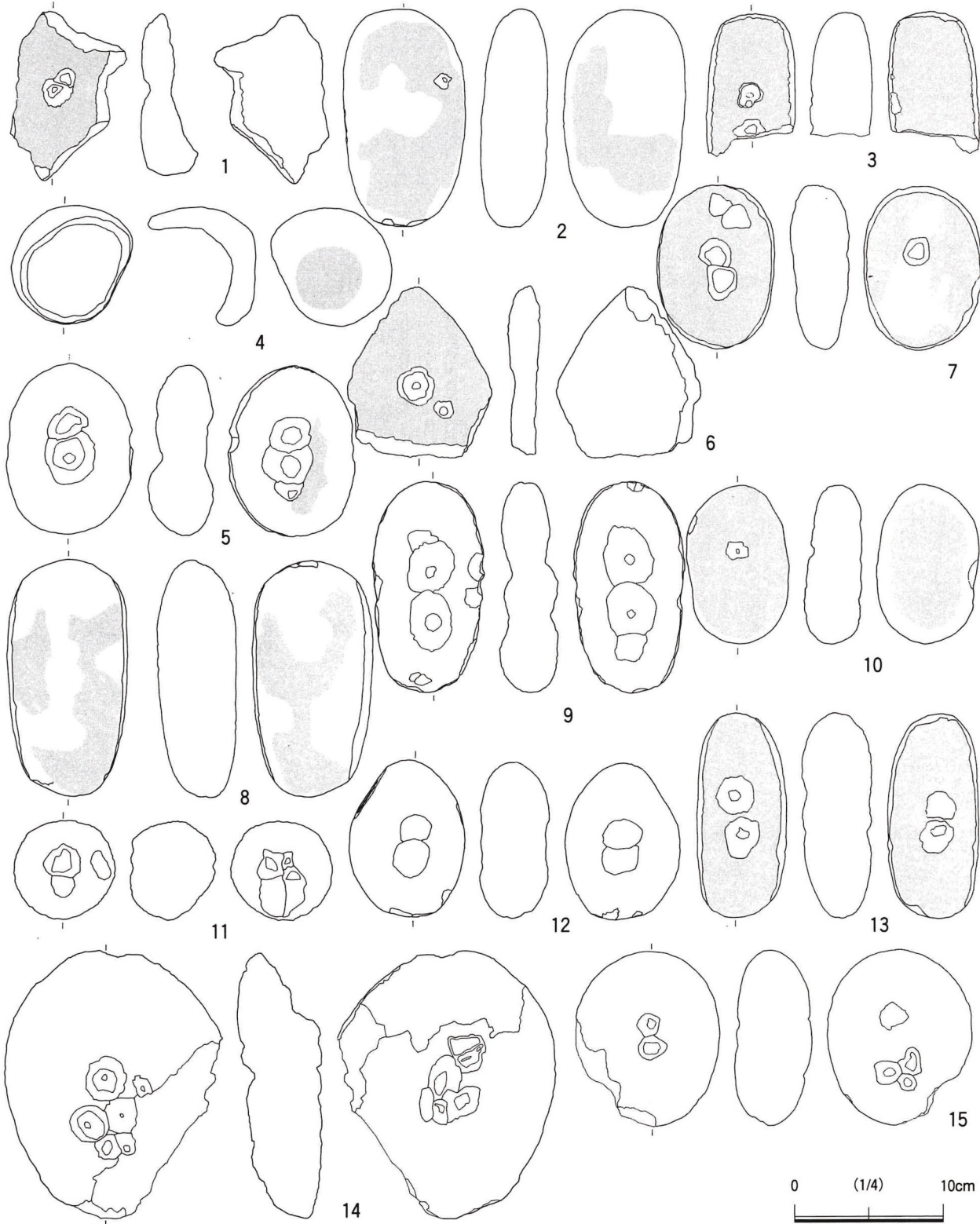
今回、報告したのは縄文時代のものと思われる遺構から出土したものだけである。しかし遺構外出土のものでも、古墳時代以降の住居跡などからよく出土し、「コモ編み石」などと呼ばれる棒状の礫とは、形態・重さ等が異なるため、所属時期の区別はつく。具体的には、古墳時代以降の「コモ編み石」は大きさがほぼ一定で縄文時代の棒状礫より重く、断面形は厚みがあり、使用痕は全く観察できず、石質も結晶片岩とは限らないのに対し、縄文時代の棒状礫は、大きさがまちまちではあるがおおむね相対的に細く、打撃の痕跡が付いているものが多く、石質は結晶片岩類、中でも雲母片岩が多いようにうかがえる。

今回報告するにあたり、当初この縄文時代の棒状礫を、古墳時代の棒状礫と区別するために敲石と名付け、報告しようとしたが、使用の痕跡としては打撃による剥離・破碎痕しか観察できない上、まれに使用痕が全くないものもあり、複数の器種が含まれている可能性もあるため、単に棒状礫と呼ぶことにした。

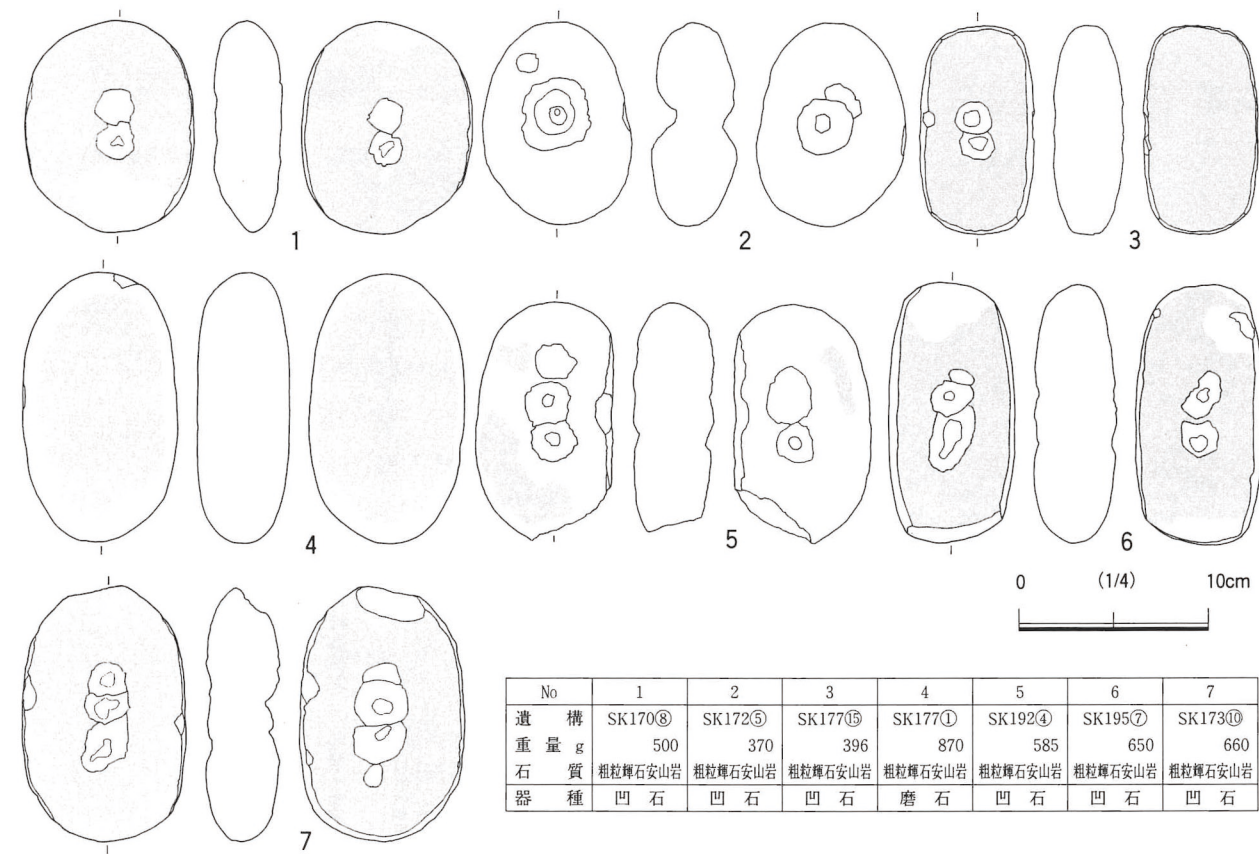
具体的に、個々の遺物について触れると、第146図-4・5や第148図-15は、打製石斧の未製品破片、第148図-3・6・8などは打製石斧の破片である可能性がある。第147図-9は、自然面で構成されているのか、磨いて整形されているのか不明確ではあるが、形状は松村のいう「短剣形石器」に非常に近く、これに該当するものであると思われる（前掲29頁 松村1999）。第149図-1は、石材がカンラン岩で、第134図-1・3に掲載した磨製石斧と同じ石材であり、磨製石斧を製作するために準備された素材である可能性がある。ほかに、楔形石器のような使用痕があるものもある。土器の項でも触れたが、これらの中にはツールとして使用されたもののほかに、粉碎して結晶片岩粒にし、土器胎土に混入するため準備された原材料が含まれている可能性もある。

以上のように、ここに分類した棒状礫は、いくつかの器種、また原材料が混在している可能性が高いものの、結晶片岩類を石材とし、棒状の形態をなすという共通点があるため、まとめて報告した。

今後は、形態や使用痕の他、結晶片岩類中での石質の違いなどにも着目しながら、この棒状礫をどのように細分できるか、検討していくことが必要であろう。



第150図 3区出土石器 (18) 磨石・凹石①



第151図 3区出土石器 (19) 磨石・凹石②

磨石・凹石については一括して扱った。これは、磨った痕跡とくぼみの双方が共存する石器がほとんどであり、両者を別の器種として分けることができなかったからである。実測図では、磨られてツルツルになっている部分をスクリーン・トーンで表現している。本遺跡3区土坑出土の磨石・凹石は、細長い形状で2孔を基本とするタイプ、石罅のような形状で2孔を基本とするタイプ、球に近く明確な孔が無いタイプ、やや大形不定形で孔の数に傾向のないタイプの4者に分けられる。そしてこれらの形状は、実は、使用の最終的な姿であり、使用の中途では見かけ上、別のタイプに見えるものもある。全体的には破損しているものが少ないが、大形不定形で孔の数に傾向のないタイプには破損しているものが多い。

第150図-1は、赤色顔料が付着している。彩色土器に使用するために、第二酸化鉄などを碎き、それが付着したものであろう。第150図-6・14などはこれと同じ大形不定形で孔の数に傾向のないタイプだろう。

第150図-2・8にはくぼみがないが、念入りに磨られて横断面形は隅丸方形に整形されている。この後くぼみが付けられ、第150図-3・9・13や第151図-3・6のような、細長い形状で2孔を基本とするタイプの磨石・凹石になるのであろう。これらは、この時期に多い定型的なものである。第151図-4は、表裏は磨られているものの、側縁は磨られておらず、第150図-8より一つ前の段階であると考えられる。

第150図-7や、第151図-1・5・7などは、これより少し寸詰まりの、石罅のような形状になるタイプの磨石・凹石であり、定型的である。

第150図-4は、節理によってタマネギ状に剥がれた石である。裏面が磨られて一部平らになっているが、これが器の底部として作り出されたものであるのか、球形だった時に磨られた使用痕であるのか判然としない。内面に使用痕は観察できないので、一応、後者である可能性が高いものとしておきたい。第150図-11は、球形の定型的なタイプである。通常、ツルツルに磨かれている例が多いが、この石器に関しては表面が荒れており、くぼみも付いている。これは、磨石と凹石の用途の親和性を示しているといえ、両者を別の器種とする論拠を、より薄める資料の一つであるといえる。



第152図 3区出土石器 (20) 石皿①

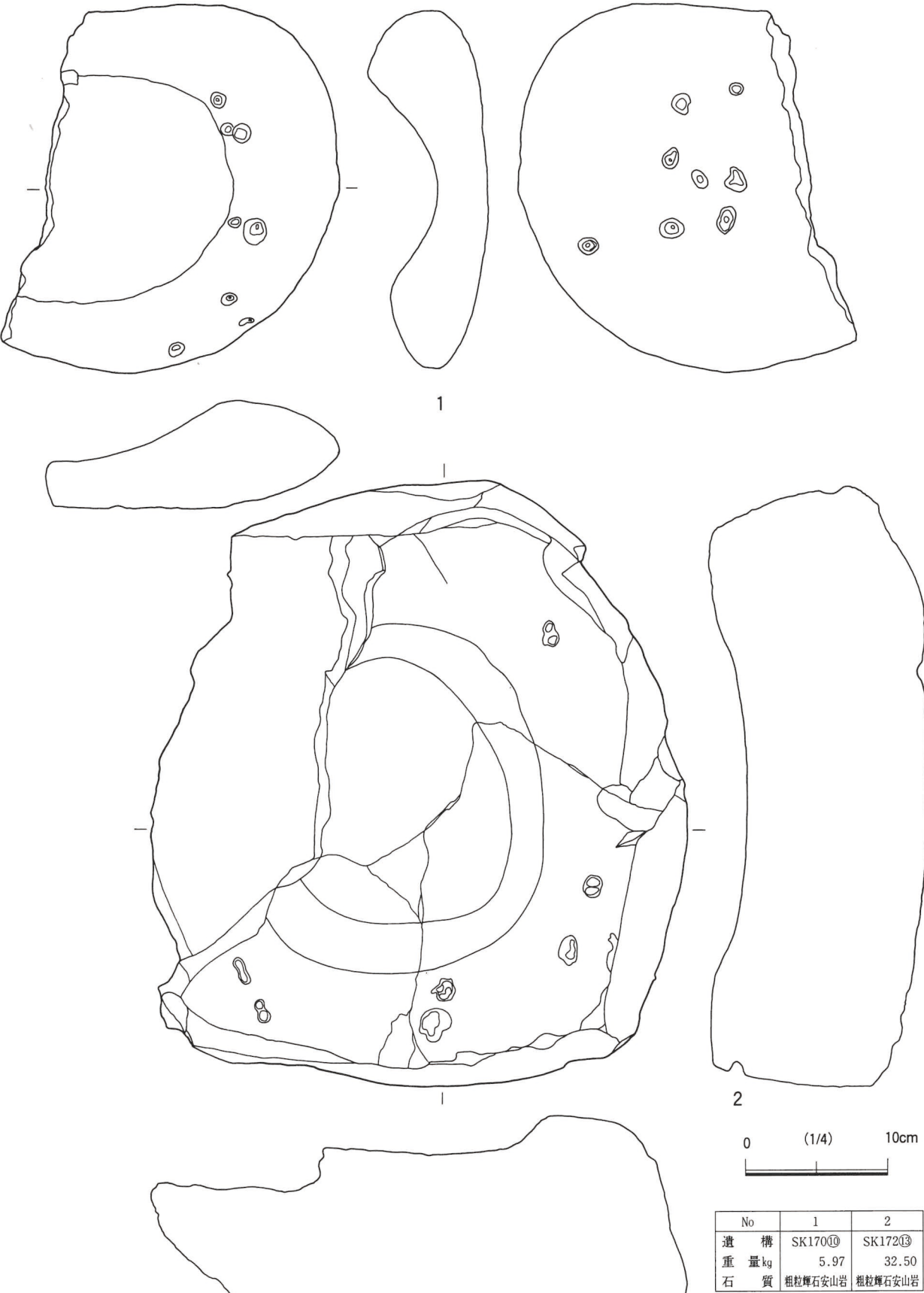


第153図 3区出土石器 (21) 石皿②

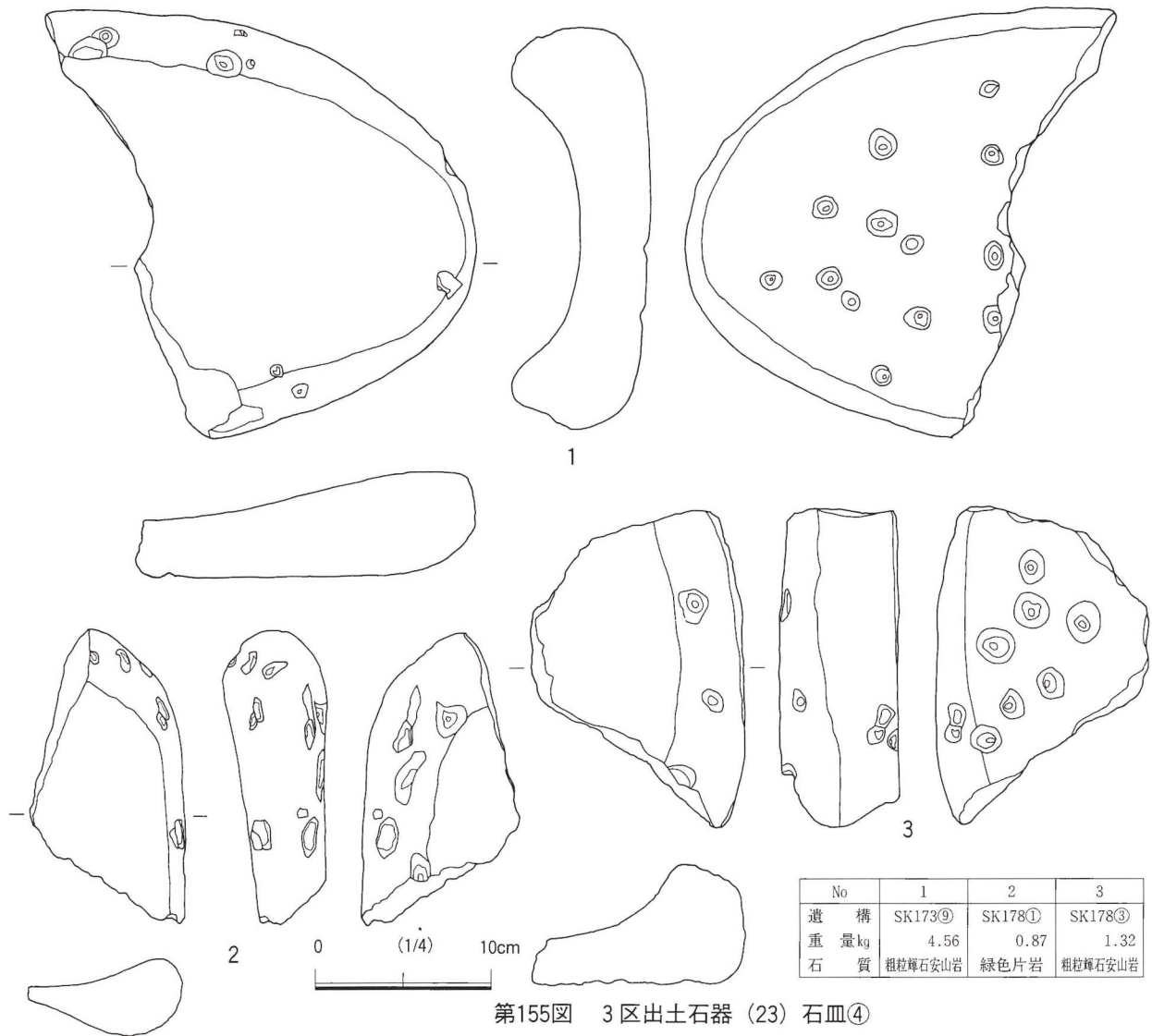
石皿は、中期に多くなり、この時期、植物質食料の利用が増加したとされる説の、根拠の一つになっている。

3区の土坑からは、石皿が13点出土している。いずれも破損している。全ての資料が、いくつかのくぼみ孔を持つが、多孔石に見られるくぼみ孔との相違点は見受けられない。つまり、石皿と多孔石の関係は、磨石と凹石の関係と同じように、別の器種として切り離すことができないほど親和的であるといえる。しかしながらこれが、そもそも石皿としての機能と多孔石としての機能が、同時に期待されていたものなのかどうか問題となる。

石皿の磨り面や破損した破断面にはくぼみ孔がほとんど無いこと、磨り面とくぼみ孔は表裏の関係であることが多いことを考え合わせると、少なくともある段階では、磨り面とくぼみ孔が同時に存在していたことが予想される。さらには、磨る機能が先にあってくぼみ孔が後で開けられたのか、その逆なのか、それとも同時なのかが問題となるが、本遺跡の資料は、くぼみ孔が後で開けられたものが多いように見受けられる。



第154図 3区出土石器 (22) 石皿③



第155図 3区出土石器 (23) 石皿④

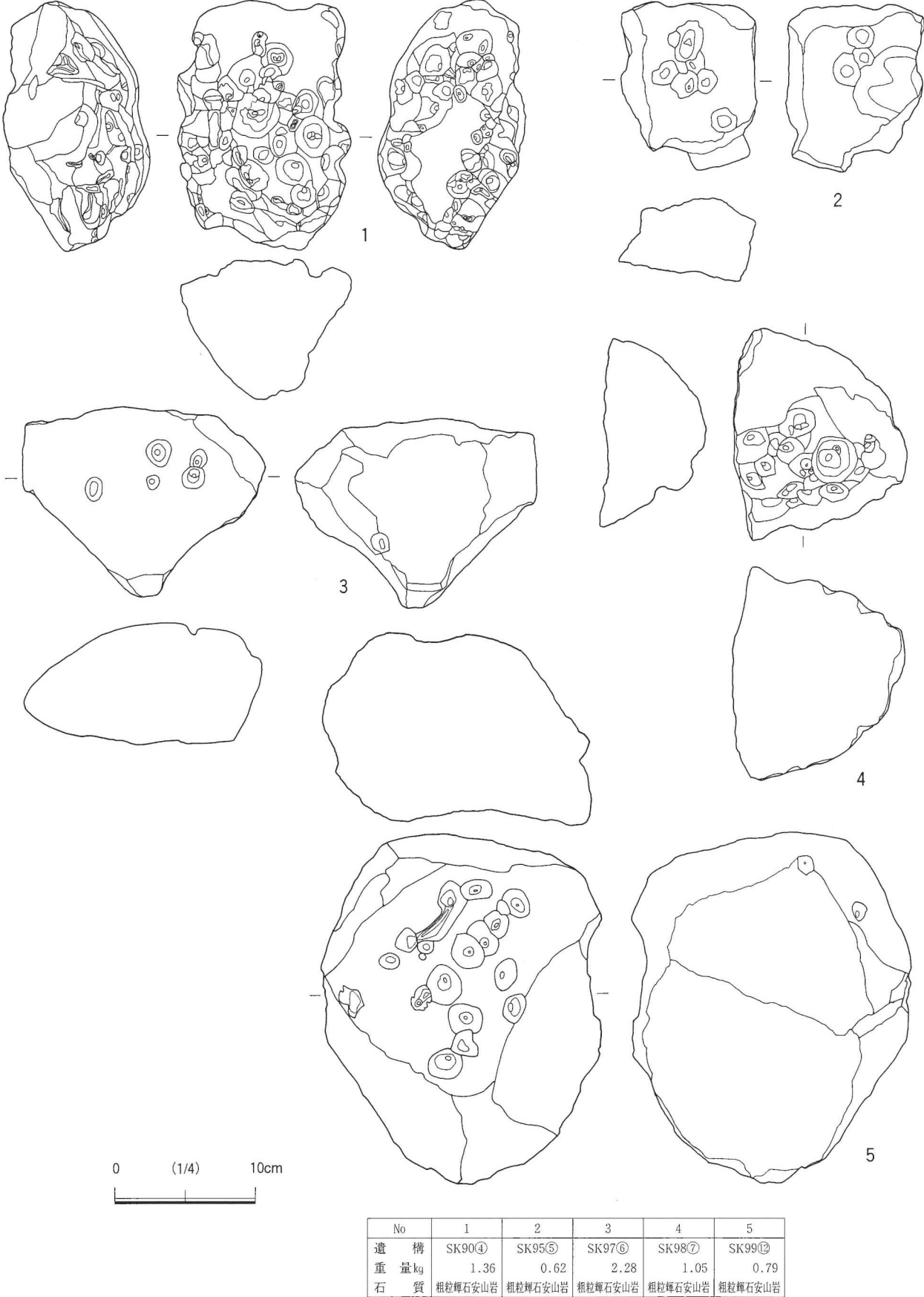
そもそも石皿は、磨石・凹石と組み合わせてナッツ類をはじめとした植物質食料、ときには動物質食料を粉碎するための加工具であるとされている。これを事実であったと仮定し、その作業手順を検討することとあわせ、より多くの資料について、磨り面とくぼみ孔の前後関係を検討していくことにより、くぼみ孔と磨り面との関係やその使用方法を明らかにすることができるだろう。

石皿・多孔石と組み合わせて使用されたであろう磨石・凹石についても、石皿・多孔石と同様、はじめに磨って、その後にくぼみ孔が開けられた様子がうかがえる。そのため、石皿・多孔石と、磨石・凹石を組み合わせた道具は、磨る行為に後続して孔を開ける行為がおこなわれたか、交互におこなわれたと考えられる。

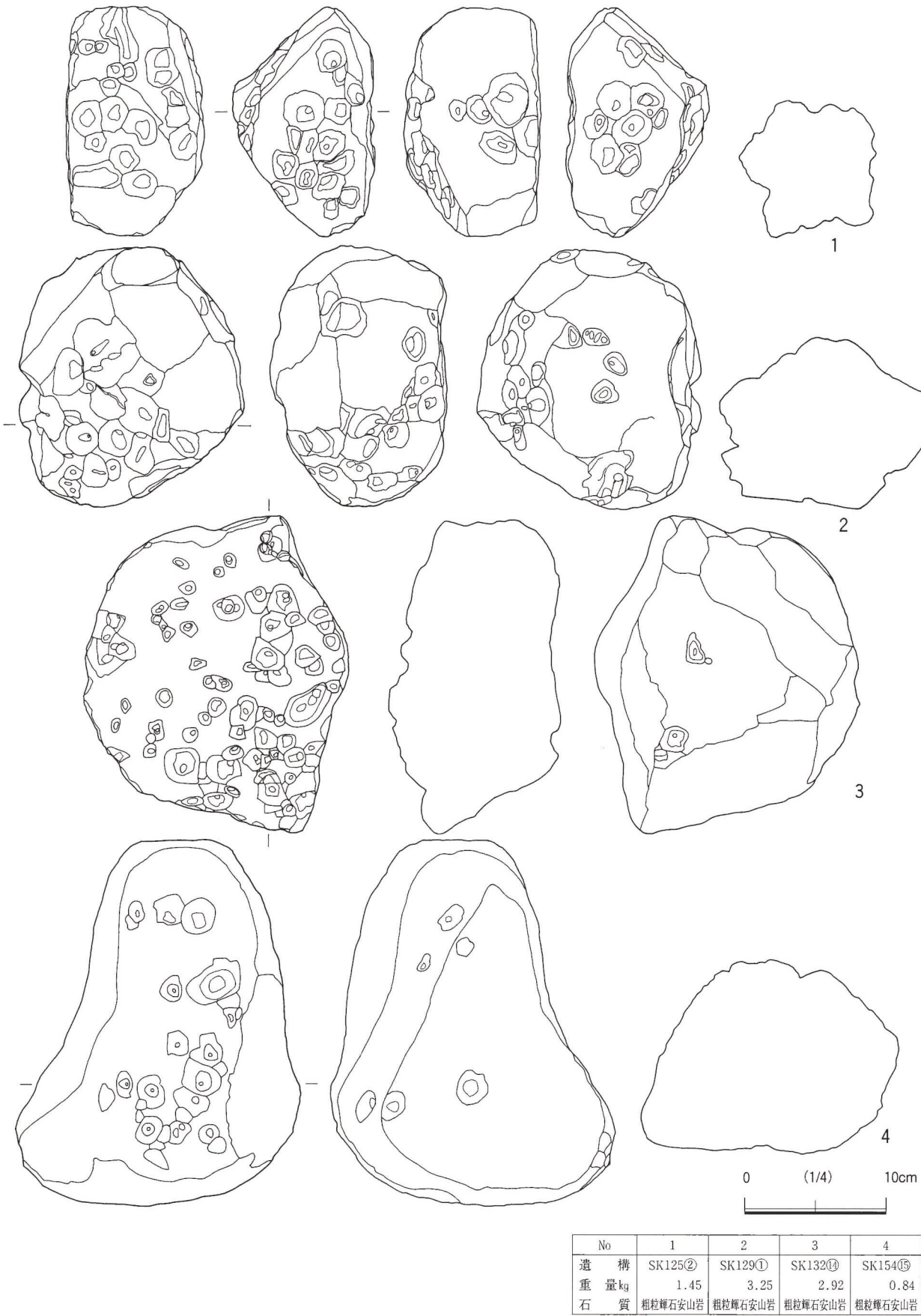
表が石皿、裏が多孔石となっている資料については、適宜裏返して使用していたのかもしれない。扁平で裏返しても安定し、かつある程度軽い資料には、こうした資料が多い。そして、第154図-2のような、大形の据え付けるような資料の裏側には、くぼみ孔のあることは少ない。

3区出土の石皿の中には、被熱しているものが少なくなく、タール状の付着物が観察できるものもある。新潟県長岡市岩野原遺跡例などから、食物を粉碎し練った上で、加熱に用いたこともあったものと考えられるが、この遺跡のものは破断面にも熱の跡がみられるものが多く、おそらく廃棄後の被熱であろう。

石皿には、人為的に破壊されたと考えられるものもあり、何らかの祭祀行為に使用されたものがあったとする説もあるが、3区土坑出土の石皿で、そうした痕跡が明白なものはない。重さ32.5kgを測る第154図-2の資料以外は、破損した後で自然礫とともに扱われ、土坑に納められた可能性が高い。



第156図 3区出土石器 (24) 多孔石①



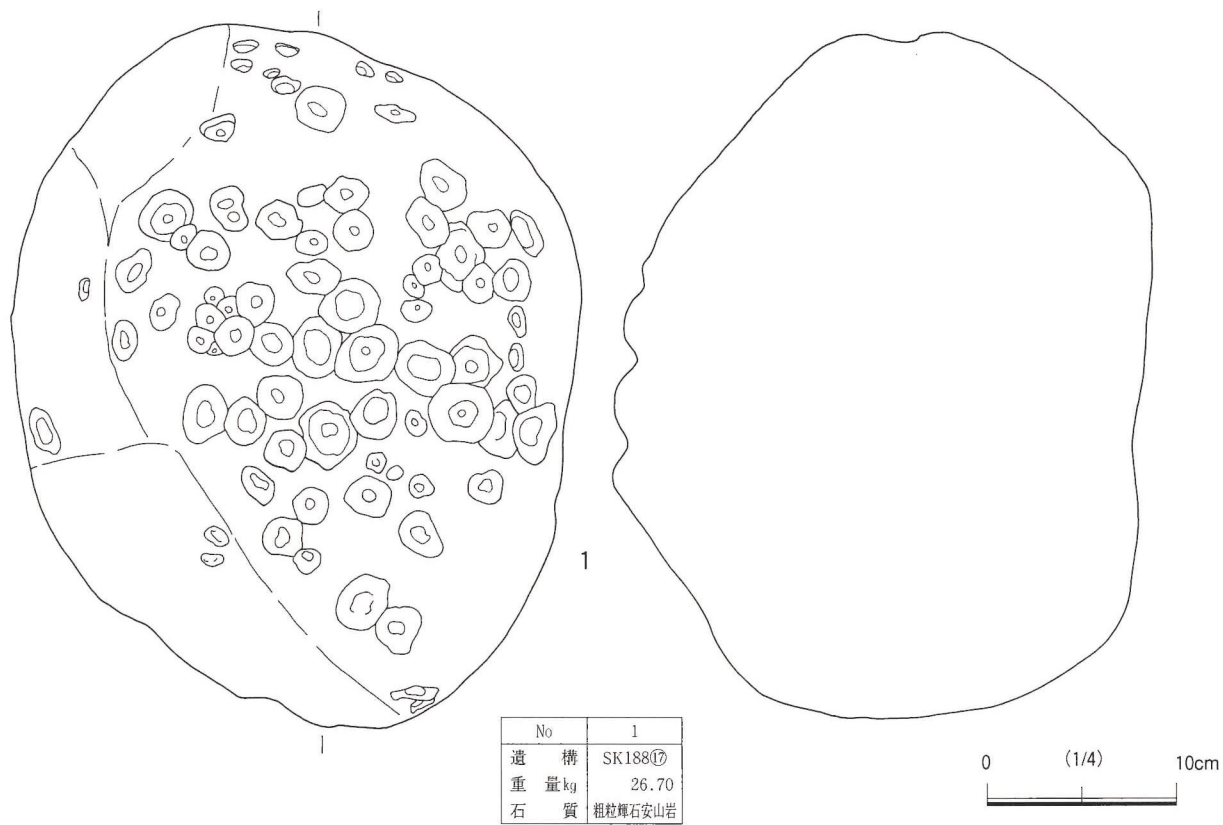
第157図 3区出土石器 (25) 多孔石②



第158図 3区出土石器 (26) 多孔石③

石器は、製作方法の違いで、通常、礫石器・打製石器・磨製石器に分類されているが、本稿では敲打によって成形された石器を、敲打石器と呼ぶ。この石器は、これまで礫石器や磨製石器に含められて考えられていた。

例えば、石皿のくぼみや多孔石の孔は、成形されたことによるのか、あるいは使用の結果なのか結論づけられていなかったものの、礫石器に分類されることが多かった。しかし、多孔石や凹石のくぼみは、使用痕ではなく、目的的な成形である可能性が高く、これらを単なる礫石器と位置づけることはできない。石皿についても、磨製石器とする考え方もあるが、主たる成形が敲打による可能性が高い。こうした事実と、敲打技法の採用が、石器製作史の上で重要な技術革新の一つであることを考え合わせると、これら石器を新たに分類することが適切と考えた。こうしたことはすでに佐原真が概説書の中などでも指摘している。



第159図 3区出土石器 (27) 多孔石④

この敲打石器の典型例の一つが多孔石である。石皿との近縁性についてはすでに述べたとおりで、両者を明確に区別することは難しい。一方、凹石と多孔石の関係、特にどこで両者を線引きするのかということについても検討が必要である。学史はさておき、一体我々が何をもって両者を分けているのかという点が問題となる。

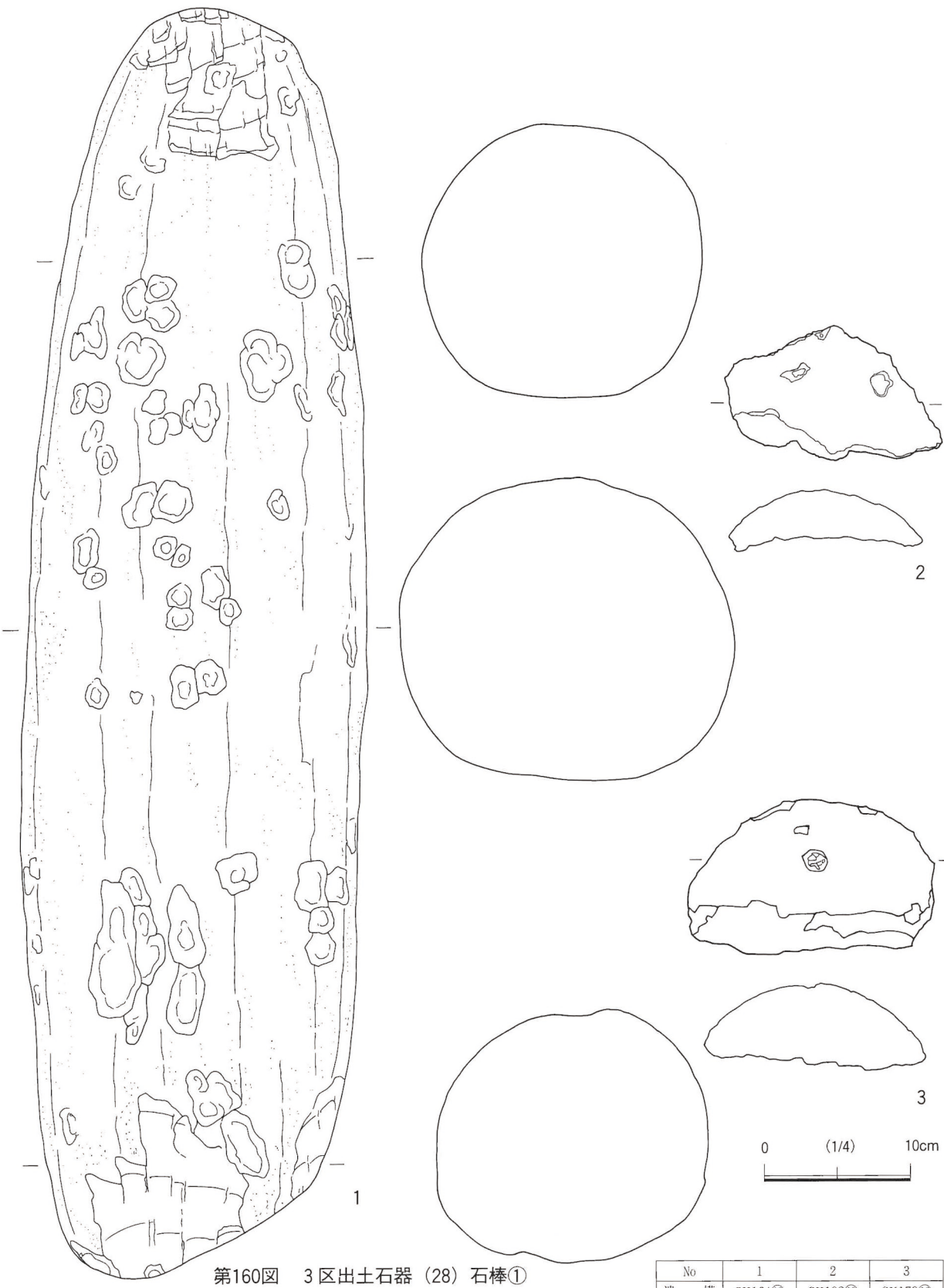
この両者の線引きを検討する場合、石器の名称からすると、孔の数が第一に問題になる。しかし、孔の数は決定的な問題ではなく、機械的にこれで分類することはできない。強いていえば、中央部というある程度決まった場所に、少数の孔が空いているのが凹石、無作為に多数の孔が空いているように見えるのが多孔石ということになるだろう。

孔一つ一つの形や特徴はどうであろうか。これを観察すると、少なくともこの遺跡の出土資料では、凹石の孔が皿状に浅くくぼんでいることが多いのに対し、多孔石はすり鉢状に深くくぼんでいることが多い。また空けられた孔の表面も、凹石の孔のほうが、多孔石よりなめらかなことが多い。

形状や大きさはどうだろう。凹石が片手で把握できる大きさであることが多いのに対し、多孔石は安置して使う大きさである。この点は石器の機能・使用方法にも関わる重要な点であり、分類の決め手としたいところであるが、第150図-14のように、凹石として分類される資料の中にも、安置して使用すべき大きさのものもある。

結局、今までのところ以上3つの視点から総合的に判断して分類しているのであるが、本来これらの石器の分類を検討する際には、一度4つの器種全てを細分・型式設定し、大分類（器種）を再構成する必要があるだろう。

なお、表裏とも多孔石として使用されているものには、石皿兼多孔石と同じように、扁平なもの（第158図-1など）もあるが、むしろ第156図-1や第157図-1・2のように、ごろっとした形態の石の各面に、執拗にくぼみ孔が施されるもののほうが多い。このことは、置いたとき、石皿ほどは安定せずとも、多孔石に期待される機能が果たせたということを示している。



第160図 3区出土石器 (28) 石棒①

1は、結晶片岩製太形石棒である。棒状の自然石を敲打により成形したものである。先端と末端の欠けは、製作前のものだろう。2・3は熱を受け、変色している。磨いて成形した太形石棒の破片である。

No	1	2	3
遺構	SK164⑩	SK102⑬	SK173⑮
重量kg	71.30	0.45	1.26
石質	黒色片岩	角閃石ダイサイト	角閃石ダイサイト